

長安寺廃寺跡 宮地嶽古墳群

朝倉町文化財調査報告書

第 10 集

2002

朝倉町教育委員会

序

本書は、本書は、平成5年度に行われた長安寺廃寺跡調査を契機とする長安寺廃寺跡、宮地嶽古墳群の報告書です。朝倉町には日本書紀斉明天皇7年に出現する「朝倉橘広庭宮」や斉明天皇、中大兄皇子に関する伝承が数多く残っています。広庭宮については、本書で報告される朝倉町大字須川の長安寺集落に存すると長く信じられてきました。昭和の前後2回の考古学調査により広庭宮の所在が否定されたことにより町民の多くが落胆を隠せませんでした。しかしながら、広庭宮が朝倉町に所在しないとしたものではなく、広庭宮の時代のすぐ後に有力な古代寺院が朝倉町に所在することを証明するものであります。広庭宮については、その直接の所在を明らかにすることはもちろんですが、その背景にある、その場所が選ばれた理由や前後の時代情景が求められます。これは、歴史を知ること私たちの未来・文化の道しるべにつながるからです。国家の国家の中枢である「宮」選定にあたっては当然その「地の利」が基準となったにちがいありません。この「地の利」こそが今後のまちづくりの重要な柱になるとなるでしょう。

この事業は平成5年度より平成13年度の長きにわたり町内外の関係者の多大なご協力の賜と思っております。特に、調査を快諾していただいた長安寺区地権者のみなさま、各調整を尽力していただいた長安寺区長、指導委員の先生方をはじめ福岡県総務部文化財保護課、福岡県教育庁北筑後教育事務所のみなさまには多大なご協力をいただき心からお礼を申し上げます。

最後に、本報告書が地域住民はもとより町民各位の文化財保護思想の普及に活用されますとともに、今後予想される周辺遺跡の調査に学術資料として役立つことを願うものであります。

平成14年3月31日

朝倉町教育委員会

教育長 辛 川 正 人

例 言

1. 本書は、平成5年度及び平成8年度から13年度に国庫及び県費の補助を受けて朝倉町教育委員会が実施した発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺跡は福岡県朝倉郡朝倉町大字須川に所在する長安寺廃寺跡及び大字宮野に所在する宮地嶽古墳群である。
3. 本書に記載した遺構・遺物図は、後藤洋子・田中真子の協力を得て姫野健太郎が作成した。
4. 本書に掲載した遺構・遺物写真は姫野が撮影した。なお、遺跡の空中写真は空中写真企画に委託した。
5. 出土遺物の復元・整理は姫野の指導のもとで後藤洋子・田中真子が行った。また、木簡の保存処理については奈良国立文化財研究所、木製品保存処理については夜須町教育委員会の手を煩わせた。
6. 『平成5年度の調査』については福岡県国立博物館対策室 赤司善彦氏に執筆していただいた。

本文目次

I	はじめに	
	位置と環境	1
	調査の関係者	4
II	長安寺廃寺跡の調査	
	研究史	5
	平成5年度の調査	7
	平成9年度の調査	16
	平成10年度の調査	22
	平成11年度の調査	25
	平成12年度の調査	27
	文字資料	33
	木製品	38
	瓦	39
	寺域及び伽藍配置	39
III	宮地嶽古墳群の調査	
	調査に至る経過	45
	調査の概要	45
	宮地嶽古墳の墳丘復元	48

図版目次

図版 1	1	宮地嶽より長安寺集落を望む
	2	第 7 次調査全景（西から）
図版 2	1	第 7 次調査遺物出土状況
	2	第 8 次調査（南から）
	3	第 8 次調査（西から）
図版 3	1	第 8 次調査柱列検出状況
	2	第 9 次調査大溝断面
	3	第 9 次調査粘質土流れ込み状況
	4	第 11 次調査（東から）
	5	第 12 次調査（南から）
図版 4		第 7 次調査出土遺物①
図版 5		第 7 次調査出土遺物②
図版 6		第 7 次調査出土遺物③
図版 7		第 7 次調査出土遺物④
図版 8		第 7 次調査出土遺物⑤
図版 9		第 8 次調査出土遺物①
図版 10		第 8 次調査出土遺物②
図版 11		第 8 次調査出土遺物③
図版 12		第 9 次調査出土遺物①
図版 13		第 9 次調査出土遺物②・11 次調査出土遺物①
図版 14		第 11 次調査出土遺物②
図版 15		第 11 次調査出土遺物③
図版 16		第 12 次調査出土遺物
図版 17		第 8 ～ 11 次調査出土墨書土器①
図版 18		第 8 ～ 11 次調査出土墨書土器②
図版 19		第 8 ～ 11 次調査出土墨書土器③
図版 20		木製品
図版 21		第 8 ～ 11 次調査出土瓦
図版 22	1	宮地嶽古墳全景（南から）
	2	A トレンチ
	3	B トレンチ
	4	C トレンチ
	5	D トレンチ
図版 23		宮地嶽古墳出土埴輪

挿図目次

第 1 図	朝倉町位置図	1
第 2 図	朝倉町周辺遺跡分布図	2
第 3 図	長安寺廃寺跡調査地域図	6
第 4 図	第 7 ～ 9 次調査地位置図	7
第 5 図	第 7 次調査トレンチ設定図	8

第6図	第7次調査出土遺物実測図①	9
第7図	第7次調査出土遺物実測図②	10
第8図	第7次調査出土遺物実測図③	11
第9図	第7次調査出土遺物実測図④	13
第10図	第7次調査出土遺物実測図⑤	14
第11図	第7次調査出土遺物実測図⑥	15
第12図	第8次調査地遺構配置図	16
第13図	第8次調査出土遺物実測図①	18
第14図	第8次調査出土遺物実測図②	19
第15図	第8次調査出土遺物実測図③	20
第16図	第8次調査出土遺物実測図④	21
第17図	第9次調査大溝断面実測図	22
第18図	第10次調査地位置図	23
第19図	第9次調査出土遺物実測図	24
第20図	第11次調査地位置図	26
第21図	第11次調査遺構配置図	27
第22図	第11次調査地土層模式図	27
第23図	第11次調査出土遺物実測図①	28
第24図	第11次調査出土遺物実測図②	29
第25図	第12次調査地位置図	30
第26図	第12次調査地遺構配置図	30
第27図	第12次調査土層模式図	30
第28図	第13次調査地位置図	31
第29図	第13次調査トレンチ断面図	31
第30図	第14次調査地位置図	32
第31図	第12次調査出土遺物実測図	33
第32図	墨書土器実測図①	34
第33図	墨書土器実測図②	35
第34図	墨書土器実測図③	37
第35図	墨書土器実測図④	38
第36図	木製品実測図	40
第37図	瓦実測図①	41
第38図	瓦実測図②	42
第39図	寺域想定図	43
第40図	宮地嶽古墳群地域図	46
第41図	宮地嶽古墳トレンチ実測図	47
第42図	宮地嶽古墳出土遺物実測図	48
第43図	宮地嶽古墳墳丘復元図	43

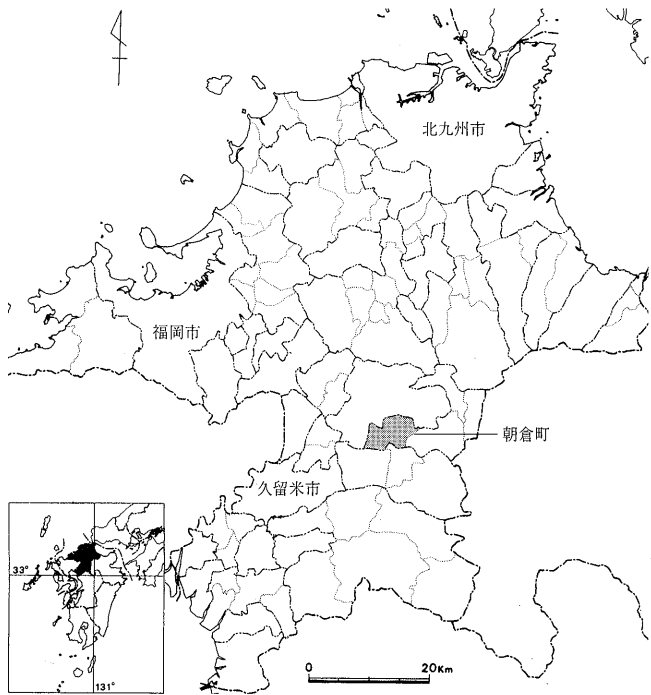
表目次

第1表	長安寺廃寺跡調査表	5
第2表	墨書土器一覧表	36

I. はじめに

位置と環境

朝倉町は福岡県のはば中央部に位置し、東経130度41分～130度47分、北緯33度20分～33度24分内に位置する。国土地理院発行の地形図(25,000分の1)では図幅名「甘木」及び「吉井」に含まれる。人口は約1万人で、農業を基盤とする町である。東は朝倉郡杷木町、西と北は甘木市、南は浮羽郡田主丸町・吉井町と接する。町域の南側には筑後川が西流し、肥沃な沖積平野を形成する。町域の中央部は洪積台地が形成されており、多くの遺跡が認められる。町域の北部は山地が占め、山麓には300基以上の古墳が確認されている。



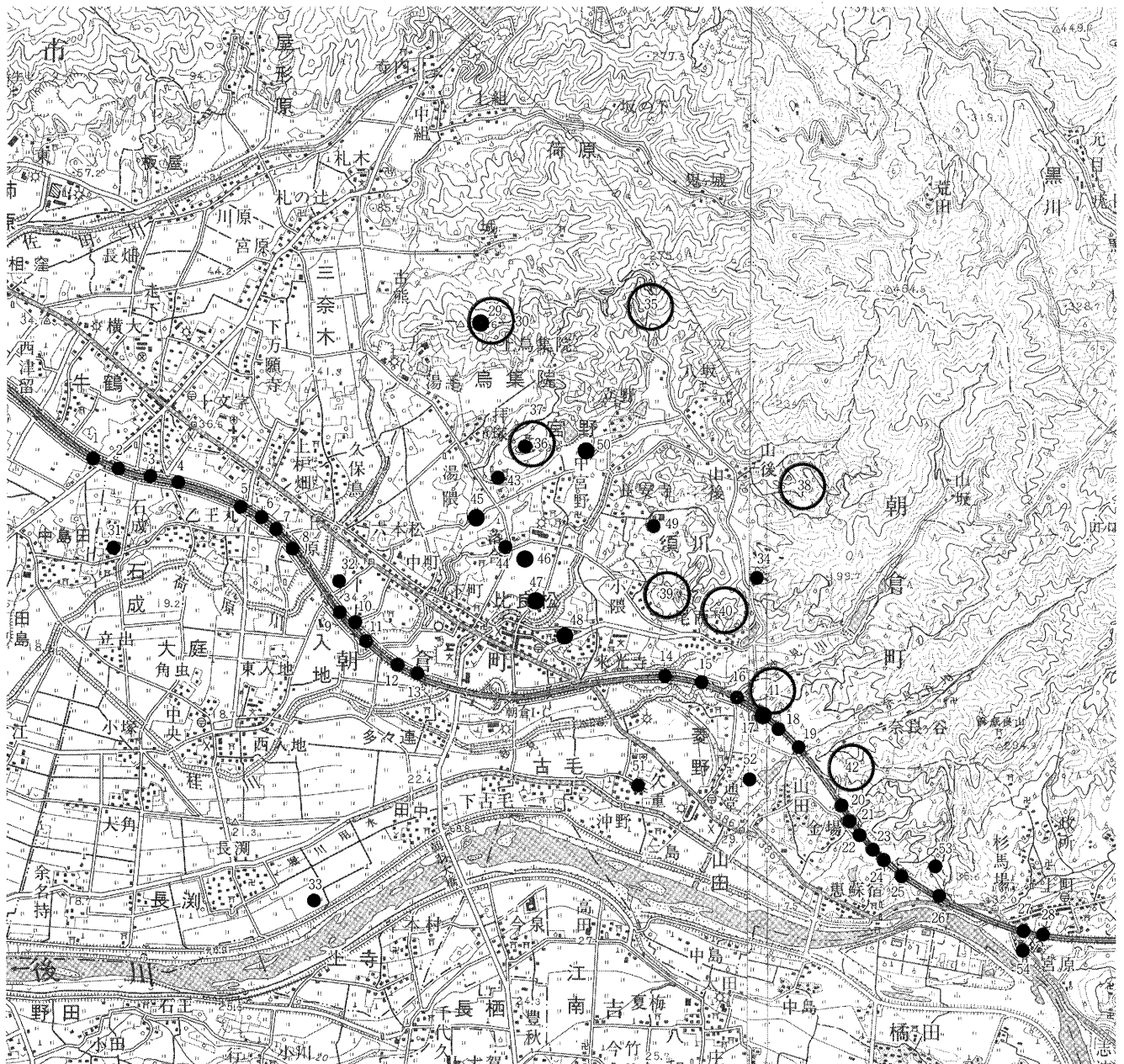
第1図 朝倉町位置図

朝倉町は筑後川右岸の南側斜面に立地し、筑後川という巨大な川と沖積平野がおりなす豊かな土地に恵まれ、また豊後と有明・博多を結ぶ要衝の地であるため、歴史的に重要な地である。町内でもっとも解明が待たれるのが「朝倉橘広庭宮」であろう。広庭宮は日本書紀斉明天皇七年に出現する「宮」であり、当時の東アジア情勢を窺う上でも、また中央集権萌芽期の日本を解明する上でも重要な遺跡となる。朝倉町には、神社縁起、伝承などに斉明・天智天皇に関わる多くの説話が残されており、町内には広庭宮の有力な候補地が存在する。広庭宮解明については、大規模・規格的な建物群と7世紀後半の遺物の存在により証明されるものであり、今後の考古学調査が待たれる。

現在の朝倉町域は『延喜式』に見える上座郡に属している。文献が少なく中世以前の状況については不明な点が多い。また、遺跡については昭和55年から行われた九州横断自動車道建設に伴う発掘調査に拠るところが多い。九州横断自動車道の前後に行われた調査と併せて旧石器時代より概観する。

旧石器時代の遺跡としては、原の東遺跡(佐々木編1999)でナイフ形石器などが出土する包含層が調査されており、A T火山灰の層が確認されている。また、鎌塚遺跡(井上編1992)、山ノ神遺跡(井上編1992)、上の宿遺跡(井上・木下編1991)ではナイフ形石器や台形石器などが出土している。縄文時代早期では石組炉・集石遺構が原の東遺跡で発見されている。また、押型文土器は座禅寺遺跡(児玉・中間編1994)、長田遺跡(井上編1994)などで発見され、治部ノ上遺跡(児玉・中間編1994)からは土壙14基が確認されている。前期の遺構・遺物は外之隈遺跡(小田編1996)で住居跡が確認されており、上の宿遺跡(井上・木下編1991)で甕式土器が出土している。中期は上の宿遺跡、稗畑遺跡(井上・木下編1991)で並木式土器が出土している。後期は長島遺跡(小田編1999)、上の宿遺跡、稗畑遺跡で西平式土器などが出土している。晩期では長田遺跡で竪穴状遺構・土壙などが確認されている。朝倉町を含む甘木市、朝倉郡東部では旧石器・縄文時代についての調査事例が少なく、不明な部分が多いものの、出土遺物は豊富であり、今後の調査が期待できる時代である。

弥生時代の住居跡・貯蔵穴群は中道遺跡(伊崎編1996)、上の原遺跡(井上編1990, 小田編1993・1995)、長島遺跡、原の東遺跡、鎌塚遺跡、長田遺跡などで調査されている。墓地では大庭久保遺跡(佐々木編



- | | | | |
|-----------|-----------|-------------|------------|
| 1 塔ノ上遺跡 | 15 中妙見遺跡 | 29 烏集院古墳 | 42 山田古墳群 |
| 2 大環端遺跡 | 16 原の東遺跡 | 30 烏集院古墳群 | 43 湯の隈古墳 |
| 3 石成久保遺跡 | 17 堤古墳 | 31 石成遺跡 | 44 矢林遺跡 |
| 4 中道遺跡 | 18 鎌塚遺跡 | 32 大庭宇土ノ上遺跡 | 45 中の原遺跡 |
| 5 西法寺遺跡 | 19 山の神遺跡 | 33 長洲南方遺跡 | 46 前畑遺跡 |
| 6 経塚遺跡 | 20 長田遺跡 | 34 須川ノケオ遺跡 | 47 八並遺跡 |
| 7 大庭久保遺跡 | 21 金場遺跡 | 35 北八坂古墳群 | 48 井出野遺跡 |
| 8 上の原遺跡 | 22 上の宿遺跡 | 36 宮地嶽古墳 | 49 長安寺廃寺跡 |
| 9 狐塚南遺跡 | 23 恵蘇山遺跡 | 37 宮地嶽古墳群 | 50 垣添遺跡 |
| 10 治部ノ上遺跡 | 24 稗畑遺跡 | 38 山後山古墳群 | 51 古毛遺跡 |
| 11 座禅寺遺跡 | 25 大迫遺跡 | 39 小隈古墳群 | 52 剣塚古墳 |
| 12 才田遺跡 | 26 外之隈遺跡 | 40 上須川古墳群 | 53 本陣古墳 |
| 13 東才田遺跡 | 27 杷木宮原遺跡 | 41 妙見墳墓群 | 54 志波宝満宮古墳 |
| 14 長島遺跡 | 28 中町裏遺跡 | | |

第2図 朝倉町周辺遺跡分布図 (1/50,000)

1995)、上の原遺跡、原の東遺跡、上の宿遺跡などが調査されている。特に上の原遺跡については住居・墓地・貯蔵穴等の調査が充実しており、「クニ」としての纏まりを感じる。九州横断自動車道関係の調査以来、弥生時代の遺跡の調査が行われていないが、上の原、石成地区などの台地縁辺は注視していく必要がある。

古墳時代の集落では、上の原遺跡で住居跡20軒や土壇・溝などが出土している。長島遺跡では竪穴住居の他、掘立柱建物跡などが確認されている。墓地では、治部ノ上遺跡、座禅寺遺跡で方形周溝墓が出土している。後期では上の宿遺跡、外之隈遺跡で墳墓群が出土している。群集墳は虚空蔵古墳群（高山1968）・北八坂古墳群（松本編1972・1978）・須川ノケオ遺跡（姫野編1997）などが調査されている。なお、前方後円墳が町内で3基確認されており、そのほかにも首長墓級の古墳が数基存在（姫野編2000）する。また、調査された墳墓以外にも、約300基の古墳が踏査により確認（松本1973）されている。

奈良・平安時代では、治部ノ上遺跡で奈良～平安初頭の竪穴住居跡が出土している。上の原遺跡では奈良時代の竪穴住居跡140軒以上が出土している。また、狐塚南遺跡（小池編1994）では中世の土壇墓、溝などが多数出土し、遺物に輸入陶磁器などが含まれている。また、平成12年度から開始された宮野地区のは場整備事業に伴い中ノ原遺跡、杉馬場遺跡、垣添遺跡、前畑遺跡（注1）などが調査され、朝倉町内で奈良時代の集落遺跡が充実しつつある。桂川左岸の井出野遺跡（注2）では企画性の高い長大な掘立柱建物が数棟確認され上座郡衙関連施設と考えられる。

歴史文献については、『和名抄』では上座を「カミツアサクラ」と読んでいる。古代から中世にかけては文献が少なくまた断片的であり、不明な部分が多いが、荘園として上座郡の地名が確認できる。奈良時代に創建された「長安寺廃寺」も力を失い、徐々に衰退したと考えられる。13世紀初頭頃から秋月氏が当地方の資料に登場し、直接支配は16世紀末まで続く。秋月氏は豊臣秀吉に敗れた後に宮崎に去り、江戸時代を通じて黒田氏の支配下となる。明治4年7月の廃藩置県により福岡藩は福岡県となり、現在に至る。なお、朝倉郡は上座、下座、夜須の三郡で明治維新を迎えたが、明治6年の大区小区制により上座郡は第九大区となり、朝倉町は第六小区から第十小区に所属した。明治九年に区画の改定があり、第七大区となり、朝倉町は第五小区と第六小区に属した。明治11年に郡区町村編成法が施行され、朝倉町は上座郡の14村となり、明治17年、明治22年、明治42年、昭和30年の度重なる合併を経て朝倉村となり、昭和37年の町制施行により朝倉町となった。

参考文献

- 井上裕弘編 1990 『上の原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（18）福岡県教育委員会
- 井上裕弘編 1992 『鎌塚・山ノ神・鎌塚西遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（22）福岡県教育委員会
- 井上裕弘・木下修編 1991 『上ノ宿・恵蘇山・稗畑遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（20）福岡県教育委員会
- 井上祐弘編 1994 『長田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（30）福岡県教育委員会
- 伊崎利秋編 1996 『中道・石成久保・大環端遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（39）福岡県教育委員会
- 小田和利編 1993 『上の原遺跡Ⅱ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（27）福岡県教育委員会
- 小田和利編 1995 『上の原遺跡Ⅲ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（33）福岡県教育委員会
- 小田和利編 1996 『外之隈遺跡Ⅱ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（40）福岡県教育委員会
- 小田和利編 1999 『長島遺跡Ⅱ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（55）福岡県教育委員会
- 小池史哲編 1994 『狐塚南遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（28）福岡県教育委員会
- 児玉真一・中間研志編 1994 『治部ノ上・座禅寺遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（32）福岡県教育委員会
- 佐々木隆彦編 1995 『大庭・久保遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（36）福岡県教育委員会
- 佐々木隆彦編 1999 『原の東遺跡Ⅱ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告（53）福岡県教育委員会
- 姫野健太郎編1997 『須川ノケオ遺跡』朝倉町文化財調査報告書第6集 朝倉町教育委員会
- 姫野健太郎編2000 『朝倉町の古墳と埴輪』朝倉町文化財調査報告書 第9集 朝倉町教育委員会
- 松本憲明 1973 福岡県遺跡分布地図
- 松本憲明 1973 『県営宮野地区開拓パイロット事業地区遺跡調査報告書』朝倉町文化財調査報告書第2集 朝倉町教育委員会
- 松本憲明 1974 『県営宮野地区開拓パイロット事業地区遺跡調査報告書（Ⅱ）』朝倉町文化財調査報告書第3集 朝倉町教育委員会

注1 平成12・13年度に朝倉町教育委員会により調査が行われた。

注2 平成13年度に朝倉町教育委員会により調査が行われた。

調査の関係者

総括 朝倉町教育長 田中 準造（平成5年度）仲山 毅（平成8年度）辛川 正人（平成8年度～）
教育課長 後藤 一正（平成5年度）徳永 光利（平成8～10年度）
本田 宏希（平成10～12年度）
仲山 徳（平成13年度）田中 信行（平成13年度）
文化振興係長 杉岡 孝行（平成5・8～10年度）寺岡万知子（平成10年度～平成13年度）
江藤 隆宣（平成13年度）
主任主事 久保 久雄（平成5年度庶務）
主任主事 姫野健太郎（調査・整理・庶務）
派遣指導 赤司 善彦（平成5年度・福岡県教育庁北筑後教育事務所より）

調査指導

元福岡県文化財審議委員 渡辺 正気
福岡大学教授 小田富士雄
第一経済大学教授 田中正日子

Ⅱ．長安寺廃寺跡の調査

研究史

朝倉町大字須川の長安寺区は朝倉町域の北西部に位置し、平成13年度現在で30戸弱の集落である。主な産業は水稻及び果樹栽培である。主要幹線道路が集落内を通過しないため、静寂な雰囲気が常に漂う。集落は北及び東を低丘陵が囲み、西側は南流する桂川に区切られ、南に開ける台地の奥まった場所である。『延喜式』によると、上座郡には、把伎と広瀬の駅が存在している。官道はおおむね現在の国道386号線に沿って存在したと考えられるが、駅は確認されていない。比良松集落付近では現国道の北側に「旧道」が通っており、長安寺廃寺跡はこの官道推定ラインから1.3km北に位置する。

さて、この長安寺区を有名としたのは福岡県はもとより、西日本でも重要な遺跡になるであろう「朝倉橋広庭宮」の推定地とされてきたことによる。しかしながら、昭和8・9年及び昭和48～50年にかけての発掘調査により「宮」跡の可能性が否定され、長安寺区付近の調査気運は無くなっていた。ただし、何れの調査でも古代寺院の所在を示す遺構や遺物が出土しており、長安寺区に重要な遺跡が存在することを否定するものではなかった。このことは長安寺区の一部が史跡「長安寺跡」として昭和38年に福岡県指定史跡となり、史跡地を一部含む形で整備が行われていることでも窺える。寺院は江戸時代以前に法灯が断絶しており、今回の調査によっても当時の寺院名称を推測できる文字資料は確認できなかった。したがって、「長安寺跡」は集落名と寺院名の混同を招くおそれがあり、遺跡の名称は「長安寺廃寺跡」として報告する。なお、最初の調査より70年余りが経過しているが、混乱を避けるため今回報告する平成5年度以降の調査については昭和8年調査からの調査次を付した。

第1表 長安寺廃寺跡調査表

調査次	名 称	調 査 日	調 査 主 体	備 考
	第一號遺跡地	昭和8年12月～昭和9年	福岡県	木組み・葺石様遺構
	第二號遺跡地	昭和8年12月～昭和9年	福岡県	木組み・葺石様遺構
	第三號遺跡地	昭和8年12月～昭和9年	福岡県	礎石建物跡
	第1次調査	昭和48年12月1日～ 昭和48年12月25日	九州歴史資料館	A～Hトレンチ 475㎡ 掘立柱建物、竪穴住居跡
	第2次調査	昭和49年11月25日～ 昭和49年12月22日	九州歴史資料館	1～11トレンチ 725㎡ 竪穴住居跡
	第3次調査	昭和50年12月1日～ 昭和50年12月20日	九州歴史資料館	A～F, A～Gトレンチ 積石積基壇・礎石建物跡
7次	第4次調査	平成5年5月15日～ 平成5年6月9日	朝倉町教育委員会	段落ち
8次	平成9年度調査地	平成9年10月27日～ 平成10年7月22日	朝倉町教育委員会	柱列
9次	平成10年度調査地	平成10年12月16日～ 平成11年3月31日	朝倉町教育委員会	大溝 木簡
10次	平成10年度調査地	平成10年12月16日～ 平成11年3月31日	朝倉町教育委員会	遺構・遺物なし
11次	平成11年度調査地	平成11年12月10日～ 平成12年3月27日	朝倉町教育委員会	
12次	平成12年度調査地	平成13年2月5日～ 平成13年3月27日	朝倉町教育委員会	土取り穴
13次	平成12年度調査地	平成13年2月5日～ 平成13年3月27日	朝倉町教育委員会	基壇？
14次	平成12年度調査地	平成13年2月5日～ 平成13年3月27日	朝倉町教育委員会	遺構なし



第3図 長安寺廃寺跡調査地域図 (1/2500)

昭和8・9年の調査では、第一號遺跡地において地固めと考えられる南北に細長い葺石様遺構、第二號遺跡地から東西に長い葺石様遺構が確認され、それぞれ「歩道」と「建物」の基盤遺構としての可能性が指摘された。また、遺物出土状況から建て替えがあることが報告されている。第三號遺跡地では3×5間の礎石建物と基壇が確認され、墨書土器の内容から総勢40名以上の僧侶を擁する大寺院であり、寺院名も「朝闍大寺」などが提案された。寺域及び伽藍配置案も提示され、奈良時代を代表する大寺院が考えられた。また、縄文後期を中心とする土器が多く紹介されているが、7次調査以降確認されてい

ない。

昭和48～50年の調査は、福岡県立九州歴史資料館により行われた。昭和8・9年調査をふまえ、調査地域を拡大して行われている。このため、調査のうち第1・2次調査と第3次調査の一部は長安寺区の中央部・西部で行われ、寺域と思われる区画には入らない。この調査の結果、「3年間の発掘調査を終了したが、結局、大字須川の伝承地一帯には宮跡が存在しないことが明確にな」り、寺院についても「墨書土器や鬼瓦の出土でかなりの大寺院を想定していたが、それさえ検討を要する」と報告された。寺域及び伽藍配置については後述する。

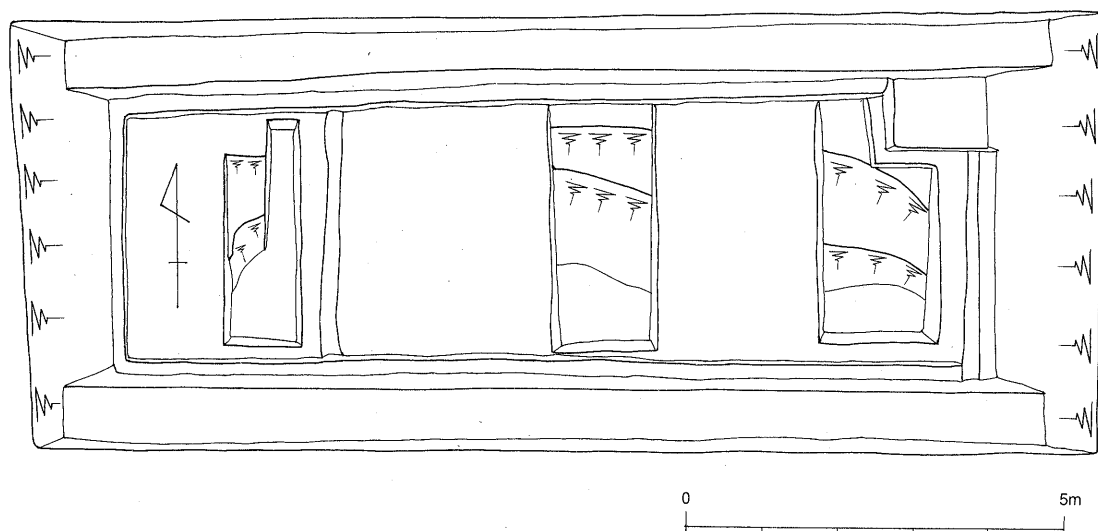
平成5年度調査の概要

第7次調査（第4・5図，図版1、2）

朝倉町では文化財を活用した整備事業に係り、長安寺集落東端の「朝倉橋広庭跡」石碑周辺を史跡公園として整備が行われることとなった。この橋広庭跡石碑周辺や朝倉町東端の「木の丸殿」跡伝承地などは町内外からの見学者も多い。整備計画のうち、駐車場は福岡県指定史跡地内となることから発掘調査が実施された。調査地は昭和8年調査第一號遺蹟地と猿沢の池の間で、史跡指定地の北東端にあたる。したがって、寺域・主要伽藍を区画する築地、溝などの痕跡が想定された。この区画施設確認を目的に



第4図 第7～9次調査地位置図 (1/600)



第5図 第7次調査トレンチ設定図 (1/100)

駐車場計画地に東西に長くトレンチを設定した。トレンチからは大量の土器、瓦が出土し、遺物の包含状況を確認するため3カ所について掘り下げた結果、南に傾斜する「落ち」が確認された。

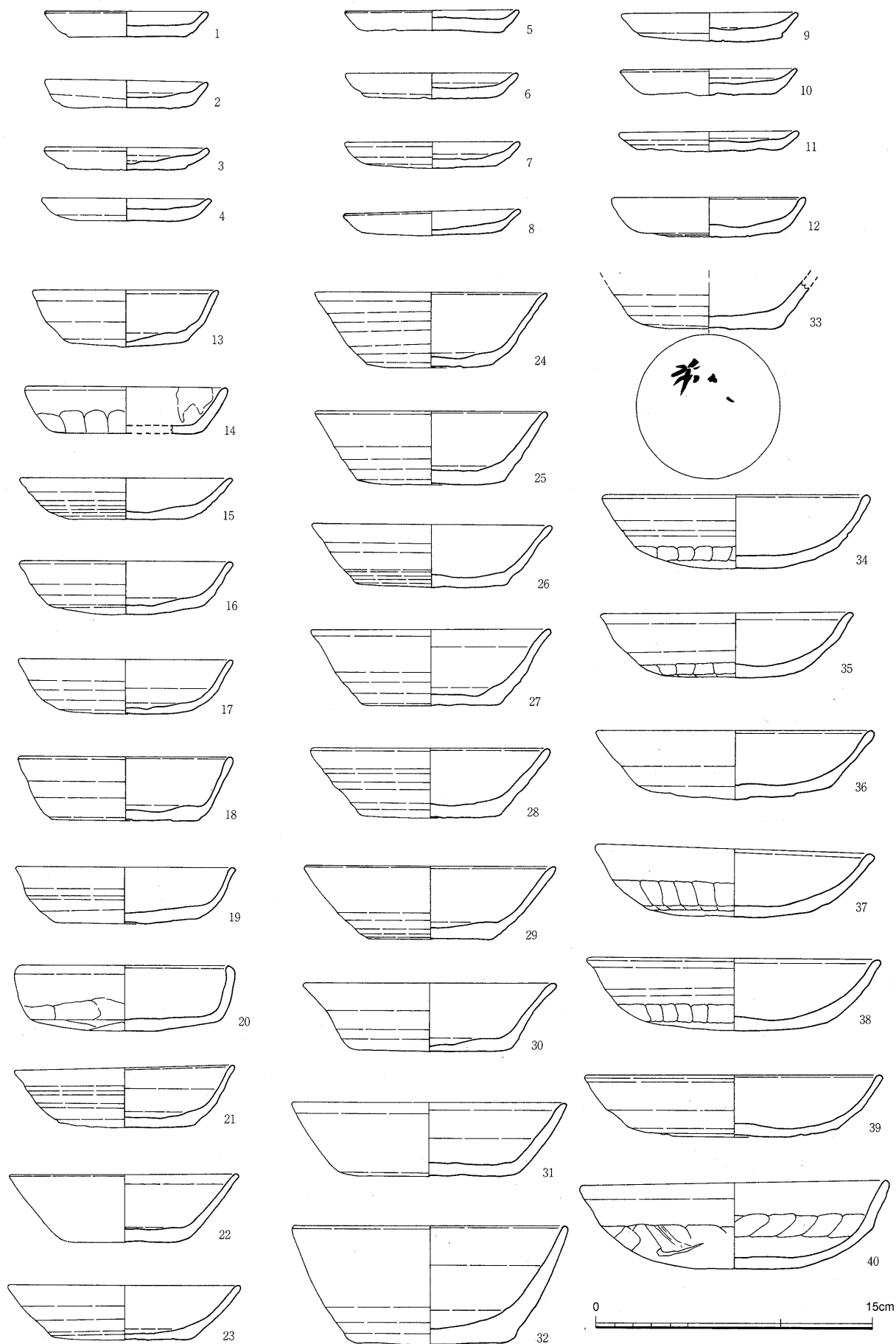
出土遺物 (第6～11図・図版4～8)

土師器

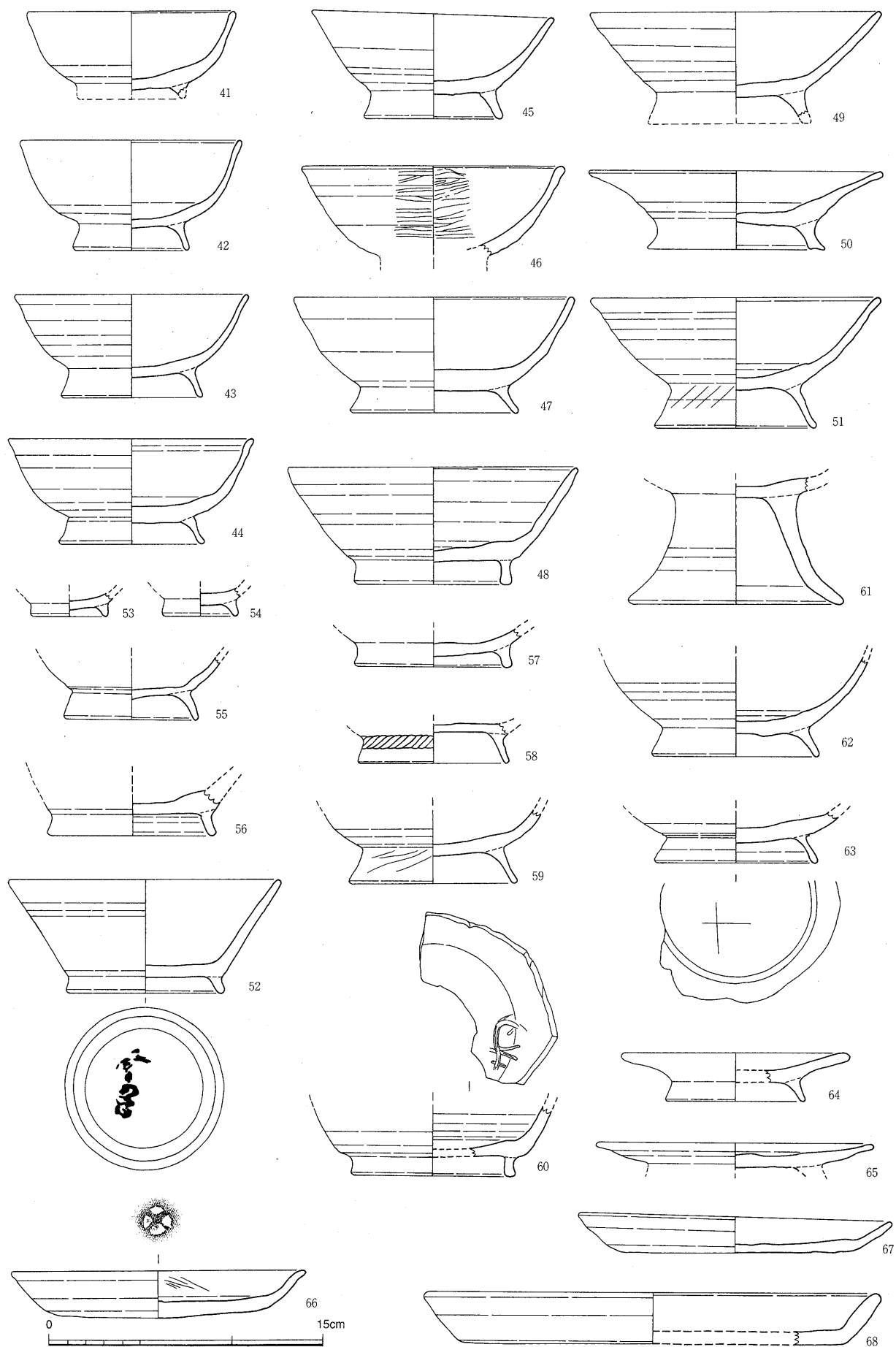
小皿 (1～12) 口径8.8～10.6cm。体部内外面にロクロの回転を利用したヨコナデ、内底部の中央付近のみにナデを施す。外底部は全てヘラ切り離しのままで、内面にナデを施したときに付いた板状圧痕が認められる。1・3・5～7には油煙が付着しており、灯火器として使用されていたことが分かる。

杯 (13～33) 口径10.0～15.0cm。口径から11cm前後の小型品と、13cm前後の中型品に分けることが可能であるが、官衙遺跡に見られる法量による器種の分化という傾向は見られずに、13cm前後のものが量的には主体をなしている。調整や器形から数種に分類できる。14と20は体部下半と外底部を手持ちのヘラケズリによって調整し、やや厚みのある体部をなすもので、古い様相を残すものである。これ以外は体部・口縁部の開く度合いが比較的強く、内湾気味に立ち上がるタイプや強く外反するタイプ、直線的なタイプが認められる。調整は全て外底部をヘラ切りしたままで、そのほとんどに板状圧痕を伴う。また、25・27は体部下半にヘラケズリを施すなど、8世紀後半の技法からなるが、これ以外は体部内外面をヨコナデし、内底部の一部にナデを施す。24のみは内底部までヨコナデで調整するもので、器形からみても9世紀中頃の特徴を有している。小型品の内18を除いて油煙の付着が顕著であり、灯火器としての使用がもっぱらであったことが分かる。これに対して中型品は先述したようにほぼ等しい単一の器種であることから、何らかの儀式や儀礼に用いられたと見ることができよう。土器の様相としては8世紀後半・末頃が主体をなし、須恵器模倣の器形を残すものと、色調がやや白味を帯びた薄い器肉に仕上げて、ロクロ目を残したままという9世紀前半・中頃の2つがある。33の外底部には墨痕が残っているが、判読はできなかった。

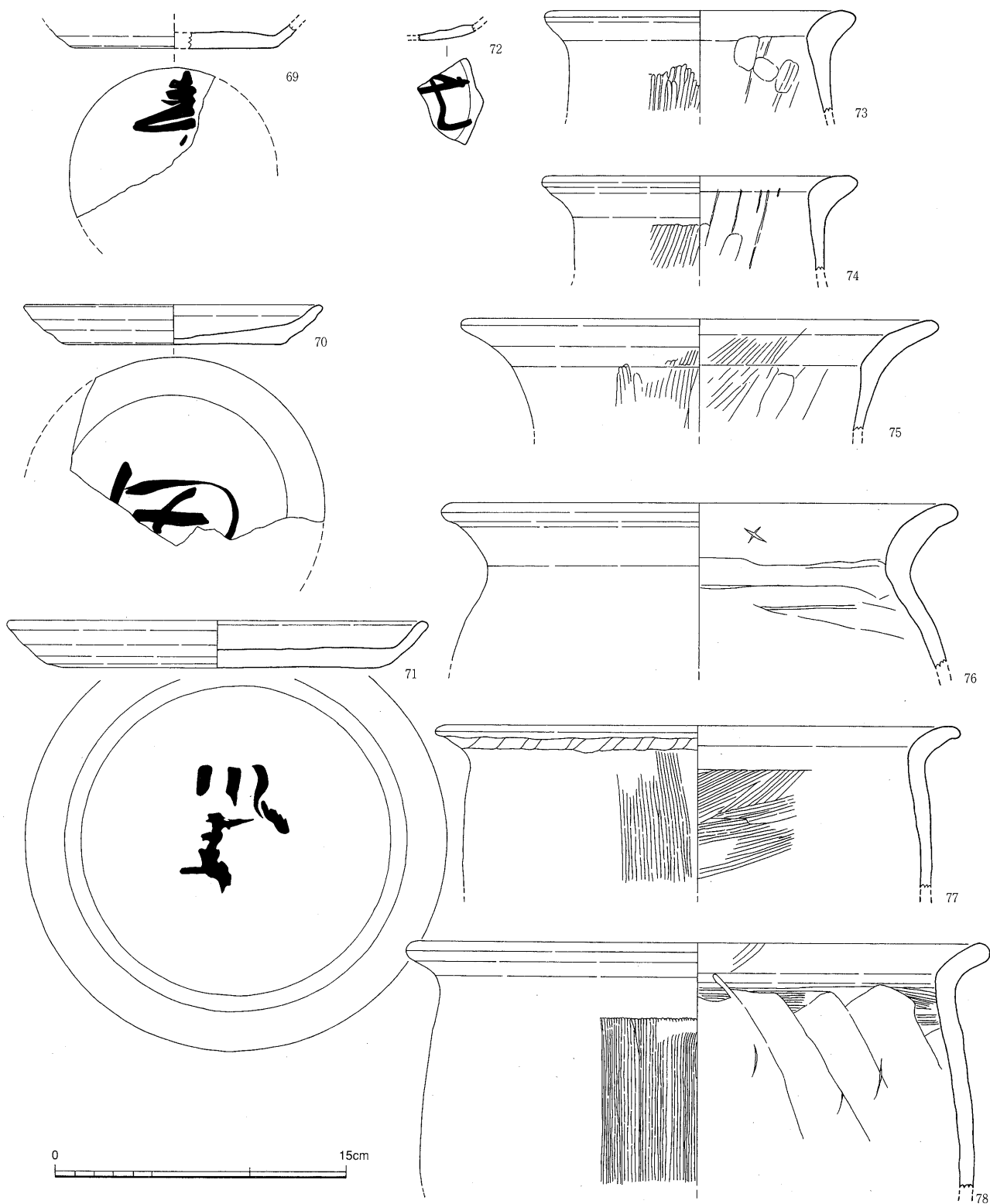
丸底の杯 (34～40) 口径14.6～16.6cm、器高3.3～4.7cm。口縁部を肥厚させたものや碗と同様に外反させたものがある。36は平底の皿に近い器形をなす。40は体部と底部の境に強い稜をつくり、外底部を手持



第6図 第7次調査出土遺物実測図 (1/3) ①



第7図 第7次調査出土遺物実測図 (1/3) ②



第8図 第7次調査出土遺物実測図 (1/3) ③

ちのヘラケズリ調整を施す。内底部には指頭圧痕を有するなど、典型的な丸底の杯である。この他は全て外底部はヘラ切り離しで、38のみ板状工具による軽い調整を施す。また、34・35・37・38には外面の境に指頭圧痕が認められる。また、35・40には広い範囲に油煙が残されている。

椀 (41～63) 口径11.7～15.8cm。体部が丸味を帯びる杯部に高台を備えたものと、平底で直線的に開く

杯部の外縁にやや高い高台を備えたものがある。後者は8世紀代に入る。48は内外面を黒色化させたいわゆる黒色土器B類で、内外面をヘラミガキしたもの。この他は体部・口縁部をヨコナデ、内底部にナデを施す。胎土に赤色粒子が混入したものが多く認められる。52の外底部には墨書が認められ「□呂」とも読めそうである。

53～63は底部を残すのみの資料である。57・58は内面のみ黒色化させた黒色土器A類で、器面は平滑に仕上がる。53・54は杯部に比べて小径の高台である。61は8世紀代の高杯の可能性もある。53・60・63には化粧土を施す。また、56の外底部には墨が全体に付着している。転用硯の可能性もある。60の内底見込みに「寺」銘の刻書がある。細い竹管状の工具で簡単に記されている。位置や書風からすると生産者側で記したものと思われる。さらに、63には「×」の刻みが認められる。

皿(64～72) 64・65は高台付の皿で、64には底部に粗い穿孔が認められる。全て体部・口縁部をヨコナデ、68・71は外底部を回転ヘラケズリするが、他はヘラ切りはなしのままである。66は全面に火熱を受けて赤化し、内底部に十字形のスタンプが認められる。68は赤褐色の化粧土を施し、その後に回転ヘラミガキを加えた8世紀中頃のもので、大宰府からの搬入品であろう。特徴的なのは69～72のように外底部に墨書を有すものが多くある。残念ながら判読困難である。

甕(73～78) 73・74は小型の甕で、口縁部を肥厚させる。76は体部が膨らむものである。器面調整は全て口縁部をヨコナデし、76以外は体部に縦方向のハケメを施し、体部内面に粗いヘラケズリもしくは77のように板状工具による擦過を施す。煤の付着が著しい。

蓋(79) 土師器碗に伴う蓋で、低平な形態をなす。口縁端部内面には痕跡的に稜線を巡らせる。外天井部に回転ヘラケズリを施す。外面全体に火熱を受けている。8世紀末頃のもの。

取っ手付甕(80) 小型の精製された甕に湾曲して長く伸びる取っ手を付けたもの。外面に煤というより黒漆に近い黒色塗料を塗布し、内面も淡茶褐色塗料が塗られる。

焼塩壺(81) 官衙や寺院ではこうした運搬を兼ねた焼塩用の容器が出土することが珍しくない。手づくねによる成形で、内面はナデ調整を施す。

鉢(82) 復元口径22cm、器高10.7cm。いわゆる鉄鉢形の器形で、須恵器は通有見られるが、本例のような土師器は珍しい。精良な胎土を用いて、器面もナデ調整で平滑に仕上げる。

須恵器

蓋(83) 復元口径16.0cm。口縁端部を下方に突出させる。天井部と体部の境は明瞭で、外天井部に回転ヘラケズリを施す。8世紀後半。

高台付杯(84～88) 体部下半が丸味を帯びた85・88と、強く屈曲するその他に分けられる。88は高く外開きの高台が底部外縁に接着、その他は断面四角形の小さな高台がやや内側に貼付される。体部・口縁部の内外面にヨコナデを施し、外底部はヘラ切り離しで、ヘラケズリは認められない。8世紀後半～末頃か。84は外底部に墨が付着し、硯として用いられたもの。85は外底部に「大寺」の墨書を有す。

大壺(89) 体部下半の破片。外面に縦位の平行叩き、内面に青海波の当具痕を有す。

須恵質土器

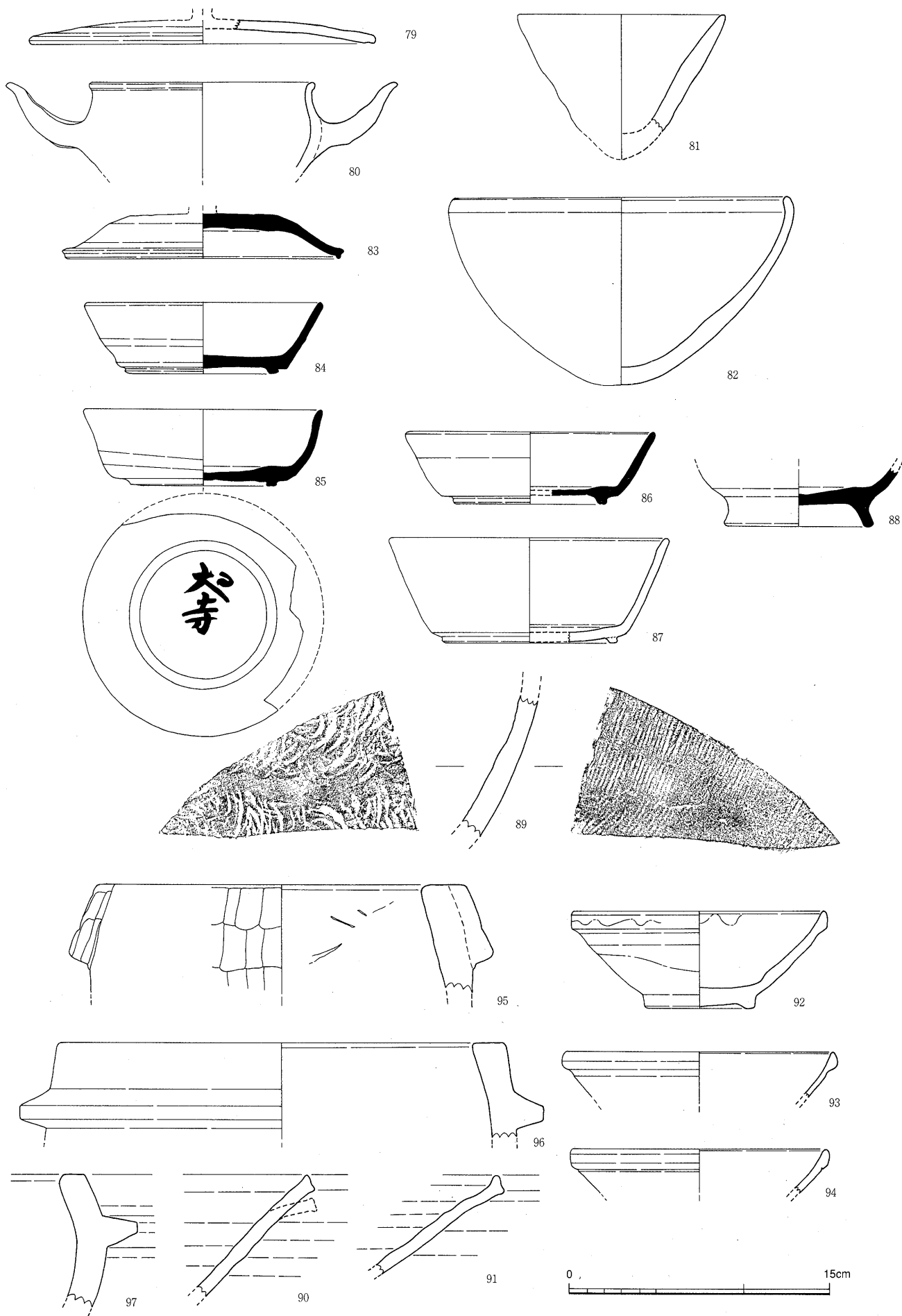
鉢(90・91) 片口鉢となるもの。内外面にロクロ目が顕著に残る。

白磁

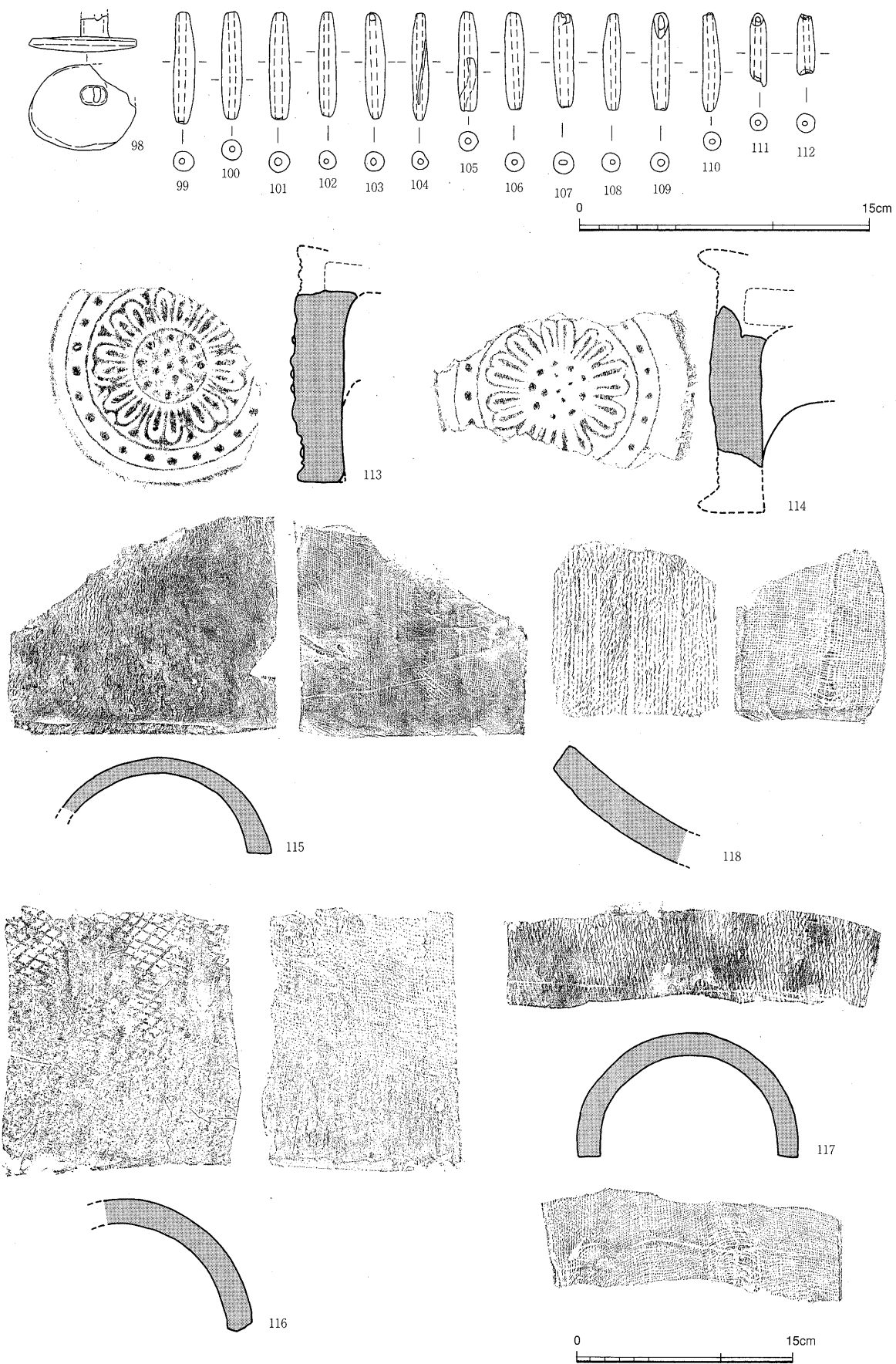
碗(92～94) 玉縁口縁をなすもので、体部下半は露胎である。

石製品

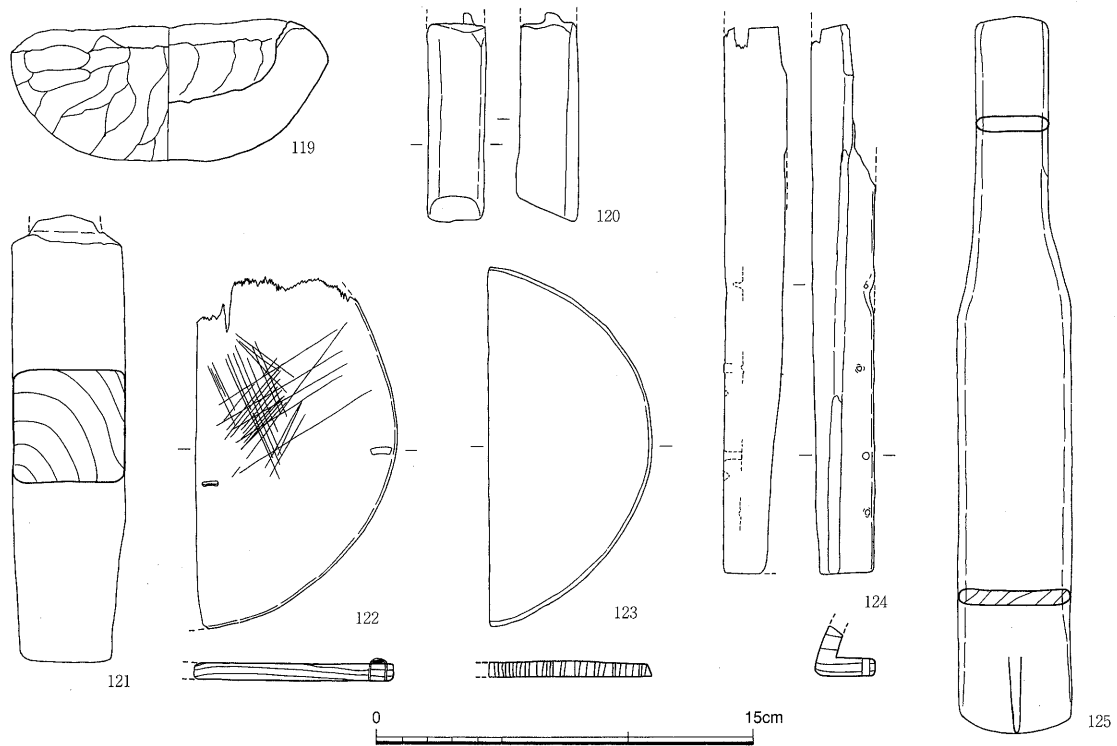
石鍋(95～97) 95は縦耳型の把手を有すもの。外面にノミ痕を残し、内面は平滑にする。96・97は横鐔



第9図 第7次調査出土遺物実測図 (1/3) ④



第10図 第7次調査出土遺物実測図 (1/3、1/4) ⑤



第11図 第7次調査出土遺物実測図 (1/3) ⑥

型で、内外面を平滑に仕上げる。ともにやや赤みを帯びた滑石である。

鏡形製品 (98) 粗く円盤状に整え、紐孔を穿った鈕状の撮みを表現する。鏡形とすれば鏡面にあたる下面は凸状に整えている。

土製品

土錘 (99~112) 長さ5cm前後、径1cm前後のもので、竹籤に土を巻き付けてつくる。一部に火熱を受けたものが含まれる。

瓦

軒丸瓦 (113・114) 113は中房に1 + 4 + 8の蓮子をおき、複弁8弁蓮華文を配した鴻臚館。式の軒丸瓦である。114も同じ文様構成であるが、瓦当面が平坦で中房が省略されるなど鴻臚館式に含まれるが、大宰府跡でも類例を見ないタイプである。裏面の丸瓦差込部は113とおなじである。裏面の調整は非常に雑である。これらが創建瓦と考えられるが、現在までのところ軒平瓦は出土していない。

丸瓦 (115~117) 115・117は凸面に縄目痕、凹面に布目痕を有す。凸面の端部近くに沈線状の段がある。116は凸面に格子状の叩き痕、凹面に布目痕を有す。

平瓦 (118) 凸面に縄目痕、凹面に布目痕を有す。側面は分割された後にヘラで調整される。

埴塼 (119) 口径12cm程の底の浅いもの。スサや粉を混ぜた粘土で成形される。内面には溶解物の付着が認められる。

木製品

棒状製品 (120) 柾目材を角柱状に粗く整え、一方の端を斜めに切っている。蓋の取っ手の可能性もある。

脚状製品 (121) 心材の近くを4分の1用いた柾目材の、一方を細く削り、一方の端には差込部を設けたもの。なんらかの脚と考えられる。

円形木板 (122・123) 径16cm前後となる。122は板目材、123は柾目材を用いる。共に周縁部を削って整

えるが、123は斜めに削る。122の縁部に桜皮の綴紐が残る。表面に無数の傷が認められる。123の表面には漆状の塗料を塗って仕上げる。ともに蓋か。

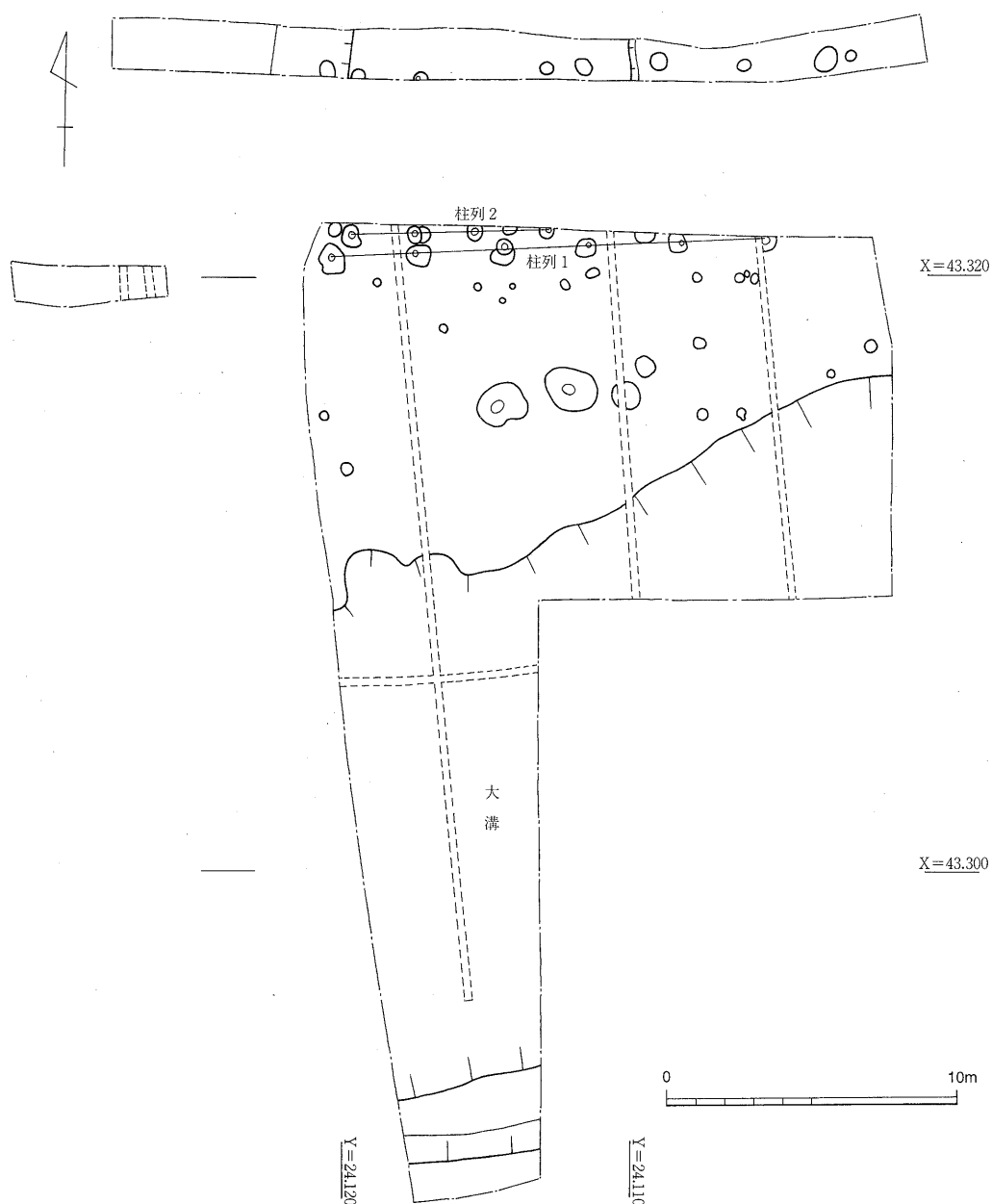
部材（124） 板目材を断面L字形に整えたもの。側面に目釘孔が並ぶ。

杓子状製品（125） 長さ28.1cm、幅4.7cm。板目材を薄板にし、粗く削って整える。杖部まで厚みはほとんど変わらない。身部の先端は刃状に削る。

平成9年度調査の概要

第8次調査（第12図，図版2、3）

第7次調査をふまえ、計画的に長安寺廃寺跡を調査する必要性が高まってきたことにより、朝倉町教育委員会が主体となり、国庫及び福岡県の補助を受けて長安寺廃寺跡を計画的に調査することになった。



第12図 第8次調査地遺構配置図（1/250）

平成8年度に縮尺1分の1,000の長安寺区付近地形図を作成、平行して平板測量により縮尺1分の100の寺域推定地形図を作成し寺域四囲確認を主眼とした調査方針を立てた。平成9年度は、第7次調査での「落ち」が寺域北端を画する溝の北岸と仮定し、その西側延長の確認を行った。

調査地は大字須川1273-1に所在する。昭和8年調査の第一号遺跡地を含み、7,10次調査地が東側に隣接する。現況は水田として利用されている。北側は長安寺集落を東西に抜ける道路（東西道路）が走り、この道路東端は「朝闇神社」の鳥居に続く。調査区の西側は東西道路から南方の果樹園に連絡する農道（南方連絡道）となる。南側の果樹地は一段高い。また、東西道路改修に伴い道路北側と柱列延長確認のため南方連絡道の西側の一部も第8次調査に含めて調査した。検出した遺構は大溝、柱列2条と昭和8年に工事が行われた暗渠排水溝である。また、昭和8年の第一号遺跡地調査時のものと思われる痕跡を確認した。

検出遺構

柱列1 調査区の北側端にあって6本分の柱穴を検出した。保存のため表面検出に止めたが、東端の柱穴は暗渠に半裁される。両端は調査区外となり、建物になるかどうか分からない。確認のため西側延長上の隣接地を調査したが遺構は検出されなかった。柱穴は不正形で一辺は65cm程、柱の痕跡は25cm程である。柱痕から推定できる柱間寸法は2.95mとなる。

柱列2 柱列1の北側に平行する。調査区内では柱列1とは切り合わない。4本分検出し、柱穴は柱列1より不正形となり、直径は60cm程、柱の痕跡は20cmである。柱痕から推定できる柱間寸法は2.09mとなる。

大溝 調査区を大きく横断する。北側の肩が第7次調査の落ちの延長である。調査区が逆「L」字形であったため、南側の肩は調査区西側でのみ検出した。調査面積に対して大溝の平面面積が広く、地権者との取り決めもあり大溝については表面検出にとどめた。溝上面で幅16mを測る。現地形も含めて勘案すると猿沢の池から第7次調査の「落ち」までは直線であるが、第8次調査地に入ってから南に屈曲し、幅も広がると考えられる。

出土遺物（第13～16図，図版9～11）

遺物は表土からの出土であり、遺構からの出土はほとんどない。ただし、遺構検出面直上に土器、瓦、礫が粗く敷きつめられた状態であったため全ての遺物を3mグリッドごとに取り上げた。昭和8年度調査においても礫が「葺石様」状に敷きつめられ、地固めとして報告されている。なお、出土遺物のうち、瓦、文字資料、木製品は第8～14次までをまとめて後述する。

須恵器

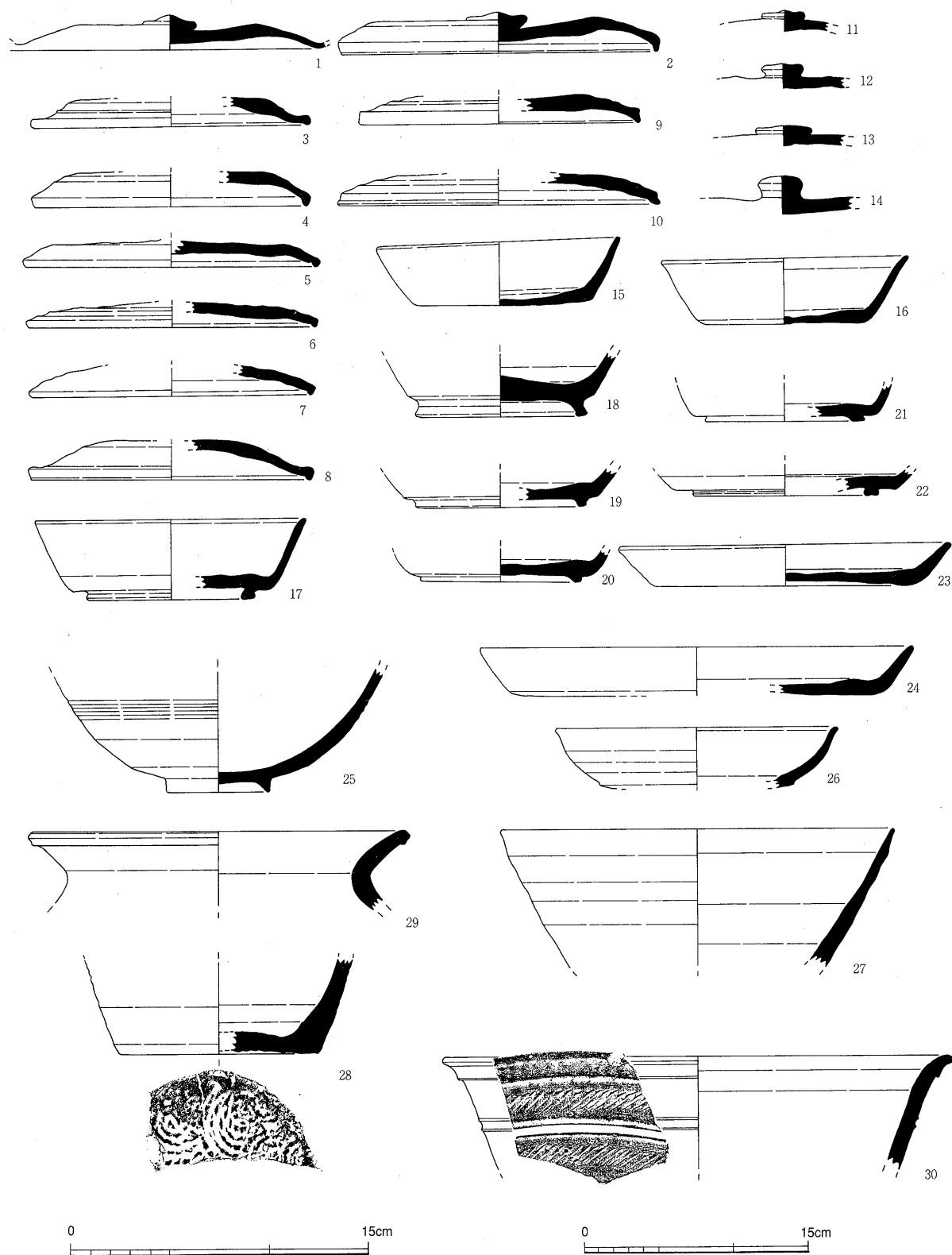
蓋（1～14） 欠損しているものもあるが、扁平な摘みがつき口縁が嘴状のタイプとなる。1・2は厚みがなくやや焼き歪む。外天井部は回転ヘラケズリを施す。摘みの中央はやや盛り上がる。6・9は内面が平滑で転用硯の可能性もある。

杯（15～22） 15・16は高台が付かない。15は灰白色で焼成が悪く、口縁部付近には油煙が残る。16は体部から口縁部内外面はヨコナデ、底部外面はヘラ切り後ナデられる。17・21は体部下半が屈曲する。体部、口縁部内外面はヨコナデ。底部はヘラ切り離し後ナデられる。18は底部から体部の境がやや不明瞭である。外に踏ん張るやや高めの高台が底部周縁に貼付される。

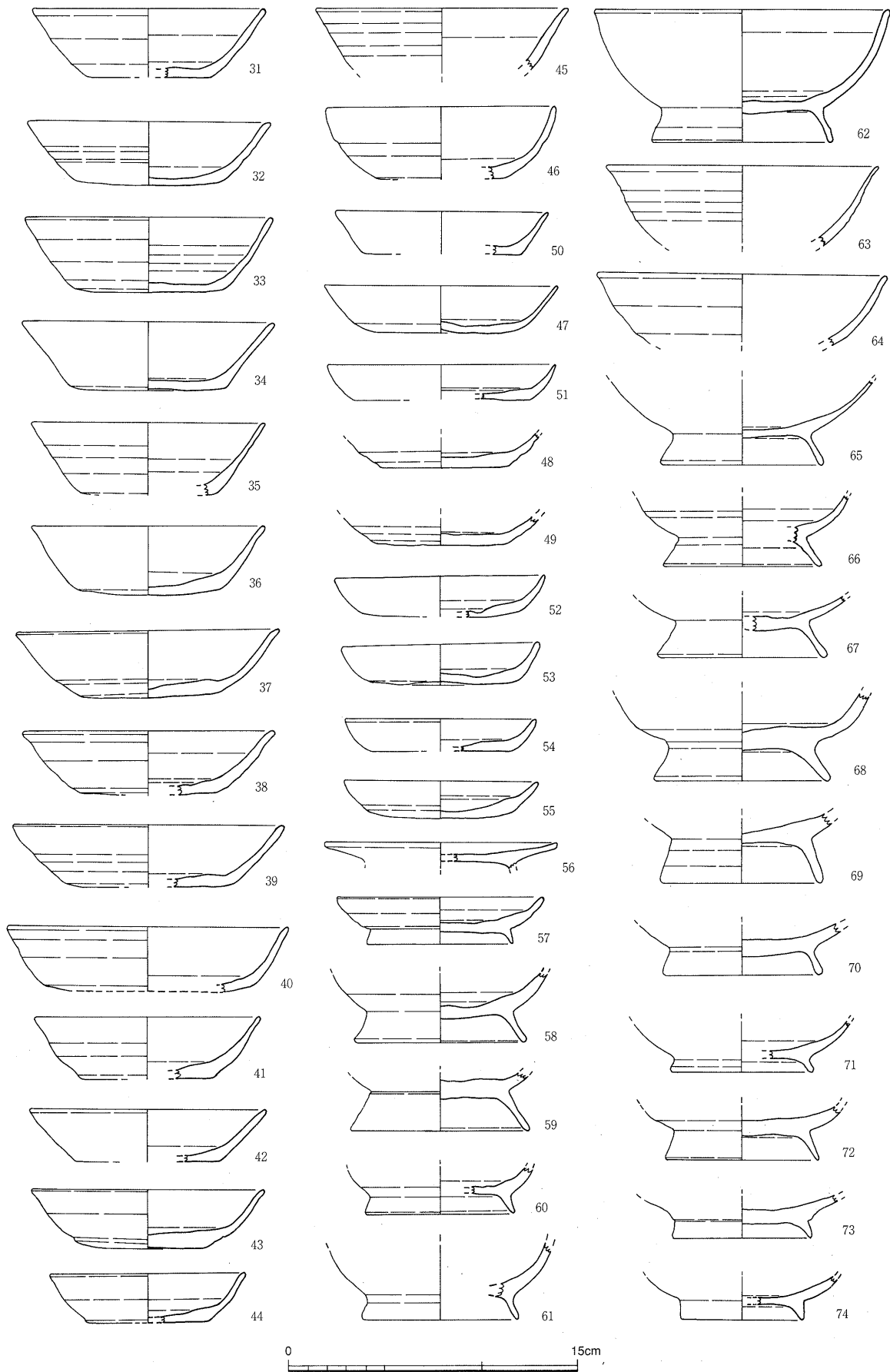
皿（23,24） 24は青灰色でやや焼きが悪い。口縁部、体部内外面はヨコナデ。底部はヘラ切り後粗くナデられる。

その他の須恵器（25～30） 25は断面逆三角形の小ぶりの高台が付く椀。内面は平滑に磨かれる。27は口

縁から体部にかけての鉢の破片。灰白色を呈し焼成が悪い。口縁部、体部内外面ヨコナデを施す。28は長頸壺の底部。外底部に青海波あて具痕が残る。29・30は甕の口縁部破片。30は外面に波状文が施される。



第13図 第8次調査出土遺物実測図 (1/3、1/4) ①



第14図 第8次調査出土遺物実測図 (1/3) ②

土師器

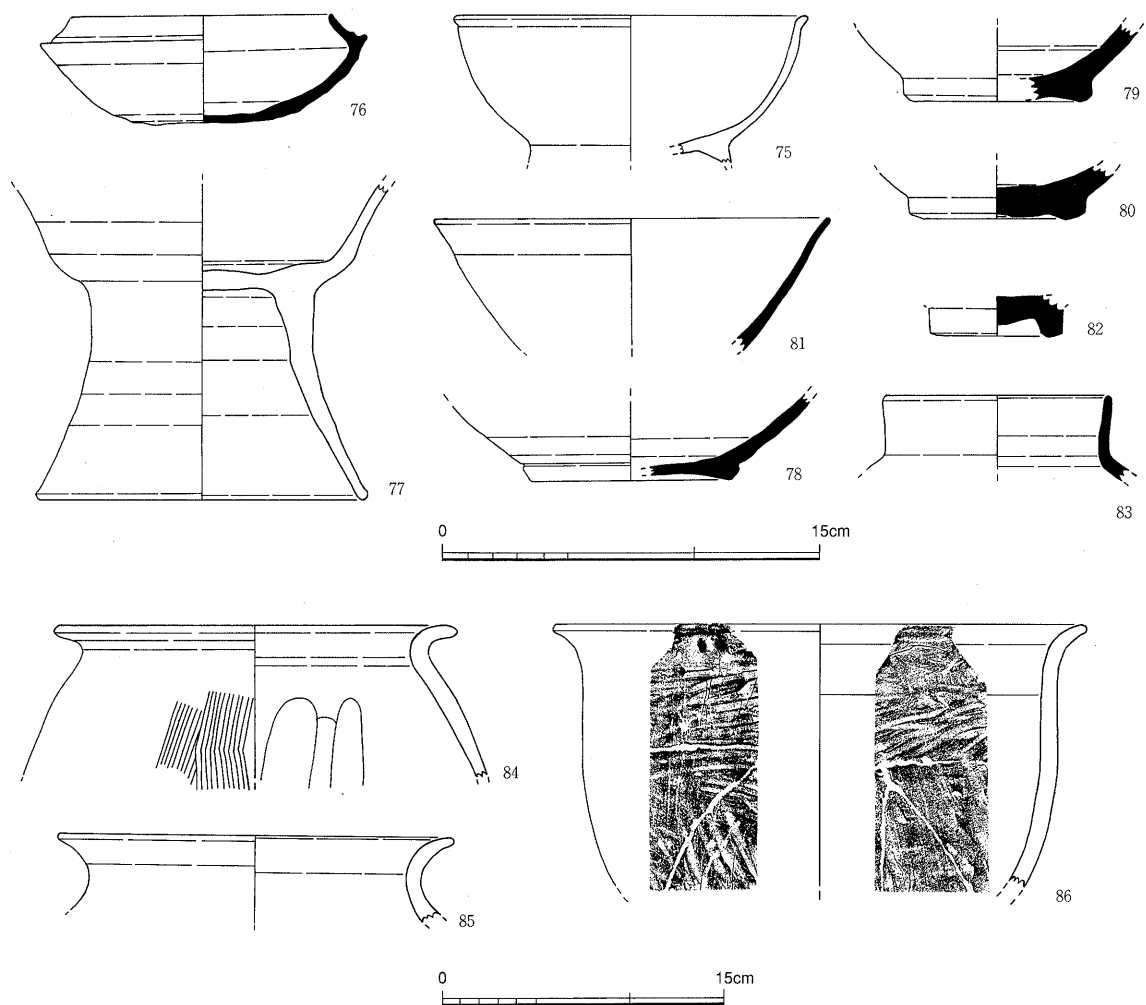
杯 (31~49) 口径10.0~14.4cm。口径から12cm前後の中型品が多くを占める。31・35は体部、口縁部の開きが弱く、8世紀代の様相を示す。他は体部・口縁部の開く度合いが比較的強く、調整は外底部をヘラ切りしたままで、体部内外面をヨコナデし、内底部の一部にナデを施す。36は板状圧痕が顕著に認められる。38・45・47は口縁部内面に油煙が付着する。ほとんどは色調がやや白味を帯びた薄い器肉だが、37は赤味が強い。

皿 (50~57) 50~55は径10cm前後で高台が付かない。全て体部、口縁部をヨコナデ、外底部はヘラ切り離しである。56・57は高台が付く。56は径12.0cmで体部が底部からそのまま広がる。57は体部から口縁部にかけて内湾する。

椀 (58~75) 口縁部が残る資料が少ないが、口径は15cm前後。ほとんどが体部が丸味を帯び高台を備えたもので、体部・口縁部をヨコナデ、内底部はナデ。62は内面及び外口縁部を黒色化する。内面は平滑に仕上げられる。68はやや大型で、体部内外面はヨコナデ、底部高台外縁は回転ヘラミガキが施される。75は内外面黒色化されたもので器面は平滑である。

脚付き杯 (77) 大型の杯に外に広がる高い高台を貼付するもの。赤橙色を呈し胎土は精良である。

甕 (84~86) 84・85は小型の甕で、体部から口縁部が屈曲し、体部が膨らむもの。口縁部をヨコナデ



第15図 第8次調査出土遺物実測図 (1/3、1/4) ③

する。84は体部に縦方向のハケメが残る。体部内面は板状工具による擦過を施す。86は煤の付着が著しい。

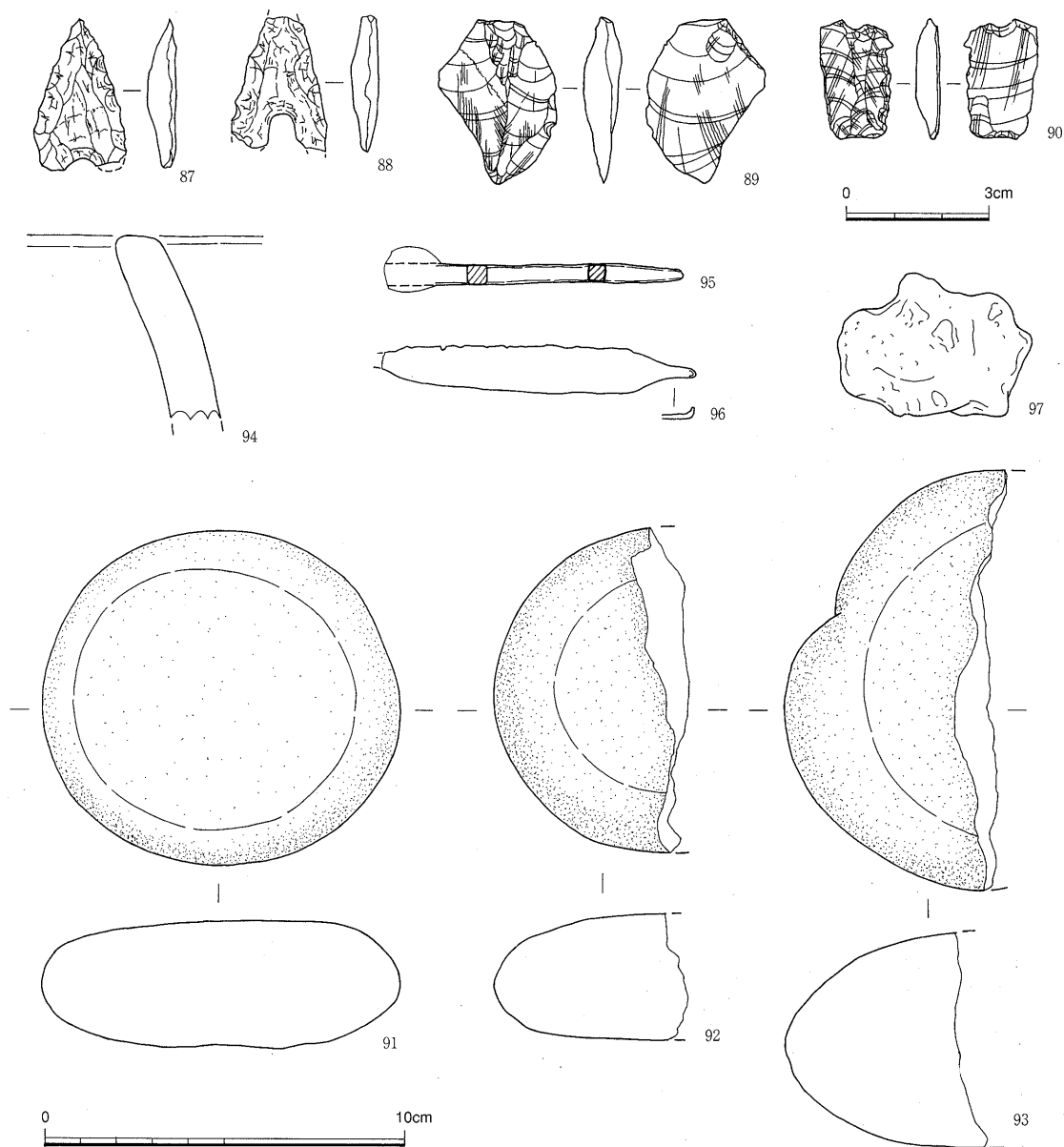
陶磁器

白磁（79・80）ともに底部のみの資料。体部下半は露胎である。79は底部内面に沈線が巡る。80の底部は薄く墨痕が残る。

青磁（78・81～83）78は底部が蛇の目状となり内面底部に重ね焼きの目跡が認められる。81は碗の口縁部破片。口縁部端がわずかに外反する。

石器

石鏃（87～90）黒曜石製の石鏃。87は片側基部、88は両基部と先端を欠損する。両面を細かく調整している。



第16図 第8次調査出土遺物実測図（2/3、1/2）④

磨石（91～93） 92・93は1 / 2ほどの資料。91は両面が磨られる。昭和8・9年の調査報告では縄文後期を中心とする土器が報告されているが、第7～14次調査では縄文時代の土器、遺構は検出されなかった。

その他の遺物

杯(75) 75は須恵器杯で地元住民の方が調査中に持参された付近の柿畑の採集品である。7次調査でも6世紀代と思われる横瓶破片が出土している。

石鍋（94） 滑石製石鍋の口縁部破片。暗茶褐色を呈する。

金属製品（95～97） 95は長さ8.3cmで断面正方形の釘状鉄製品。96は現存長8.7cmで板状の銅製品。端部は細くなり、先端部は耳搔き状になる。筭か。97は金属生成遺物。茶褐色で重量感があり表面に小さな気泡がある。炉内滓であろうか。

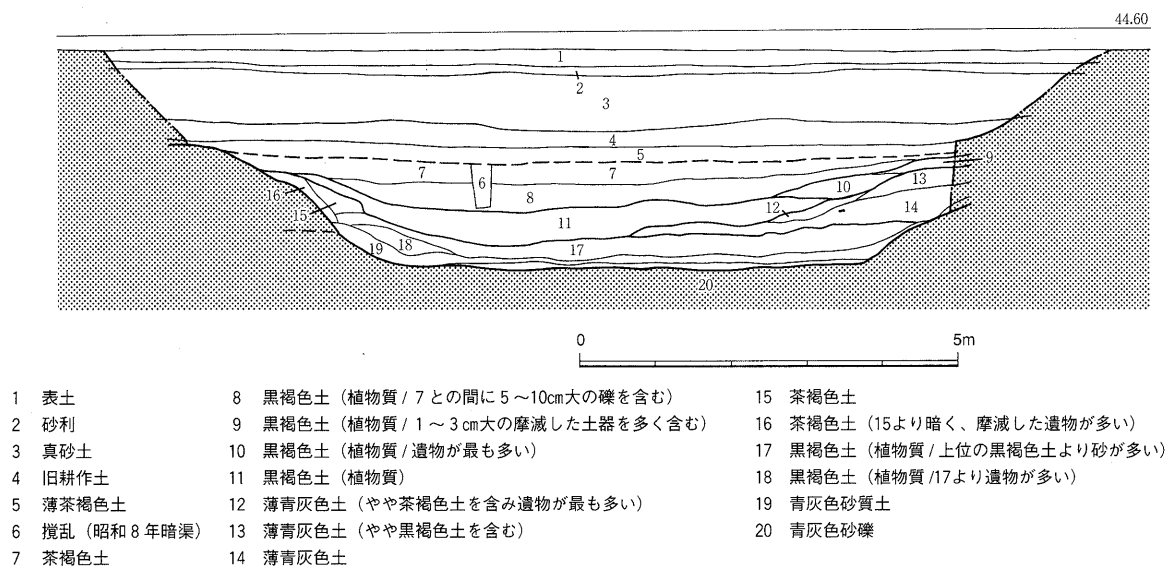
平成10年度調査の概要

第9次調査（第4・17図，図版3）

第8次調査の結果、大溝が南にカーブし直線的ではない事が確認できた。また、幅も広く大溝は寺域や主要伽藍を区画する施設としての可能性は低くなった。この大溝は推定寺域の中央を2分する結果となり、寺域検証資料として調査が必要となった。第8次調査では深度掘削ができなかったことから改めて駐車場を調査地とした。既に公園整備に係るトイレが設置され、調査範囲が規制されたが、大溝の両肩検出を目的として南北方向に長く設定した。調査区は第7次調査の西端を含む。調査の結果、南側の肩部は調査区外となり明確に検出できなかったが、大溝は溝上端幅9.5m以上、深さ1.1m、溝底面幅6.5mで断面は逆台形を呈する。溝埋土は茶褐色で植物質を多く含むいわゆる馬糞層である。検出直後は茶褐色であるが、空気に触れて酸化し10～20分ほどで黒褐色となり層位分化は困難であった。北岸から青灰色の粘質土が流れ込んでおり、これにより概ね上層と下層に分かれる。遺物はこの粘質土を中心に多く認められた。

第10次調査（第18図）

調査地は須川1299- 1に位置する。史跡指定地のほぼ中央部にあたり、大溝を寺域北端とした場合の



第17図 第9次調査大溝断面実測図（1/100）



第18図 第10次調査地位置図 (1/500)

伽藍中心部である。九州歴史資料館による第3次調査のE・Fトレンチにあたる。現況は水田であり、耕作土、5cm弱の床土10cm弱の暗褐色土、黄灰白色粘質土（地山）となり、九州歴史資料館調査と同様の結果であり、遺構、遺物は検出されなかった。

出土遺物（第19図，図版12、13）

出土遺物はすべて第9次調査大溝からの出土である。

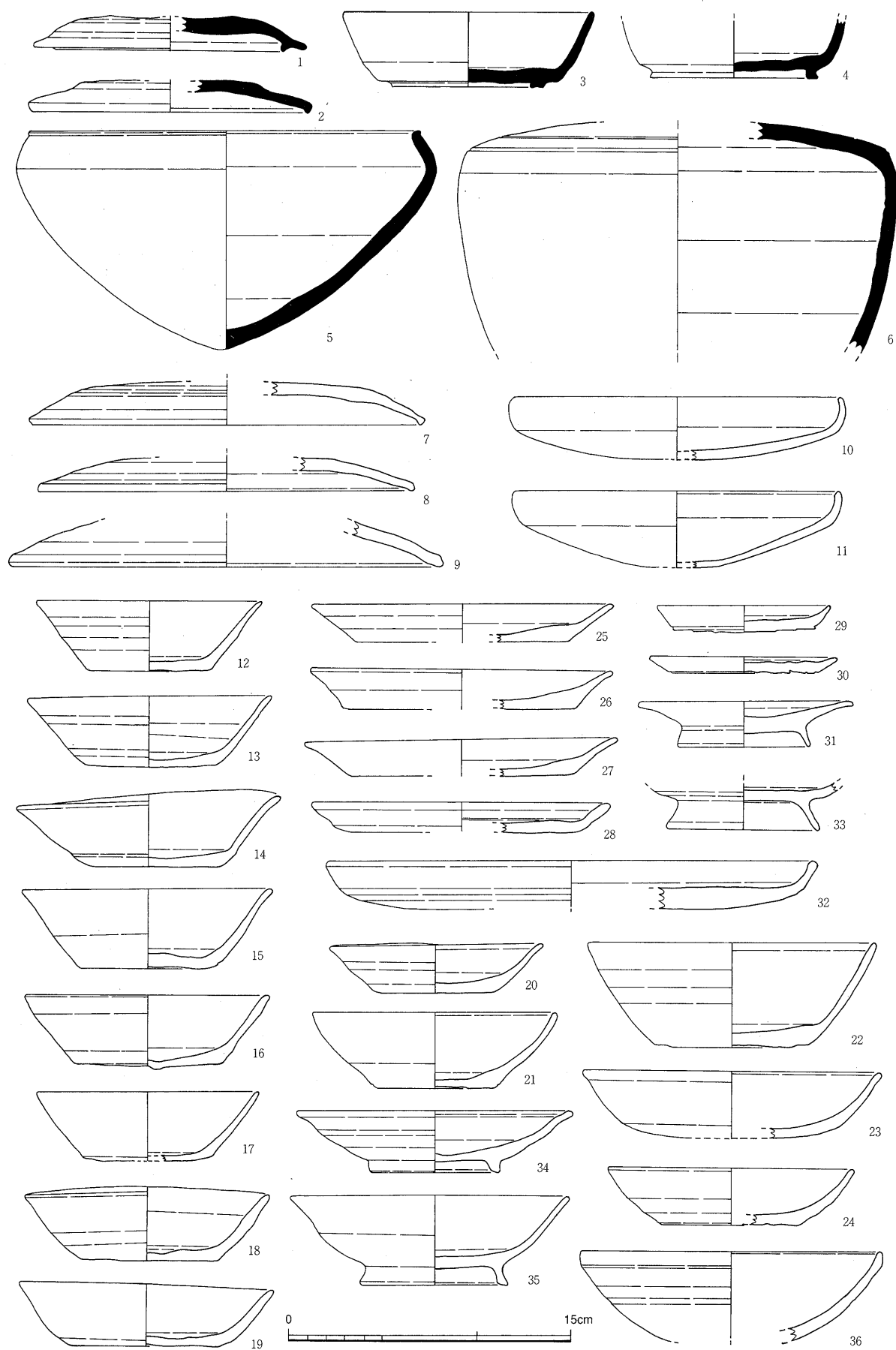
須恵器

蓋（1・2） 1はやや肉厚でかえりを持つ。天井部と体部の境は明瞭で、外天井部に回転ヘラケズリを施す。2は口縁部がにぶい嘴状となるもの。

杯（3・4） 3は低い高台を底部縁のやや内側に張り付け、体部から口縁部にかけてほぼ直に立ち上がる。底部外面は丁寧にナデられる。4は底部から体部の境が不明瞭で、体部はわずかに内湾する。3・4とも体部から口縁部内外面ヨコナデを施す。

鉢（5） 口径20.6cm、器高11.5cm。鉄鉢形で丁寧な底部内面なナデ、それ以外はヨコナデで平滑に仕上げられる。

壺（6） 長頸となるもので体部から肩部までの資料。肩部に2本の沈線で挟まれた波状文が施される。



第19図 第9次調査出土遺物実測図 (1/3)

土師器

蓋（7～9） 径22.0～22.9cm。7・8は回転ヘラミガキが施され丁寧なつくりである。7は内外面とも墨痕が残る。9は口縁部付近の破片。

杯（10～19, 25・26, 33～35） 10・11は口縁部内外面はヨコナデ、外面は丁寧な手持ちヘラケズリ。同一個体の可能性もある。12～19は口径12.0～13.4cmで体部から口縁部内外面はヨコナデを施す。12は底部ヘラ切り後未調整で粗い仕上がりである。13・16・19は板状圧痕が顕著に残る。19は赤味が強く精良な粘土である。20は口径11.3cmの小型品。内面に墨痕が残る。22は口径16cmでやや大型品。脚が付く可能性がある。

皿（25～31） 25～23は口径16cm前後。25～27は器肉が厚く底部と体部の境が明瞭である。28は体部が外反する。29・30は口径9cm強の小皿。底部はヘラ切り離しのままでつくりが粗い。板状圧痕が残る。31は高台が付く。

高坏（32） 口径25.9cm。杯部のみの資料であるが、脚が付くと思われる。外面は回転ヘラミガキで丁寧に仕上げられる。

椀（33～36） 34は口径14.6cm体部があまり立ち上がりず皿に近い。内面に墨痕が残る。36は内外面黒色化する。内外面ともヘラミガキにより平滑に仕上げられる。

平成11年度調査の概要

第11次調査（第20～22図, 図版3）

調査地は大字須川1187（A区, B区）, 同1188（C区）に位置する。これまでの調査が南北道路より南側＝史跡指定地に主要伽藍の存在を推定していたが、第7～9次では大溝の北岸から遺物が流れ込んでいることが認められた。このため、東西道路の北側においても寺院関連建物の存在が推定され、調査の必要が求められた。このことから東西道路から長安寺集落北東に位置する毘沙門堂へ続く道路（毘沙門連絡道）の東側の調査を行うことにした。東西道路北側は民家が密集しており、地元住民と協議を行いつつ調査区を設定した。現況は畑、水田で、水路で分断されることからA～C区に分けた。調査区のすぐ東側にはため池があり、ため池造成時の改変も予想された。調査の結果、第8次調査地と同様にB区の北半分とC区の北西部の表土直下に密度の高い遺物包含層が認められた。A区は周囲より60cmほど高く、建物基壇とも考えられたが、調査の結果近年の造成であることが判明し、遺構・遺物とも確認されなかった。B区では性格不明の溝2条を検出した。C区は以前民家があり、民家南側に大きなため池があったとの事である。調査の結果、民家の基礎と思われる石敷きと、ため池跡と思われる攪乱部を確認し奈良時代の遺構は確認できなかった。

出土遺物（第23・24図, 図版13～15）

須恵器

蓋（1～9） 口径12.4～18.2cm。径13cm前後の中型品と径16cm以上のやや大型品に分かれる。すべて摘みがつき口縁端部が嘴状となる。1は摘みの中央が凹む。2は口径16.1とやや大型で焼き歪む。7・8は内面に墨痕が残る。7の内面は平滑で転用碗である。

杯（10～22） 口径12.4～17.4cm。口径14cm前後と口径17cm程に二分できる。体部・口縁部の内外面はヨコナデを施す。10はやや内側に断面四角形の高台が貼付される。内底部に薄く墨痕が残る。12・13はやや外に踏ん張る低い高台。18は内面と高台内に漆様の黒色塗料が残る。17・19は高台が付かない。灰白色で焼きが悪い。17は内面底部に僅かに墨痕が残る。20～22は口径17cm、器高5.4cm程で、底部と体部の



第20図 第11次調査地位置図 (1/500)

境が明瞭である。

高坏 (23~25) 口径21cm程。盤状の杯部中央に外に広がる脚部が貼付される。24・25は杯部のみの破片であるが、高坏とした。

甕 (26~31) すべて口縁部付近の破片資料。26は肩が張るタイプとなろう。胴部内面から頸部内面まで青海波タタキ、頸部から口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面はハケメがヨコナデにより消される。27はやや大型となる。頸部外面に工具による沈線がめぐる。

土師器

蓋 (32・33) 口径16cm程。32は摘みが付き、口縁部に返りが付く模倣品。天井部外面は回転ヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ、天井部内面はナデ。内面に煤が付着している。

杯 (34~43) 口径12.2cm~14.0cm。すべて体部・口縁部の開く度合いが比較的強い。調整は全て外底部をヘラ切りしたままで、そのほとんどに板状圧痕を伴う。体部内外面はヨコナデし、内底部の一部にナデを施す。35は体部がやや内湾し、口縁部は外に開く。底部に焼成後に径1.5cm程の穿孔が行われている。40はやや器肉が厚い。口縁部に油煙が付着する。41は体部が強く外反する。底部は未調整で粗い仕上がりである。

脚付き杯 (44・45) 44は口径15.0cm。杯部底面縁に外に踏ん張る高台が貼付される。体部から口縁部内

外面はヨコナデ、内底部の一部はナデられる。45は強く外反する体部に高い高台が付く。皿（46～49）口径15.0～15.4 cm。全て体部、口縁部はヨコナデ。49は器肉が厚く、底部をヘラ切り後に別の粘土が付着したまま焼成されている。甕（50・51）口径30cm以下の小型の甕。50は1/6程の小片で傾きに不安が残る。口縁部はヨコナデ、体部外面は縦方向のハケメ、体部内面はヘラズリを施す。

陶磁器

白磁（52・53）すべて胎土は灰白色。52は口縁部端が外反する。53は口縁が折り曲げられ、玉縁となる。

青磁（54～57）54・55は同一個体かもしれない。底部は蛇の目状となる。釉はやや褐味かった灰緑色で胎土は灰色である。56・57は底部の破片・56は見込みの重ね焼き部の畳付きには釉が掛からない。外面は露胎である。57は見込みの釉には貫入が認められる。

X=43.370

X=43.350

第21図 第11次調査遺構配置図（1/250）

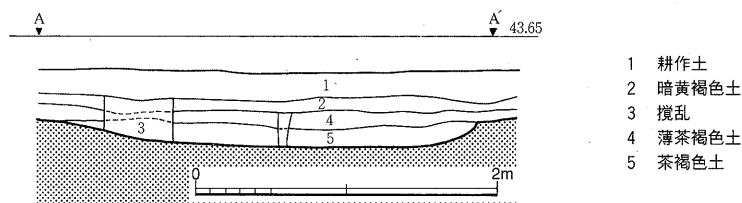
平成12年度調査（12～14次）

平成12年度は以前鬼瓦が出土し南門跡と推定されていた長安寺集落南東部（第12次）、昭和9年調査での第三號遺跡

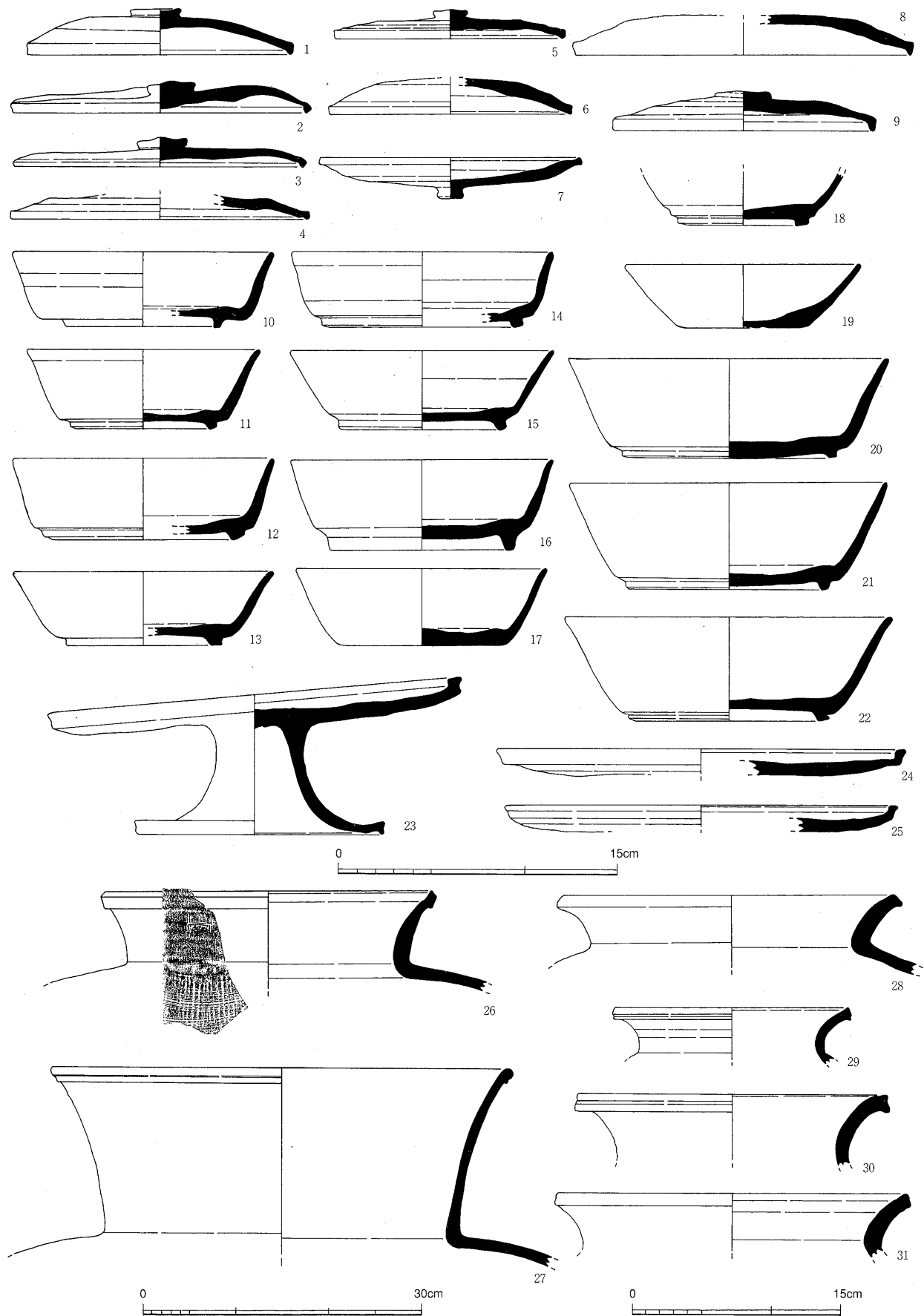
地、九州歴史資料館での第3次調査でのC・Dトレンチで礎石建物が確認されている長安寺集落東端（第13次）及び寺域推定地の北西部（第14次）の調査を行った。

12次調査（第25・26図，図版3）

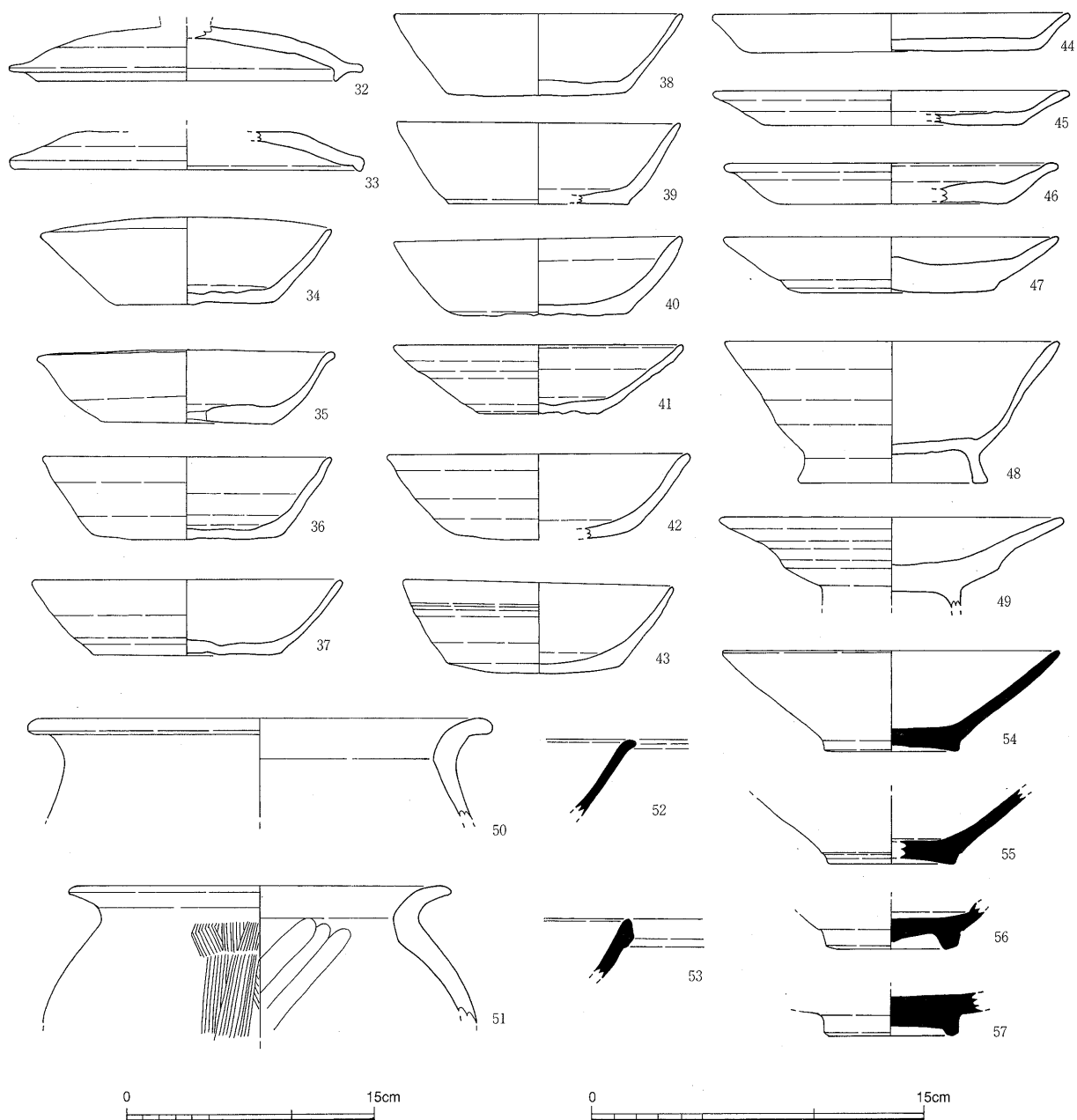
調査地は大字須川1347で長安寺集落の南東部にあたる。寺域推定地からは浅い谷を隔てた南側となる。この谷は東に伸びており、谷の北側に瓦窯があったとのことであるが、踏査では確認できなかった。調



第22図 第11次調査土層模式図（1/50）



第23図 第11次調査出土遺物実測図 (1/3、1/4、1/6) ①

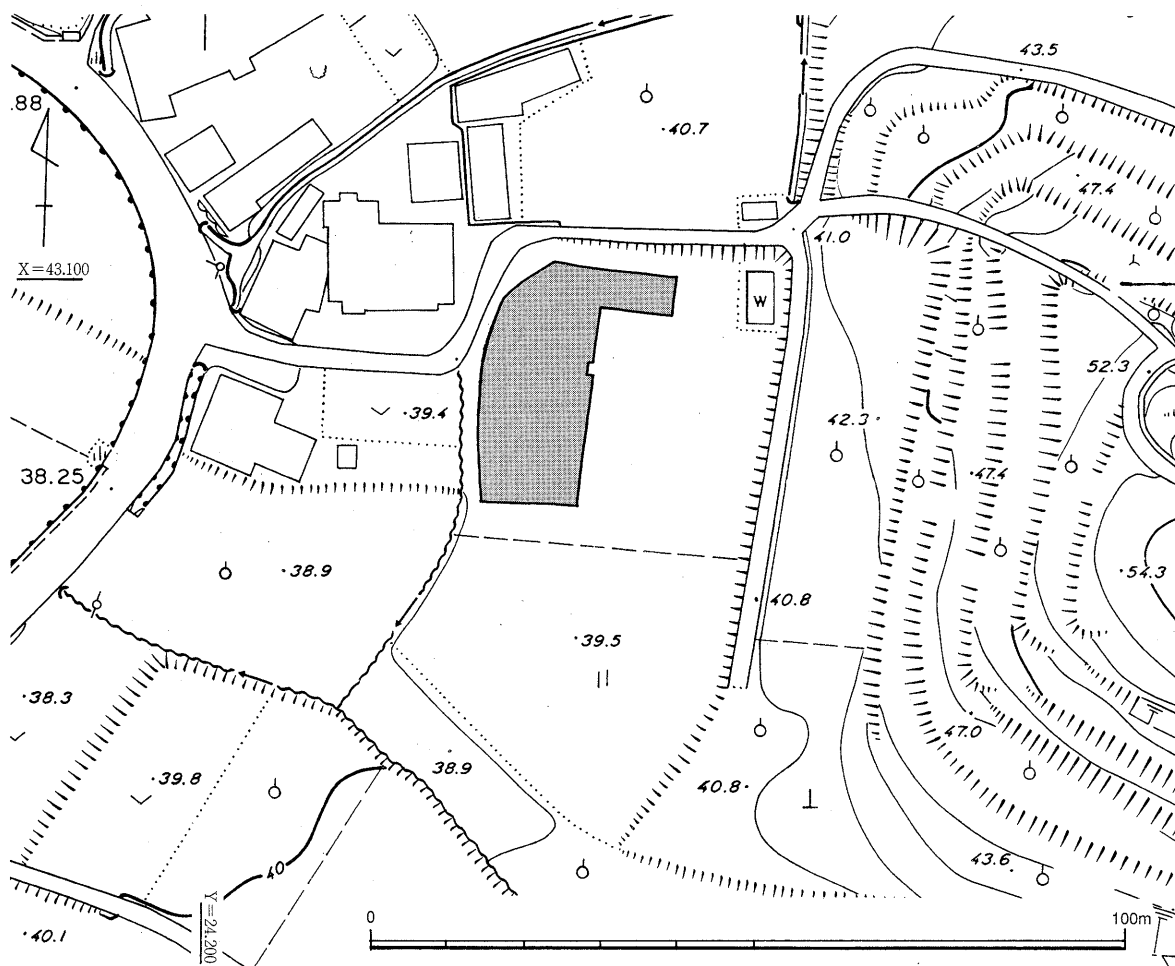


第24図 第11次調査出土遺物実測図 (1/3、1/4) ②

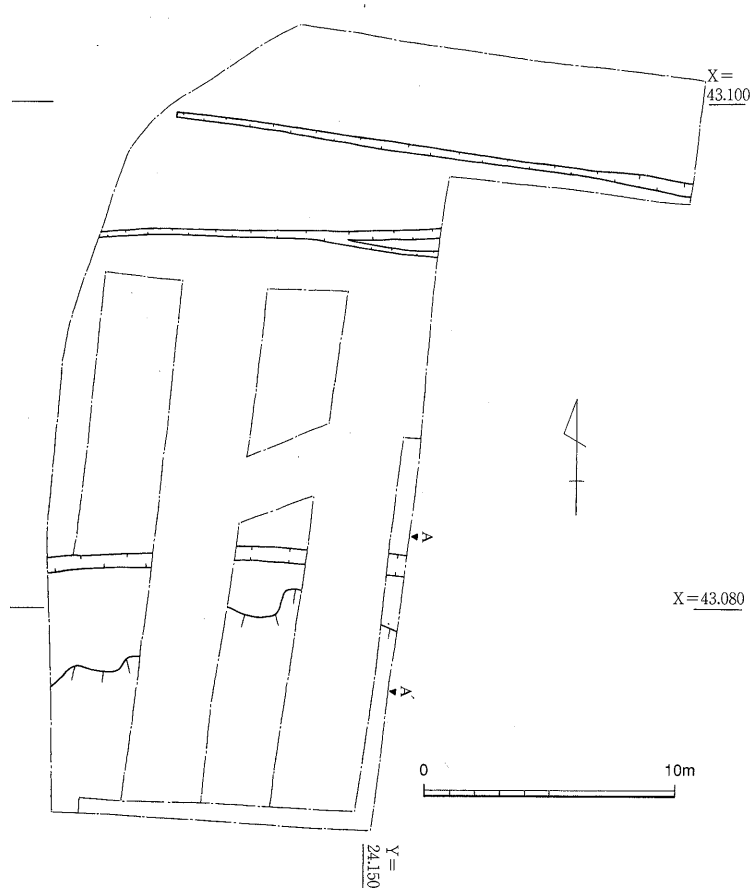
査地の南側からは昭和初期に鬼瓦が出土しており、南門或いは中軸線の道路状遺構などを想定した。調査の結果、調査区の南側は中世以降の大規模な土取りが認められ、それ以外の調査区内では遺構、遺物とも検出されなかった。

13次調査 (第28・29図)

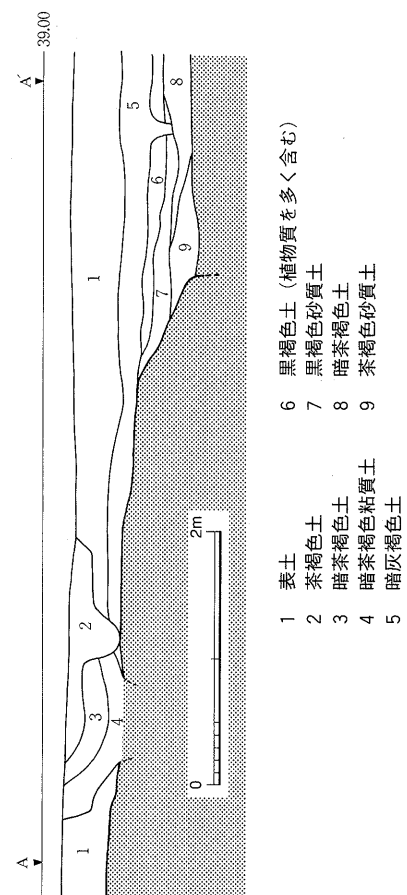
調査地は大字須川1289- 1に位置する。地元との協定により柿畑は調査外であったが、地権者の好意によりトレンチを設定することができた。従前の調査により礎石建物跡が検出されている地区である。台地の東端に位置し、東側は山裾となる。現況は柿畑で南北及び西側より1段高い。基壇状高まりの西側をAトレンチ、南側をBトレンチとした。九州歴史資料館の調査では積石積基壇とされていたが、今回のトレンチでは確認されなかった。また、以前の地形図では、南側は全面にわたって階段状に段が付



第25図 第12次調査地位置図 (1/1000)



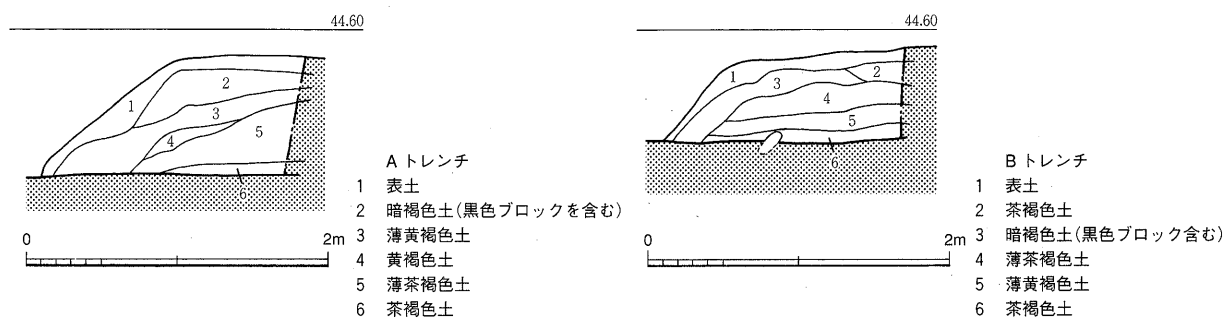
第26図 第12次調査地遺構配置図 (1/300)



第27図 第12次調査土層模式図 (1/60)



第28図 第13次調査地位置図 (1/500)



第29図 第13次調査トレンチ断面図 (1/50)

いているが、現況では東側に残るのみである。A・Bトレンチとも積み土であり、遺物も出土するが、版築状に付き固めたとは言いがたい。

14次調査 (第30図)

調査地は大字須川1174に位置する。推定寺域の北西端にあたる。調査地の30m程北側は丘陵の裾部となり、湧水地がある。湧水池から南に向かって幅20m程の窪地があり、調査地の西側を通る。調査地は南北、東側より僅かに低く、削平が行われているかも知れない。遺構は認められなかった。



第30図 第14次調査地位置図 (1/500)

出土遺物 (第31図, 図版16)

須恵器

蓋(1) かえりを持つ口縁部の小破片で径に不安が残る。天井部外面はヘラケズリ、体部はナデで明瞭な段が残る。

碗(2) 底部内外面は手持ちヘラケズリで体部から口縁部内外面はナデられる。灰白色を呈し焼成不良である。

土師器

小皿(3~5) すべて糸切りである。3は赤橙色を呈し底部に板状圧痕が認められる。

皿(6~9) すべて糸切りである。6は底部外面は平滑にナデられる。底部と体部から口縁部の境は明瞭である。体部外面はヘラミガキが施される。

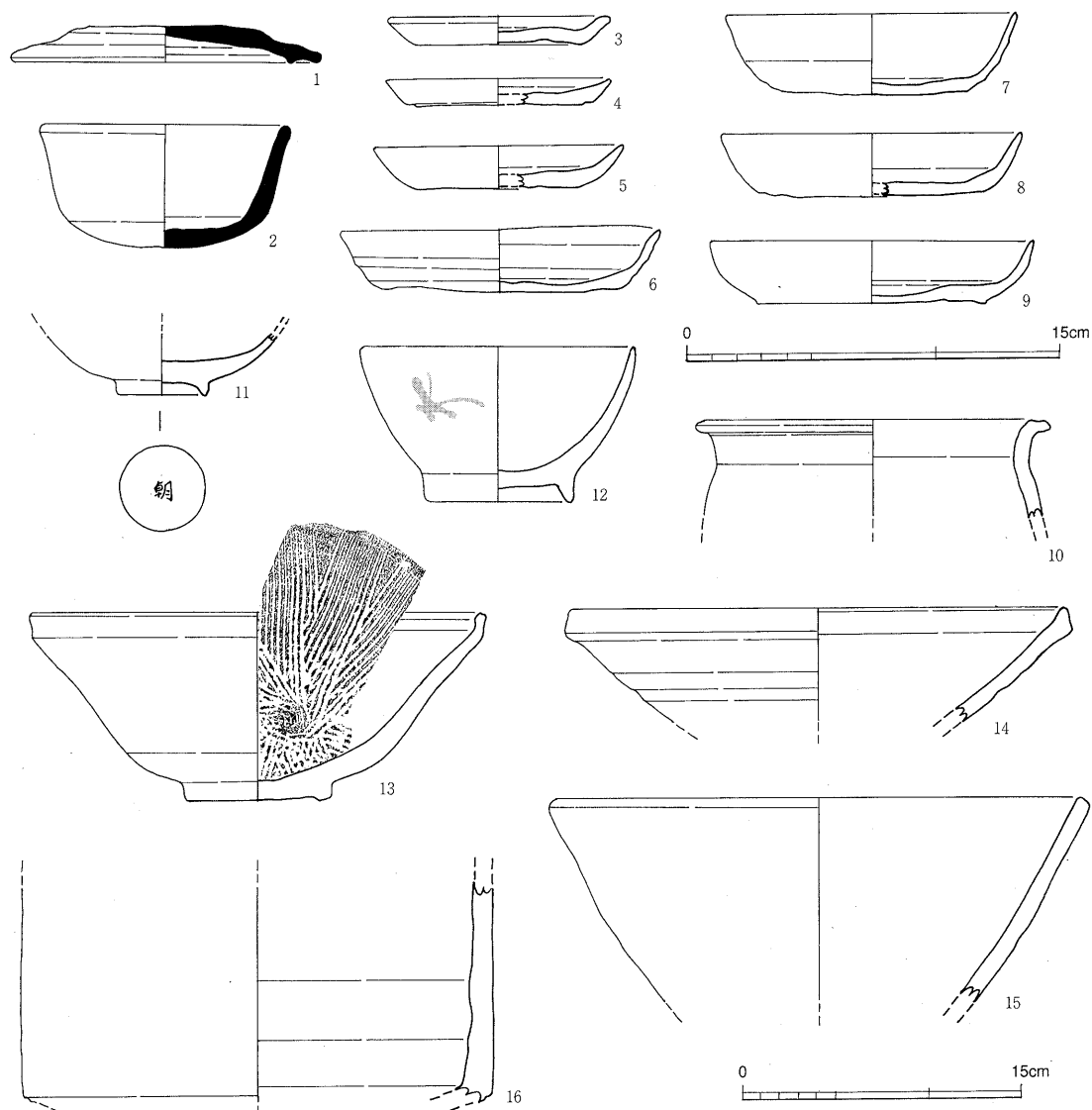
甕(10) 口縁部付近の小破片。小型の甕で体部が膨らむと思われる。器面調整は口縁部をヨコナデし、体部に縦方向のハケメ、体部内面に粗いヘラケズリを施す。

染付

碗(12・13) 11は高台から体部にかけてまるくゆるやかに湾曲する。外面に野菜文、高台内に「朝」字が入られる。左側のつくりは「卓」である。12は高台から斜め上方に体部が伸びる。蝶文が施される。

陶器

鉢(13~15) 13は9本単位の櫛書き揺目が施され、釉が口縁部から体部中位までかけられる。14は須恵質の鉢で口縁部端に自然釉が掛かる。15は瓦質で底部を欠く。体部から口縁部まで直に伸びる。



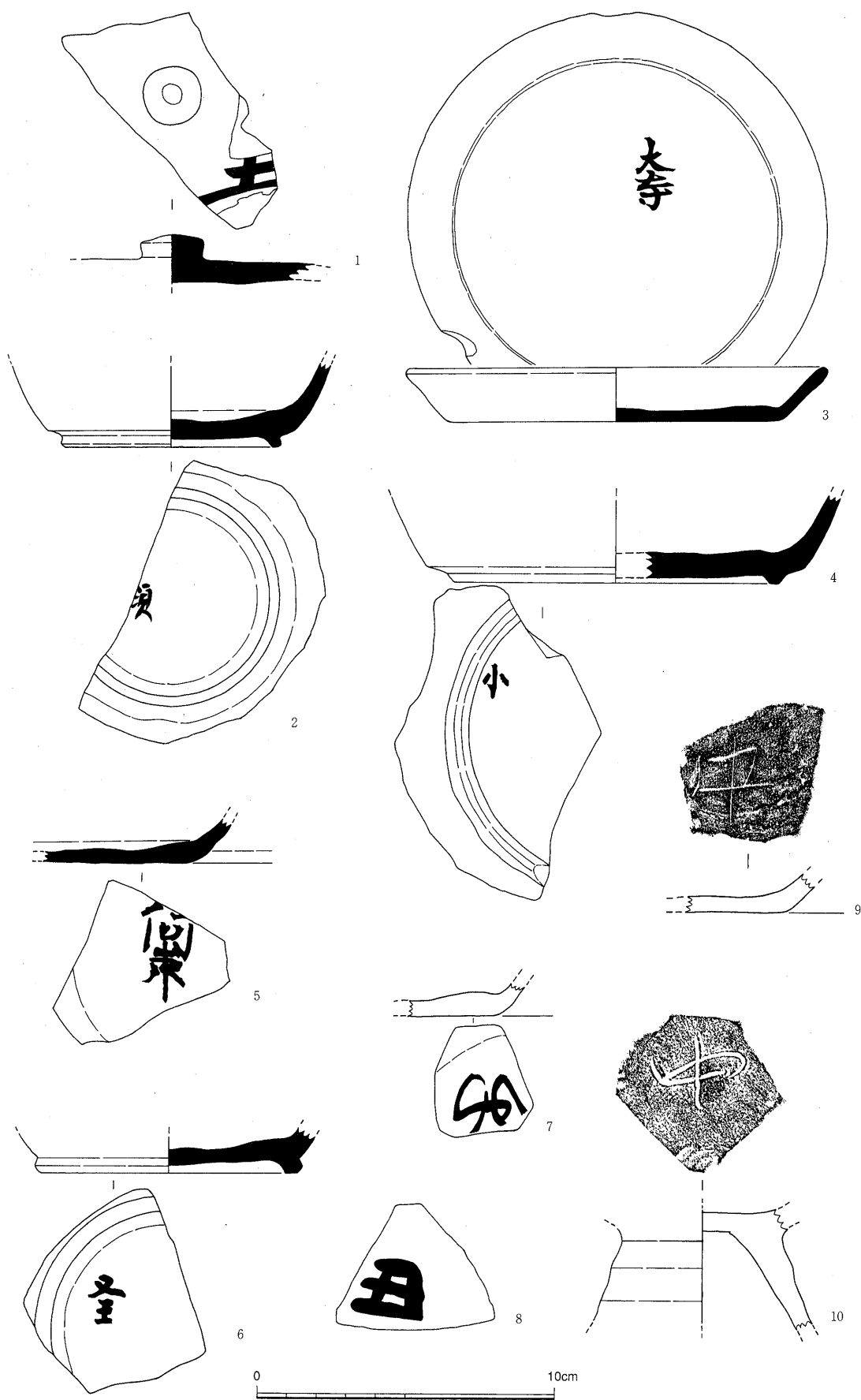
第31図 第12次調査出土遺物実測図 (1/3、1/4)

火鉢 (16) 体部下半の資料。瓦器質で外面に幾何学様の押印が施されるが摩滅し判然としない。

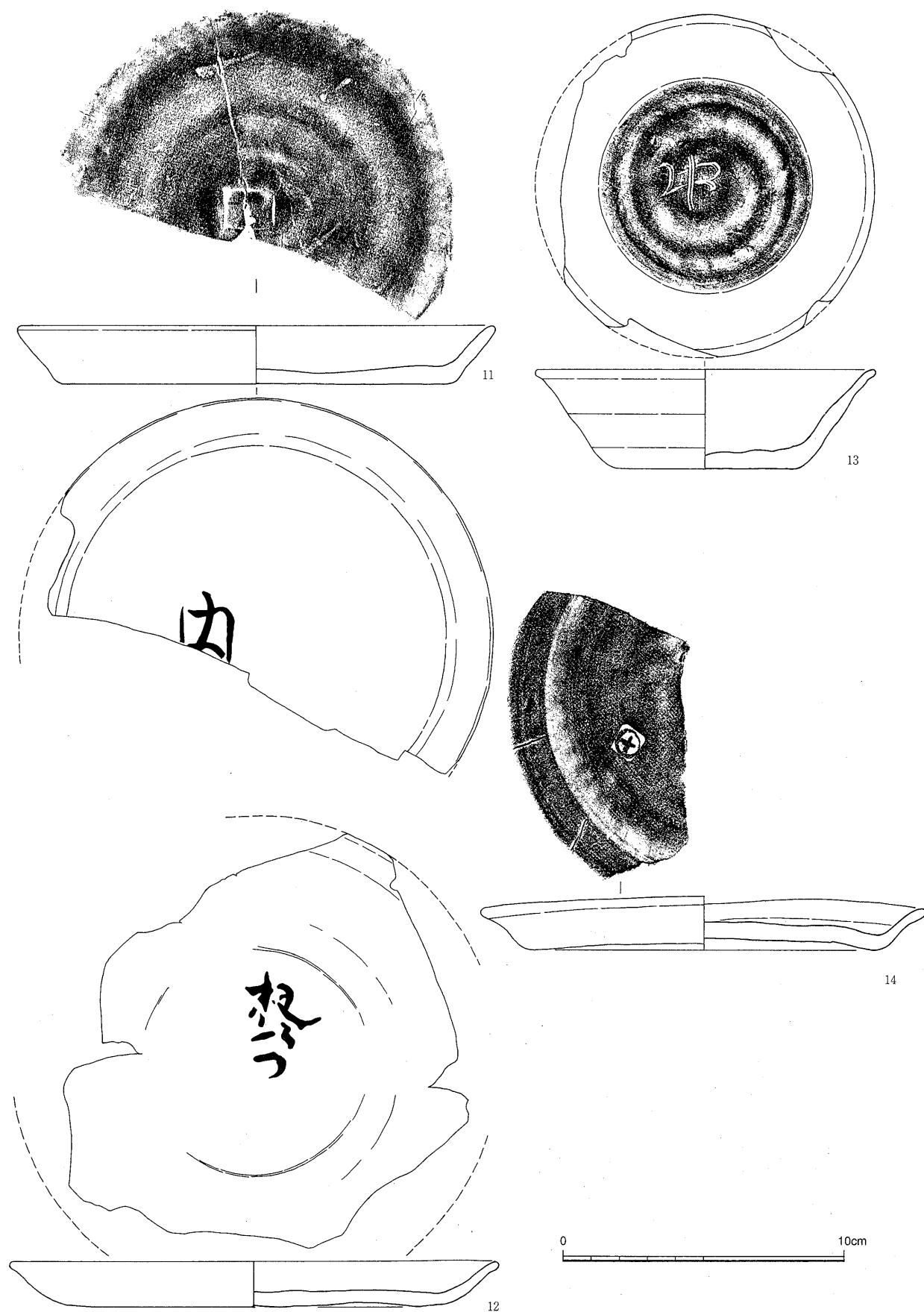
文字資料 (第32～35図, 図版17～19)

昭和8・9年の調査では墨書34点、線刻2点、刻印1点の土器が報告されている。7次調査以降文字・記号として認められる、あるいは判読できないが文字・記号と考えられる墨書が38点、線刻により文字・記号が記されるものが9点、刻印4点、絵画が描かれる1点の土器が確認された。文字は「寺」、「大寺」、「知識」など寺院に関係する内容、「乙成」、「又王」など固有名詞と考えられるものなどがある。5は文字がややにじんでいるが、「何束」と読めそうである。上座郡の7郷の中に「何束」があり、現在地は不明である。長安寺廃寺跡周辺が「何束」郷であった可能性もある。

木簡 5点の木簡が出土した。内容については「木簡研究」22号で報告されている。習書が1点あり、その他は内容が文章として完結するものがなく、年号もない。



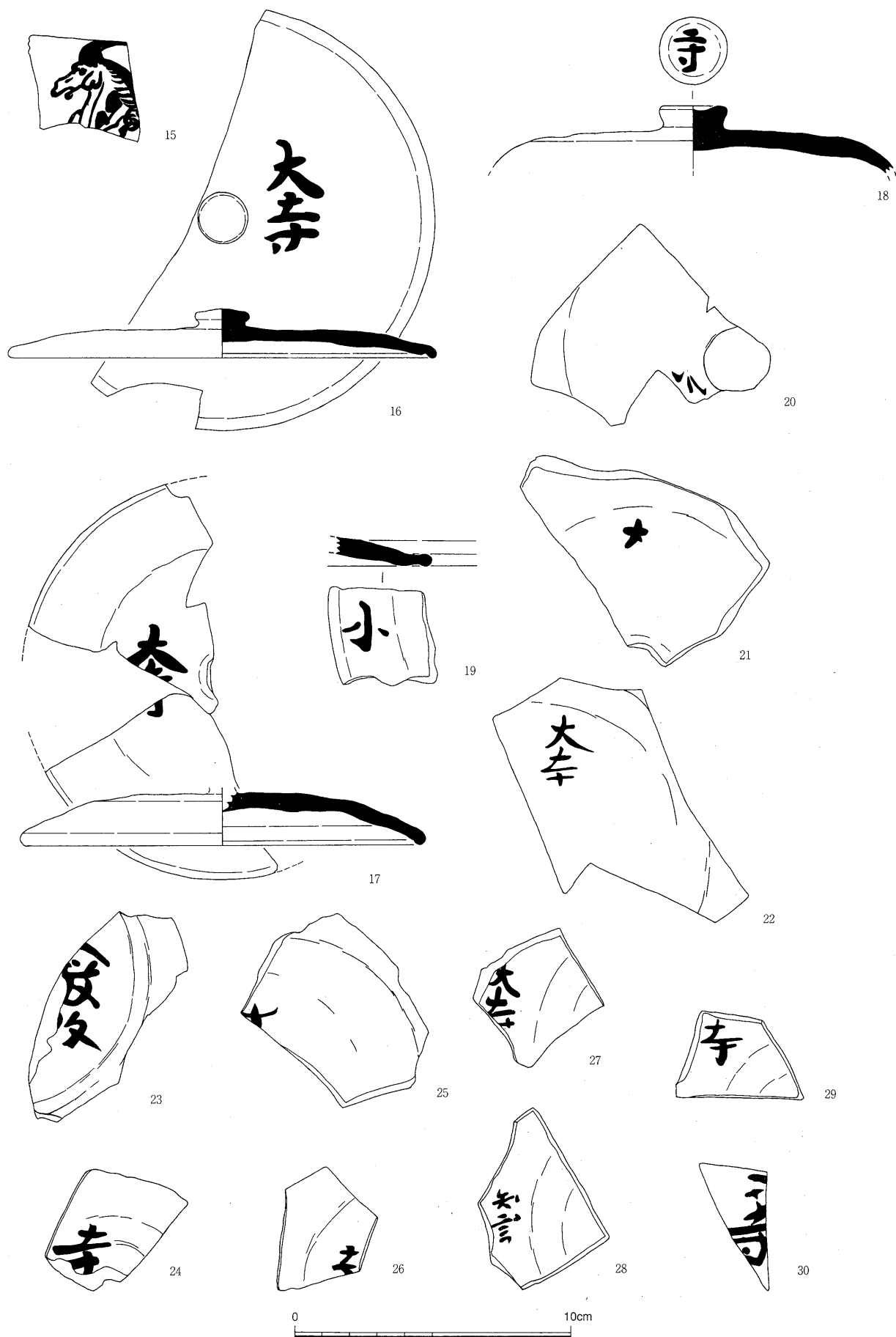
第32図 墨書土器実測図 (1/2) ①



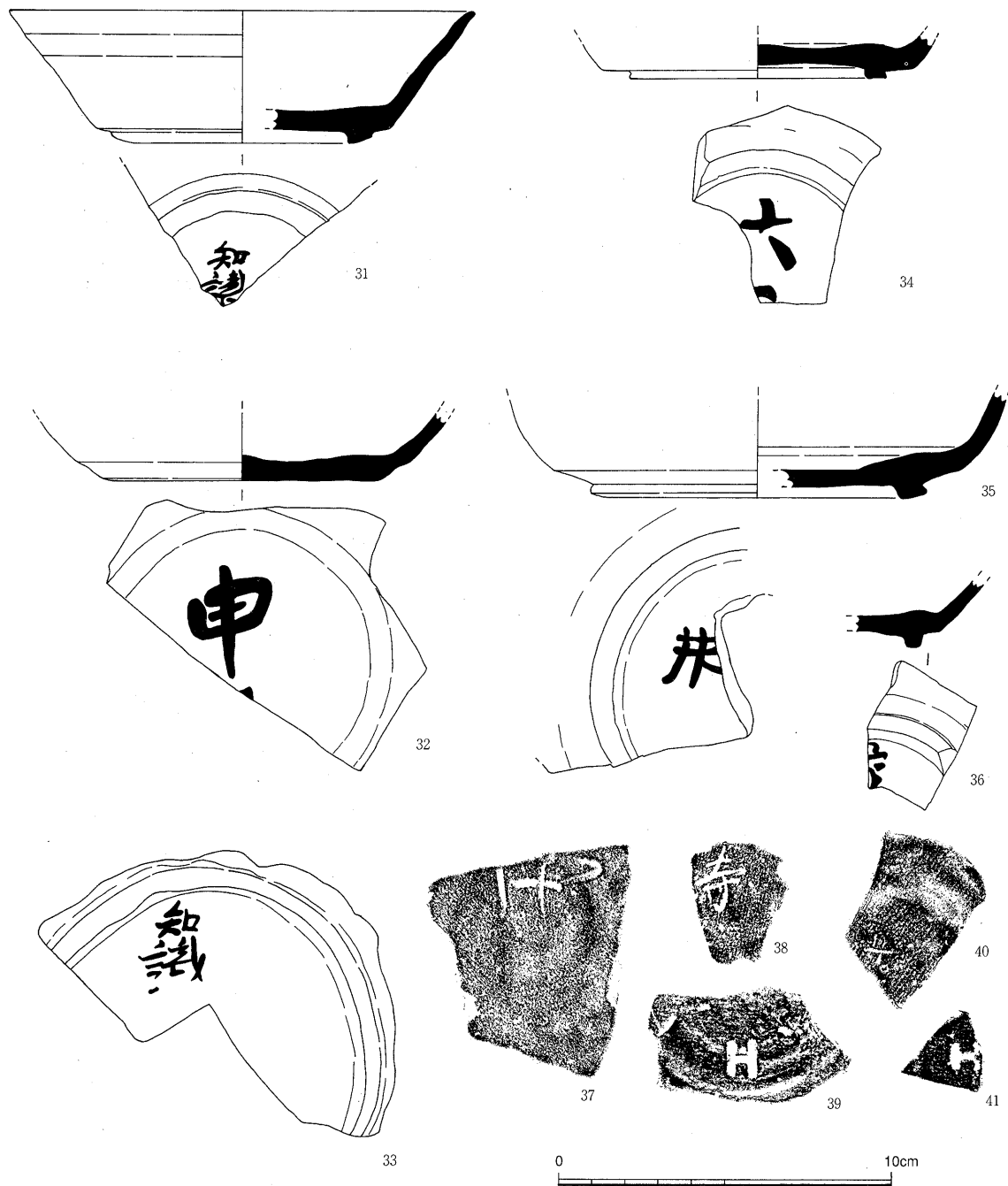
第33図 墨書土器実測図 (1/2) ②

第2表 墨書土器一覧表

図版－番号	調査次	文 字	器種	土 器 特 徴	備 考
6－33	7	「□□□」	須杯	灰白色・焼成甘い	文字不明、3文字か
7－52	7	「□□□」	土碗	高台有	文字不明、3文字か
7－60	7	□（寺カ）	土碗		先端複数の工具による範書
7－63	7	「＋」	土碗		鋭利な工具による範書 記号
8－69	7	「□（寺カ）	土皿	灰茶褐色・焼成甘い	大書、下半分欠損
8－70	7	「□（田カ）	土皿		大書、下半分欠損
8－71	7	「□」	土皿		墨痕薄い、1文字か
8－72	7	□	土皿	破片、器種、部位不明	記号？
9－85	7	「大寺」	須杯		大の右に墨痕あり
32－1	8	□（寺カ）	須蓋	破片	下半分欠損
32－2	9	□（領カ）	須杯	高台付き	左側欠損
32－3	9	「大寺」	須皿	完形	楷書
32－4	9	「小」	須杯	焼成やや甘い	
32－5	9	□（何カ）□（束カ）	須	破片	上部欠損、地名？
32－6	9	「又王」	須杯	高台付き	内面赤色顔料有り
32－7	9	「□」	須	破片	一部欠損、上下不明、記号
32－8	9	「□（丑カ）	土	破片、部位不明	墨痕薄い
32－9	9	中	土	破片、部位不明	範書、鋭利な工具
32－10	9	「中」	土碗	破片	範書
33－11	9	「□（内カ）	土皿		下半分欠損
33－12	9	「□（枚カ）□」	須		墨痕薄い、2文字か
33－13	9	「中」	土杯		先端複数の工具による範書
33－14	9		須		刻印、陽刻
34－15	11	墨画	須	破片	馬頭様
34－16	11	「大寺」	須蓋		
34－17	11	「大□（寺カ）	須蓋	破片	寺の上部から下欠損
34－18	11	「寺」	須蓋	灰白色、焼成甘い	
34－19	11	小」	須蓋		
34－20	11	□	須蓋	灰白色、焼成甘い	墨痕薄い
34－21	11	「□（大カ）	須		墨痕薄い
34－22	11	「大寺	須蓋	破片	寺の下部欠損、墨痕薄い
34－23	11	□□	須蓋		墨痕薄い、2文字か
34－24	11	「□（寺カ）	須	薄灰褐色	墨痕薄い、下部欠損
34－25	11	□（寺カ）	須蓋		一部のみ
34－26	11	「□（寺カ）	須蓋	破片	下部欠損
34－27	11	□（大カ）□（寺カ）	須	破片	寺の下部欠損
34－28	11	「知識	須蓋	破片	左側の墨痕薄い
34－29	11	□（大カ）寺」	須蓋	破片	墨痕薄い
34－30	11	□（寺カ）	須		墨痕薄い、両端欠損
35－31	11	「知識	須杯	高台付き	識の下部欠損
35－32	11	「申□	須		2文字か
35－33	11	「知識」	須杯	高台付き	
35－34	11	「□（大カ）□	須杯	高台付き	墨痕薄い、2文字以上
35－35	11	□	須杯	高台付き	
35－36	11	「□	須杯	高台付き	一部のみ
35－37	9	中」	土	破片、部位不明	範書、上部欠損
35－38	11	寺」	土	破片、部位不明	範書
35－39	11		土	破片、部位不明	刻印
35－40	11	□	土	破片、部位不明	範書
35－41	11		土	破片、部位不明	刻印、35－39とは別原体



第34図 墨書土器実測図 (1/2) ③



第35図 墨書土器実測図 (1/2) ④

木製品 (第36図, 図版20)

木製品のほとんどが大溝からの出土である。16は第12次調査出土。

建築部材 (1～4・6) 1～4は断面長方形の棒状木製品で、やや歪な方形の穴があり、差込部であろう。穴は交互に貫通する。表面は四面とも丁寧に削られ平坦である。

箸 (5) 長さ17.4cmで、断面は持ち部が方形、先端は円形である。先端に向かって細くなり、先端部は丸味を帯びる。

刷毛 (7) 柄部は断面8角形。先端は薄く割られ、塗布部が挟まれる。全体に漆様の塗料が塗布される。

杓子（8） 現存長22.6cm。削りだしの製品で、柄部先端が欠損する。内面は未調整でつくりが粗い。

円形木盤（9～11） 径14.0cm～19.0cm、厚さ0.8cm程の板目材。曲げ物の底板であろう。

棒状木製品（12～14・19） 12は槌で現存長27.8cm。柄部は径1/2程まで削られる。先端は丸く調整される。13は現存長12.2cm程。断面が不正円形の円周1/3程を先端から4.3cmまで削る。何らかの柄部であろう。14は長さ18.2cm。中央部を粗い削りで2/3程の太さにする。19は現存長8.2cm、直径1.8cmで両端は欠損する。断面は円形で丁寧に造られる。

球状木製品（15） 木製のやや扁平な球に穴を穿ったもの。漆様の塗料が塗布される。

皿（16） 底部付近の資料。体部から口縁部にかけて直に立ち上がるものと思われる。底部に回転削りだしの痕が残る。

板状木製品（17・18） 扁平な板状を呈し、表裏とも平滑である。墨痕はないが木簡の可能性もある。

瓦（第37～38図、図版21）

瓦類は遺物収納コンテナ160箱が出土している。7～14次調査までで軒丸瓦2種、軒平瓦2種が出土している。軒丸瓦においては、朝倉町公民館所蔵品に長安寺出土の老司系の軒丸瓦及び巴文の瓦が保管される。また、『九州古瓦図録』では軒丸瓦4形式、軒平瓦3形式が確認されている。これに巴文はふくまれておらず、軒丸瓦は5形式となる。今回出土した瓦のほとんどは破片資料であり、出土瓦全体の整理は終了していないが、完形に復元できるものはない。凸面は縄目と格子目があり、格子目は7種確認できた。なお、平瓦のうち造りが確認できるものはすべて粘土板桶巻き造りである。丸瓦については同様に確認できるものはすべて玉縁式である。丸瓦の凸面はほとんどがすり消されている。

軒丸瓦（1・2） とともに鴻臚館系の軒丸瓦である。複弁で1+4+8の蓮子を配す。1は一部欠損するが外区には24個の朱文を配置する。2は瓦当文様が簡便化する。

軒平瓦（3～5） 3・4は左右に四回反転する唐草文を配置する。上外区は杏仁様の朱文、下外区には鋸歯文を配す。軒丸瓦1とセットになると思われる。5は上下外区に朱文をもつ扁行唐草文で瓦当目の彫りが浅い。

平瓦・丸瓦片（6～12） 6～9・11は平瓦片。6は最も小さい格子を持つもので彫りが深い。側面には破面が粗く残る。7は彫りが浅く、格子線が狭小なもの。8は格子線の幅が広く格子は菱形になる。11は歪な格子となるもの。10・12は丸瓦片。12は格子が二重になる。

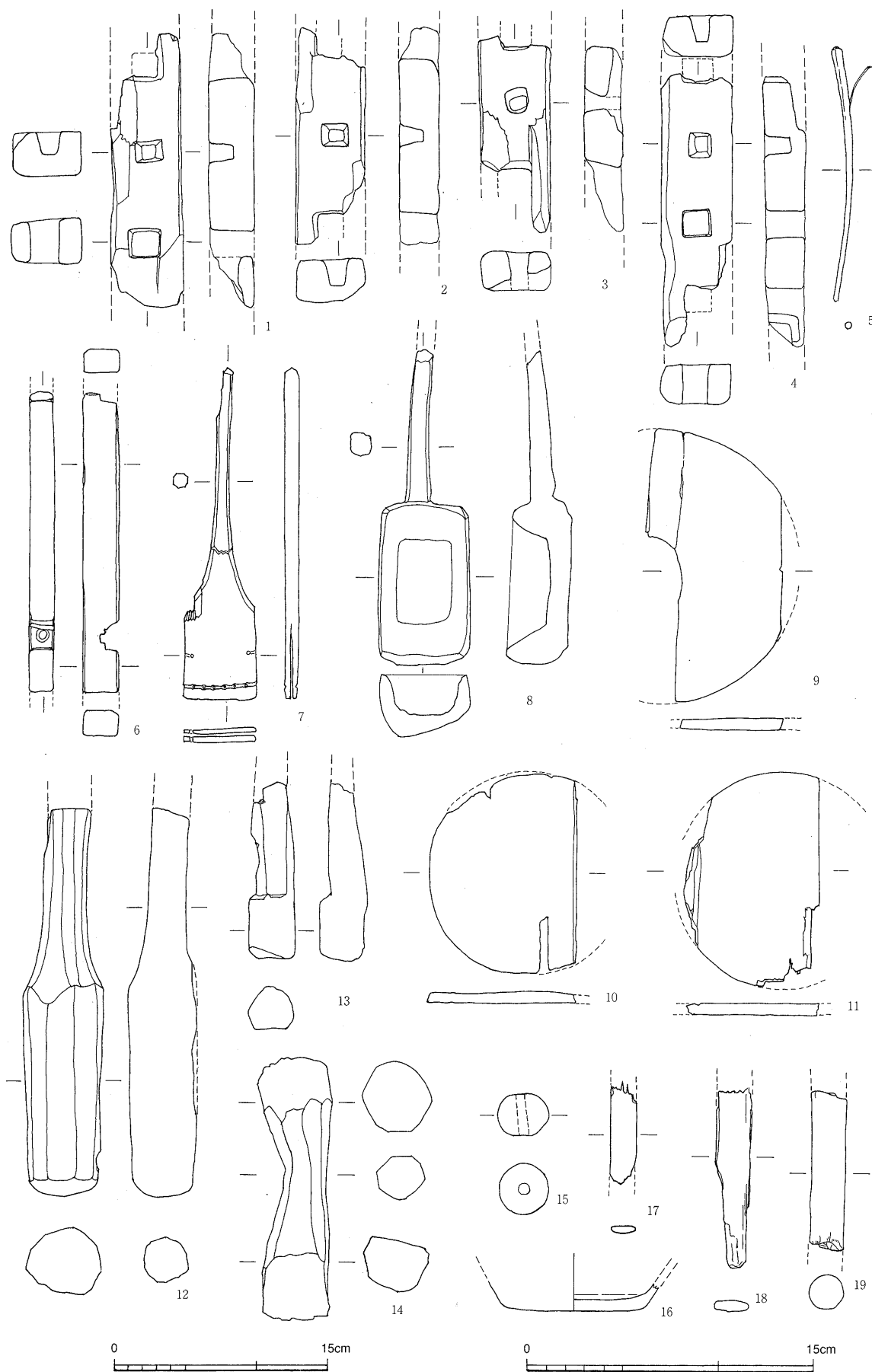
鬼瓦（13） 球形の意匠から沈線が延びるもので、大宰府系鬼面鬼瓦の左目付近の破片。

文字瓦（14～21） 14～19は「平井」銘瓦。20・21は「加茂」銘の瓦である。すべて大宰府出土の文字瓦と一致する。軒瓦瓦当面とともに大宰府から范が貸与されたものであろう。

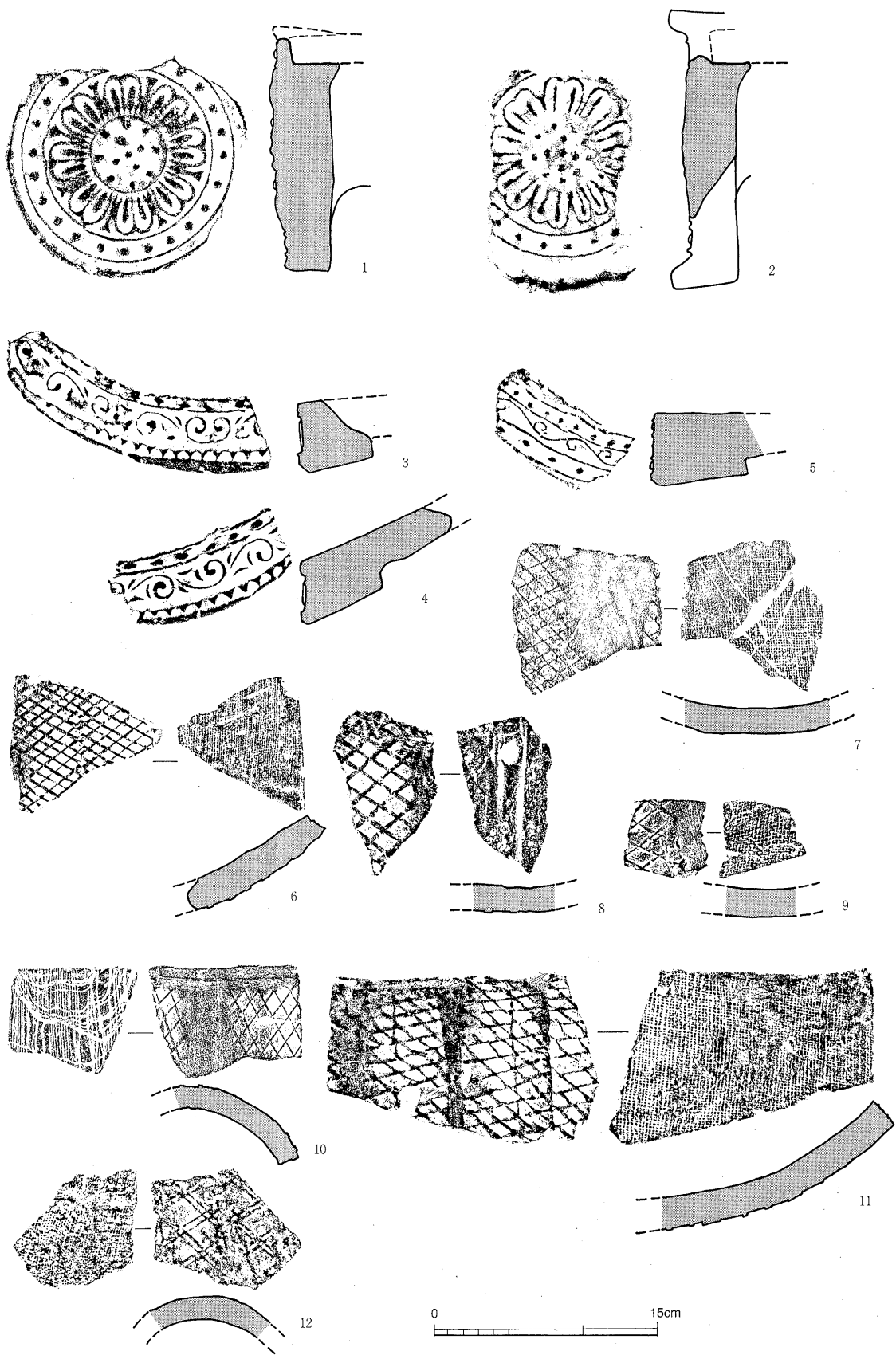
寺域及び伽藍配置（第39図）

平成5年度の第7次調査から始まり、伽藍配置を目的として調査を始めたが、主要な遺構が確認できずに調査が終了した。これまでの調査により寺域・伽藍配置の推定材料として呈示できるのは長安寺区東端の礎石建物（基壇）と大溝及び遺物出土の多寡のみである。資料としては貧弱であり、もちろん伽藍配置を考察できるものではない。長安寺廃寺跡の伽藍配置については昭和8・9年の調査を元に鏡山猛氏により推定が行われているが、調査の成果を含めて寺域・伽藍配置について考察してみたい。

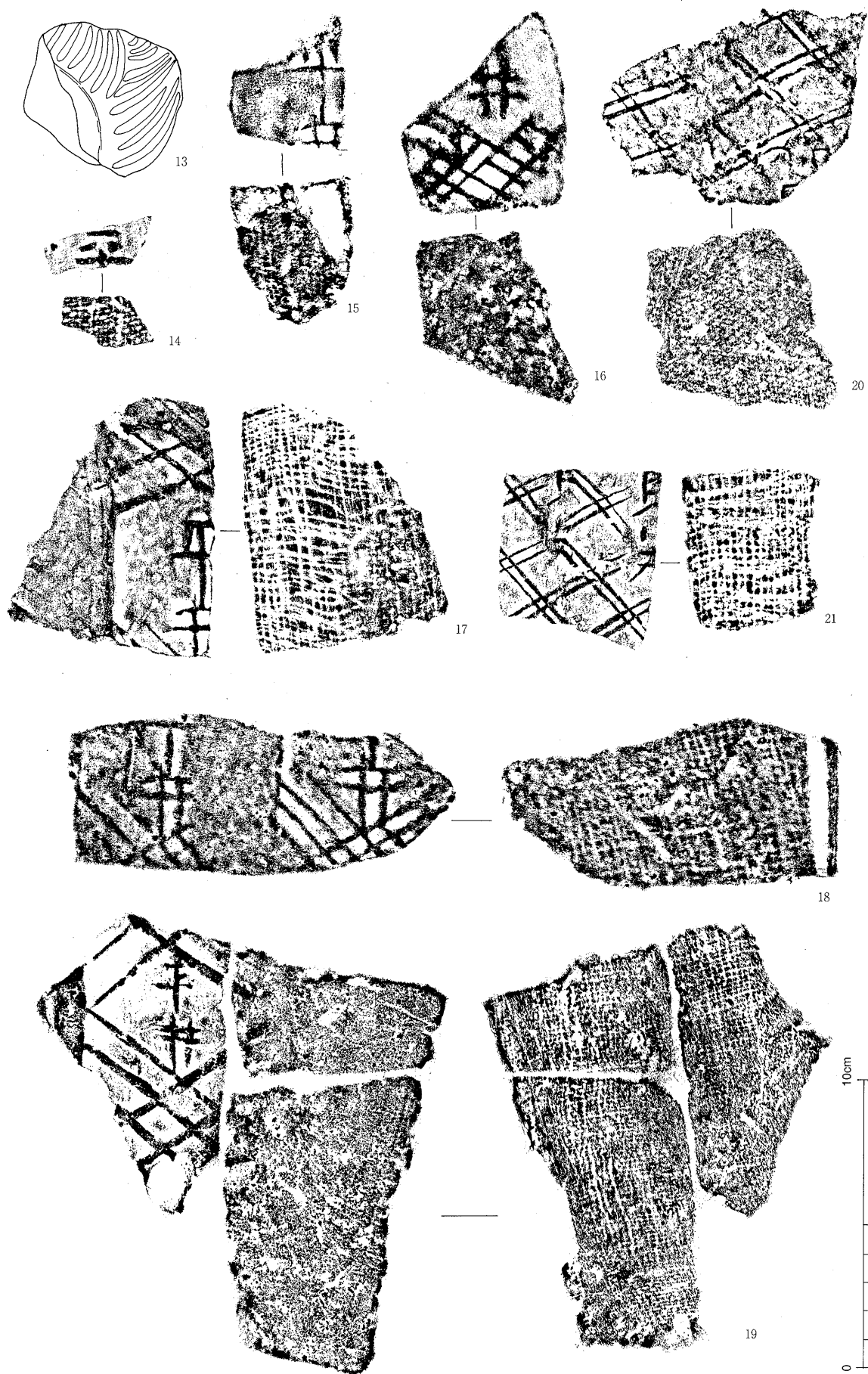
遺跡の範囲として、地形及び遺物の出土状況から、寺院は長安寺集落東側台地の南北250m、東西100mの長方形区画内であることは間違いなからう。鏡山案によると、伽藍の中心を東西道路＝大溝の南側



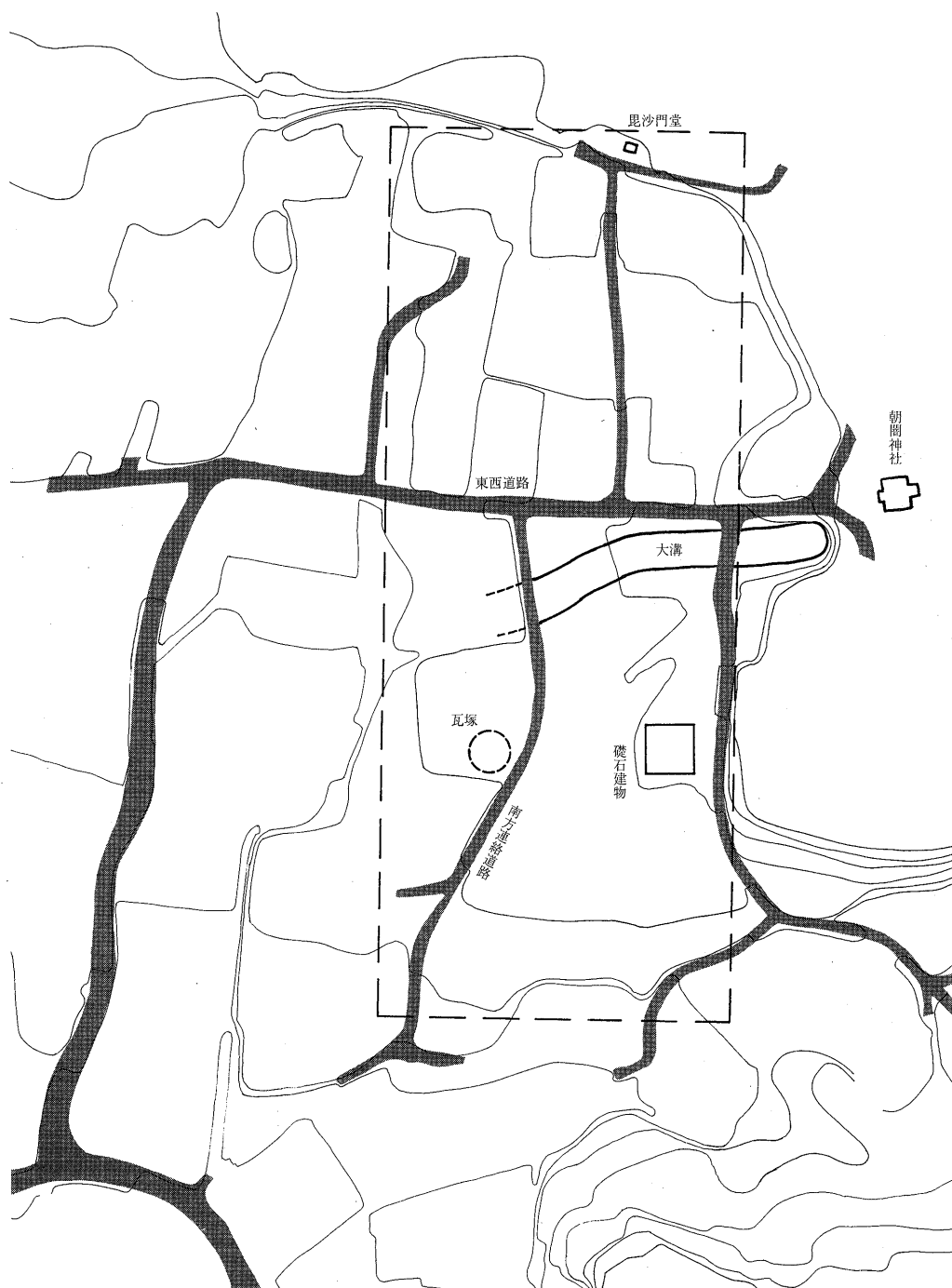
第36図 木製品実測図 (1/3、1/4)



第37図 瓦実測図 (1/4) ①



第38図 瓦実測図 (1/2) ②



第39図 寺域推定図 (1/2000)

台地の中心と仮定し、瓦塚が講堂基壇であり、塔及び金堂がその南方に連なって立ち、低地を経て南大門が存するとした。礎石建物跡については僧坊としている。なお、氏の考えのうち、塔及び金堂が「連なって」とあり、南北か東西か明らかでない。「瓦塚」とは、南方連絡道路の西側にあったとされる少なくとも昭和8・9年の調査までは存在していた基壇状の高まりである。地元古老の話及び地割から須川1282に存したと思われる。この瓦塚については、九州歴史資料館のA・Bトレンチ付近であるが、昭和50年の時点ですでに削平され水田になっていると報告され、遺構、遺物は確認されていない。数名の古老に尋ねたが、何時の時点で削平されたか明らかにできなかった。したがって、この「瓦塚」については詳細は不明のままであり、建物基壇かどうか確認できない。第三號遺跡地、九州歴史資料館第3次調

査C・Dトレンチで確認されている基壇を持つ礎石建物が主要伽藍であるかどうかとも問題となる。建物は東側の山裾に接近しており、東側には区画施設を想定しにくい。13次調査では確認できなかったが、九州歴史資料館調査では板石積基壇とされている。鏡山案では僧坊建物と考えられているが、主要伽藍の一堂宇としても遜色はない。少なくとも寺域内の主要な建物と言える。また、大溝については、創建時には開削されていたと思われ、遺物の出土状況からこの大溝の北側にも瓦葺き建物の存在が窺われる。

以上のことから長方形台地内で伽藍配置を想定すると以下の案が考えられる。

- A 昭和8、9年調査報告での伽藍配置が考えられる。また、礎石建物跡を主要伽藍と考えると、瓦塚、礎石建物跡を結ぶ線の北側に主要伽藍が存在するとも考えられる。
- B 主要伽藍は金堂、もしくは金堂及び講堂/塔の1～2棟であった場合となる。この場合は礎石建物跡、瓦塚が主要建物となろう。
- C 中心が南で瓦塚が基壇でない場合、三堂を想定することは難しい。
- D 礎石建物跡を主要建物と想定し、他に伽藍が存在しない場合である。台地内での配置から見てややバランスを欠く。
- E 寺院の中心を北側とした場合、情報が少なく伽藍配置の想定は難しい。道路北側に三堂を押し込めるの難しい。
- F 寺院の中心を北側とした場合の妥当な考え方である。しかしながら、基壇が存在するとすれば現在の民家直下と考えられ、調査も困難であり配置を考察することができない。平成9年調査の瓦の分布から、駐車場の北西方向に瓦葺き建物が考えられる。

いずれにしても大溝の南北に寺院を構成する建物は存しており、木簡、墨書土器など出土遺物から見ても上座郡を代表する有力な地方寺院であることは間違いない。推論を多く重ねたが、今後とも長安寺廃寺跡の調査研究が進展すること期待したい。

	寺院の中心は大溝の南		寺院の中心は大溝の北
	瓦塚は基壇	瓦塚は基壇ではない	
三堂は存在	A	C	E
三堂は存在しない	B	D	F

Ⅲ．宮地嶽古墳群の調査

調査に至る経過

宮地嶽古墳群は朝倉町域の西北部、宮地嶽山麓一帯に所在する古墳群である。昭和53年発行の福岡県遺跡分布地図では前方後円墳、湯の隈古墳（装飾古墳）を含む20基が踏査されている。現在山頂部を除くほとんどが果樹園となっており、山頂部及び湯の隈古墳付近は史跡公園として整備されている。宮地嶽神社周囲の山頂部周辺では今回の調査の結果8基の円墳が確認された。史跡公園は東西に長い略楕円形で概ね西側に傾斜し、前方後円墳は最も西側に位置する。前方後円墳は古墳群を代表する古墳であることから、宮地嶽古墳（1号墳）とし、以下第40図のとおり2～9号墳まで番号を付した。湯の隈古墳は宮地嶽中腹より南西に派生する丘陵頂部に位置する。このため湯の隈古墳は宮地嶽古墳群とは別個のものとした。宮地嶽古墳群は史跡公園として整備されており、開発などの危惧はなくなっているが、宮地嶽古墳が史跡公園の縁辺に所在するため、下段の果樹園開墾時の段が迫っており、後円部を中心に墳丘の崩落が徐々に進行している。このため、宮地嶽古墳の墳丘規模を確認する必要性が生じた。宮地嶽古墳については宮地嶽古墳調査会により墳丘測量が行われ、墳丘の復元案が提示されている。今回の調査ではこの宮地嶽古墳調査会による墳丘復元案に基づき墳丘基底部の検出を試みた。

調査の概要（第42図，図版22）

宮地嶽は朝倉町北西部の丘陵で、山頂には国土地理院設置の宮地三角点が存在する。標高は109.6mで朝倉山塊から八つ手状に派生する山である。山頂付近はパイロット事業による開墾を免れている。目視により確認できる墳丘上には樹木がほとんどなく、後円部頂部に立つと精美な前方後円墳であることが確認できる。調査は平成11年度（A～Cトレンチ）及び平成12年度（D・Eトレンチ）に行った。

Aトレンチ 主軸方向の後円部端に設定した。基底ラインと思われる岩盤削り出し部については北西部に拡張した。表土下約35cmで堆積している黄褐色土を除去すると安山岩系の風化岩盤に達する。トレンチの西側2/3については葺石若しくは葺石の転落石と思われる石が検出された面で止めた。岩盤の段は調査会による復元案の基底ライン上にあるが、北側に拡張したところ大きく内側に屈曲した。Eトレンチでの陸橋部の存在を含め後世の人為的な改変の可能性もある。

Bトレンチ 主軸直交方向の後円部端に設定した。Aトレンチと同様に調査会による復元基底ライン上に基底部の石列と思われる直径50cm前後の石を4個検出した。北側の2個は原位置から転倒していると思われる。石列から墳丘側1.2m程に傾斜の変換点があり、その上に平坦面が認められ、テラス部かもしれない。

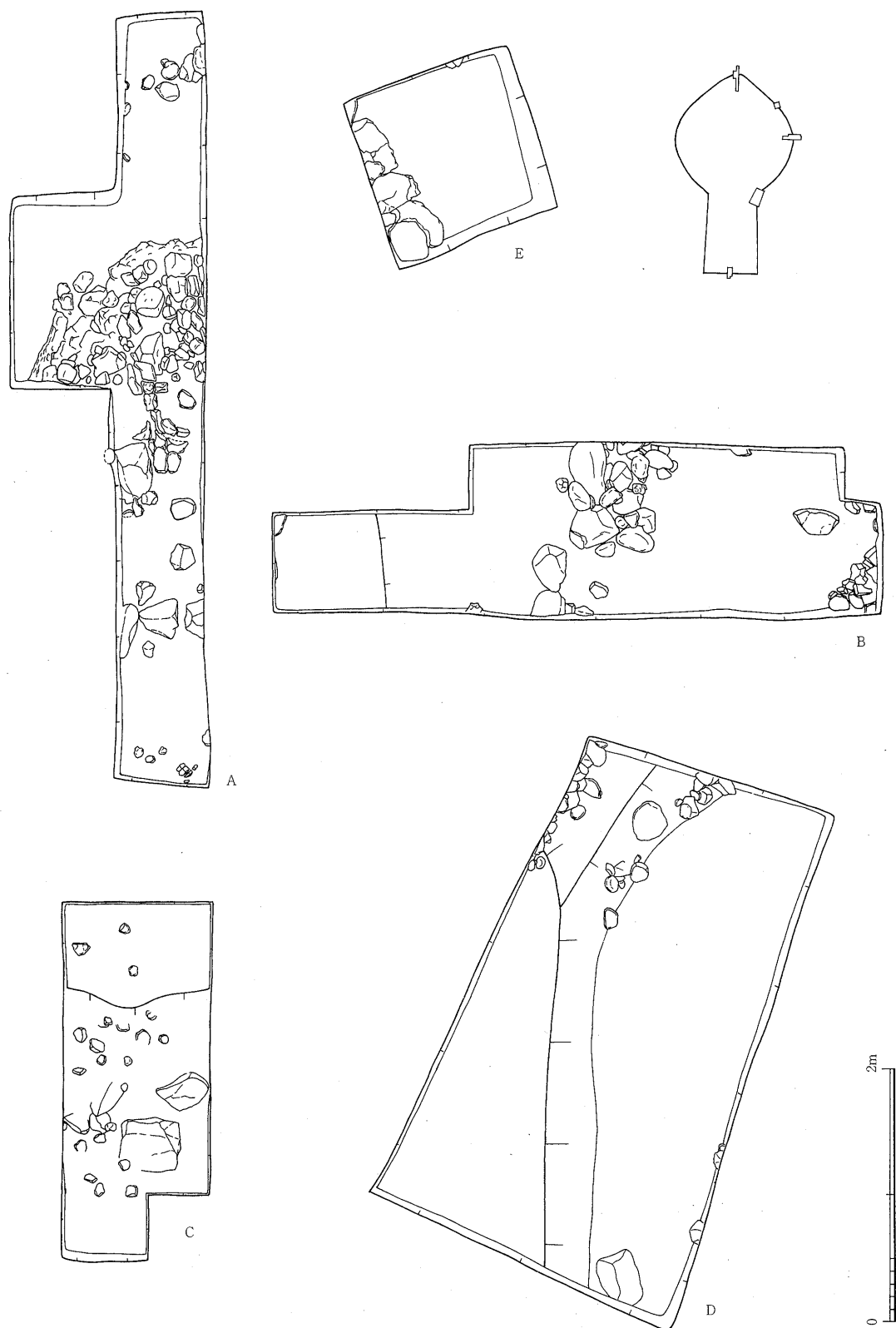
Cトレンチ 主軸方向の前方部端に設定した。当初、調査区の西側は土地境界線に合わせて設定したが、隣地地権者の好意により一部拡張した。復元基底ライン上にBトレンチ検出の石列と同様の石が1個検出された。前方部上面の傾斜変換点からこの石まではかなりの急傾斜となり、後世の改変が考えられる。

Dトレンチ 南側くびれ部に設定した。表土下約40cmは岩盤となる。葺石の転落石が多く堆積し、埴輪片も多く出土した。調査区南西隅に大きめの石が検出され、石列が転倒したものであろう。

Eトレンチ 宮地嶽の尾根線上と後円部の南東部を繋ぐ陸橋状接続部付近に設定した。基底部の石列が陸橋部の下に続き、陸橋は後世に設置されたことが確認できた。

出土遺物（第43図，図版23）

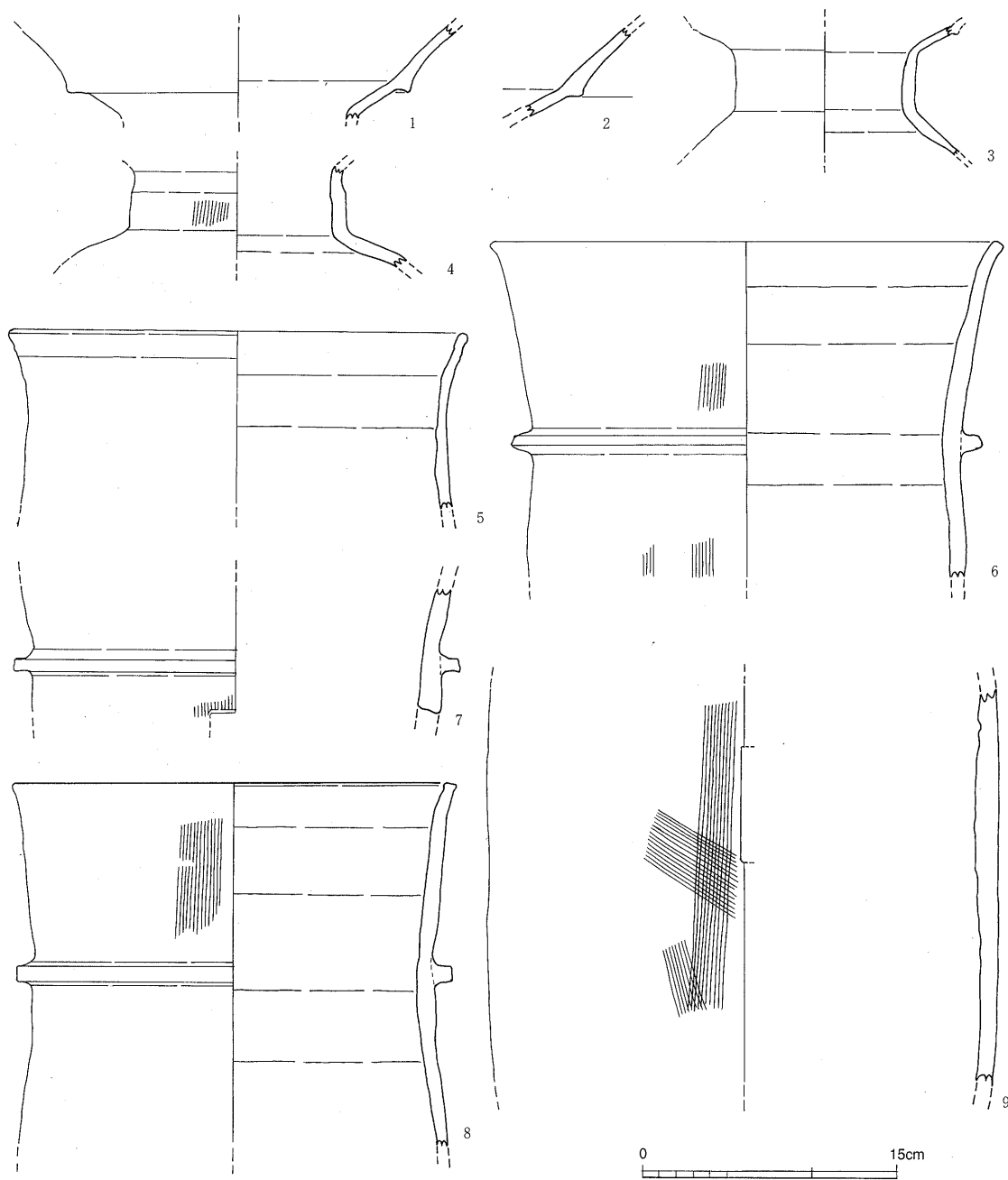
基底部付近の調査であり、すべて流れ込みである。くびれ部のDトレンチで最も多く検出した。底部資料の出土が見られず、墳丘になお残存しているかも知れない。



第41図 宮地嶽古墳トレンチ実測図 (1/50)

朝顔形埴輪 (1～4) 1・2は口縁屈曲部の資料。3・4は頸部付近の破片。底部が出土していないが、埴輪として報告する。

円筒埴輪 (5～9) 概して器壁が薄く黒斑を有している。また器高や段数が復元できる資料はない。

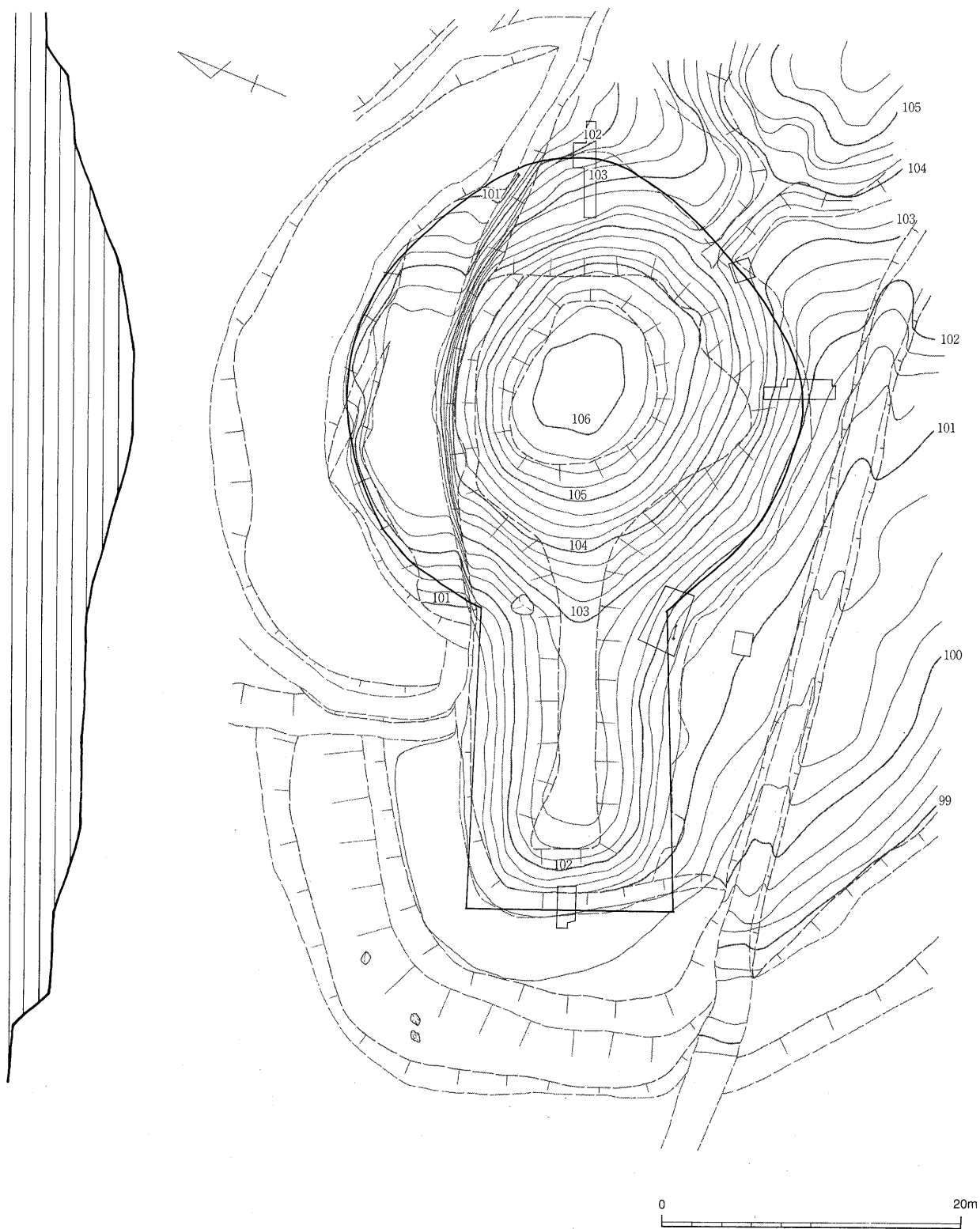


第42図 宮地嶽古墳出土遺物実測図 (1/4)

5・6は口縁部付近の資料。5は復元口径27.0cm、口縁部は緩やかに外反する。外面は摩滅により調整不明。内面はヨコ方向のケズリが認められる。6は復元口径30cm。突帯から外に開く。突帯は断面台形を呈す。外面は縦ハケ調整、内面はケズリによる調整である。7・9は長方形透かしの一辺を含む。

宮地嶽古墳の墳丘復元

宮地嶽古墳調査会による墳丘復元案を基に調査を行った結果、古墳の北側については果樹園であり未調査であるが、復元案をほぼ追認する結果となった。墳丘北側については果樹園造成により大きく改変されていると思われるが、北側を意識していると考え、墳形は左右対称でない可能性も高い。南側については、墳裾に直径50cm前後の安山岩の石が並べられていたと思われる。同程度の石は宮地嶽古墳



第43図 宮地嶽古墳墳丘復元図 (1/400)

の現墳裾付近に数個露出している。合計5カ所のトレンチによる調査であり、墳形・規模の基本部分はほぼ解明できたものの、墳丘の端部確認を目的としたため盛土の状況等は確認していない。また、後円部頂部に所在するであろう主体部は手つかずのままであり、大規模ではないものの、甘木・朝倉地方の保存状態の良い前期古墳として今後も興味深く研究する必要がある。

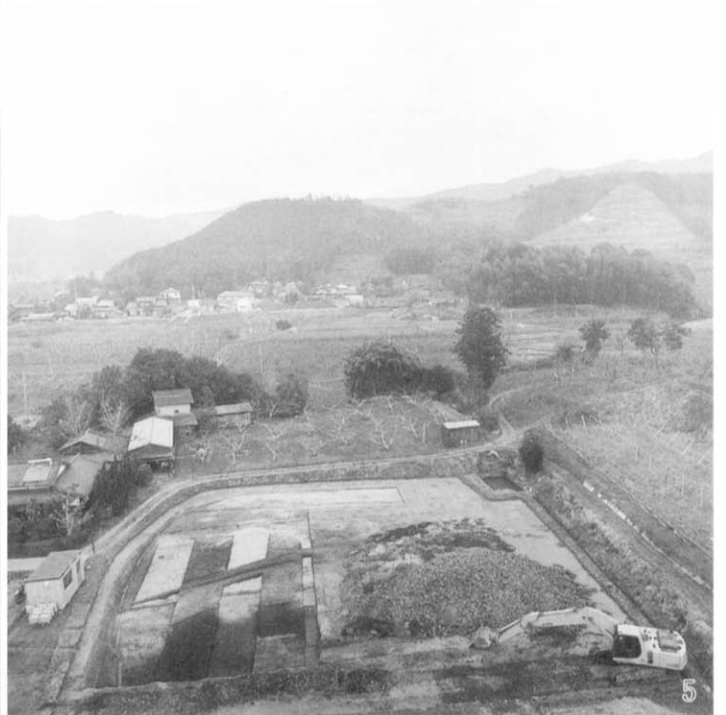
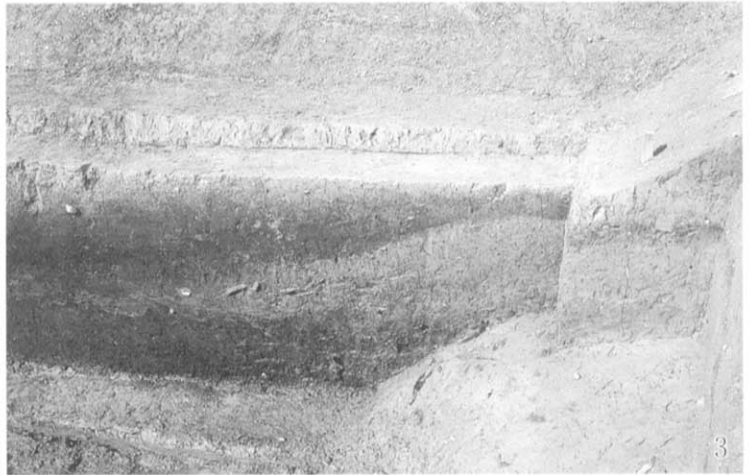
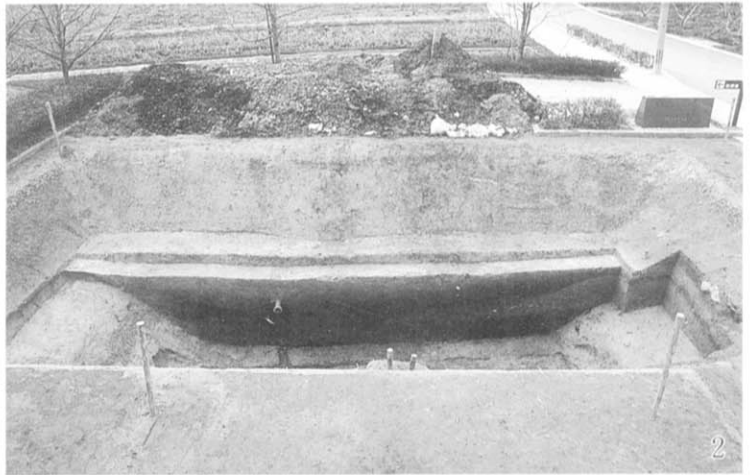
図 版



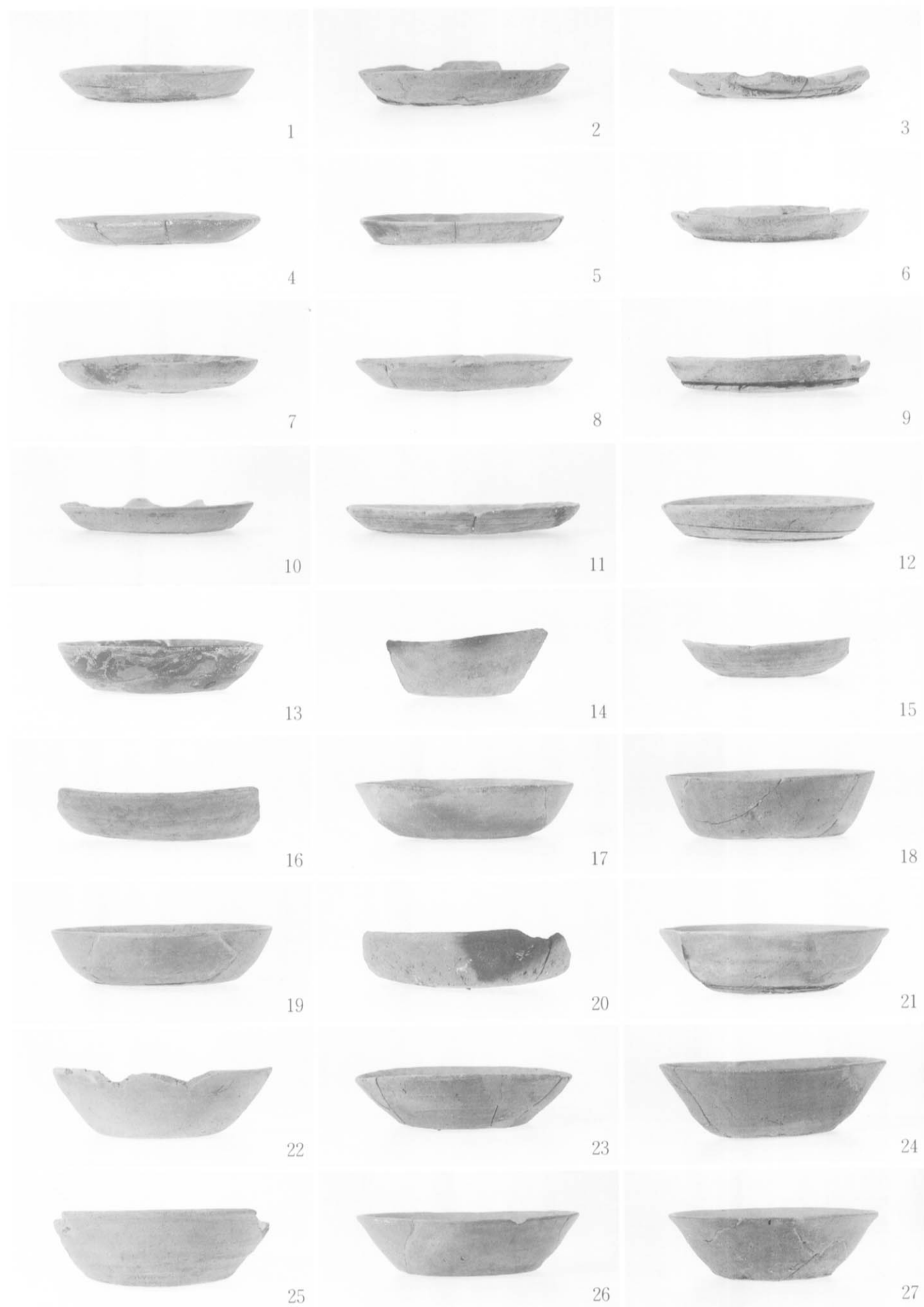
1 宮地嶽より長安寺集落を望む
2 第7次調査全景（西から）

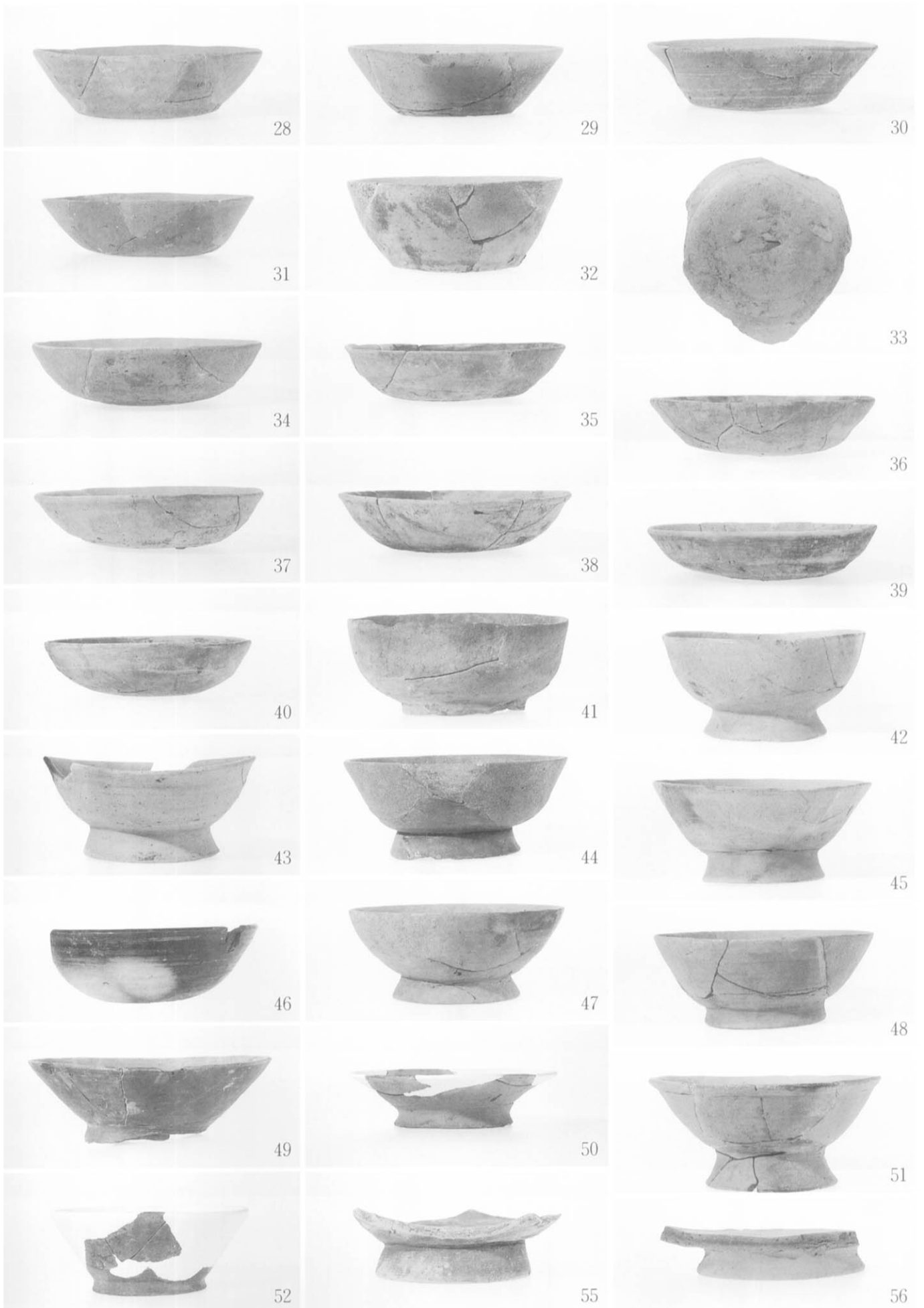


- 1 第7次調査遺物出土状況
- 2 第8次調査（南から）
- 3 第8次調査（西から）

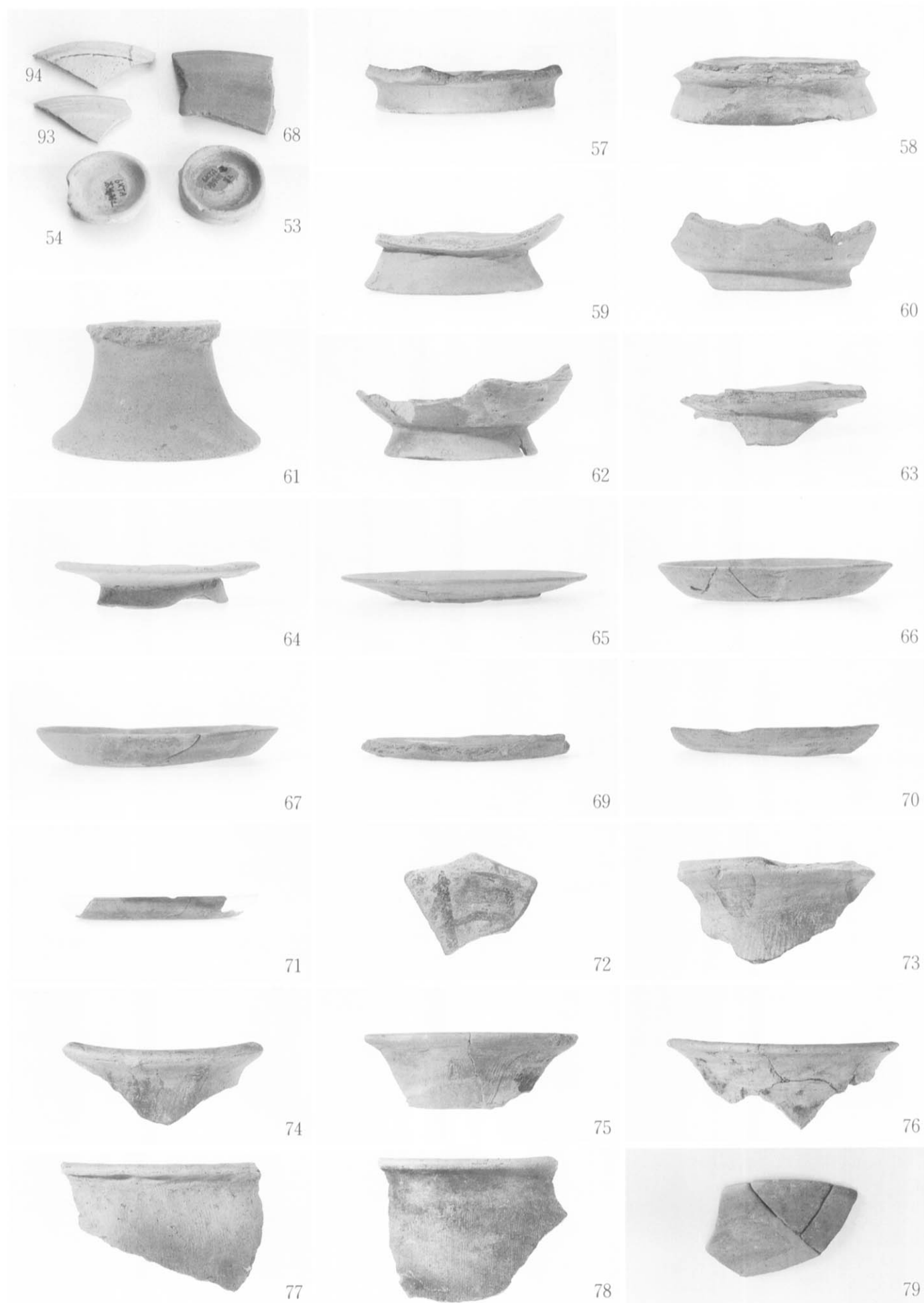


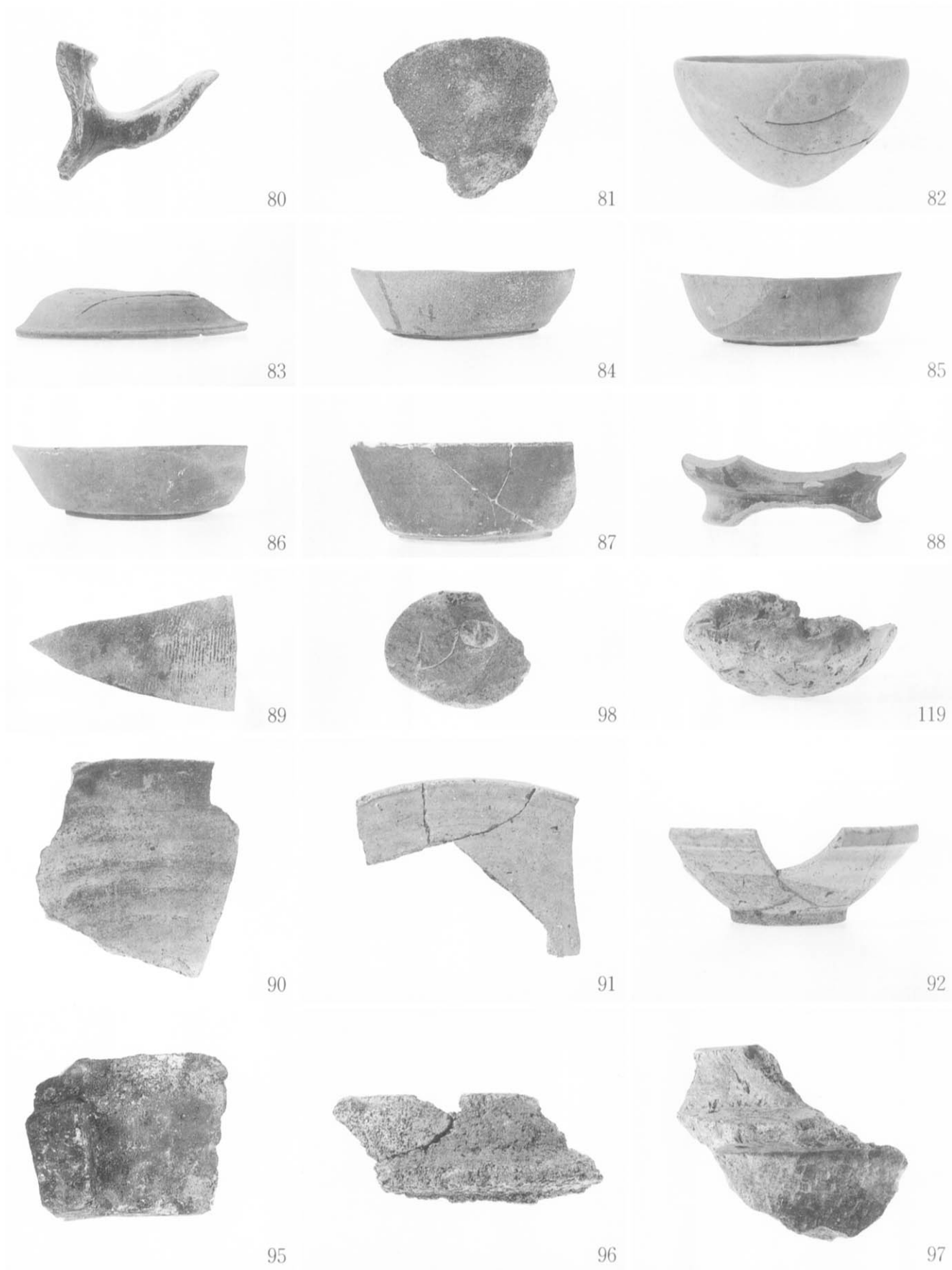
- 1 第8次調査柱列検出状況
- 2 第9次調査大溝断面
- 3 第9次調査粘質土流れ込み状況
- 4 第11次調査（東から）
- 5 第12次調査（南から）



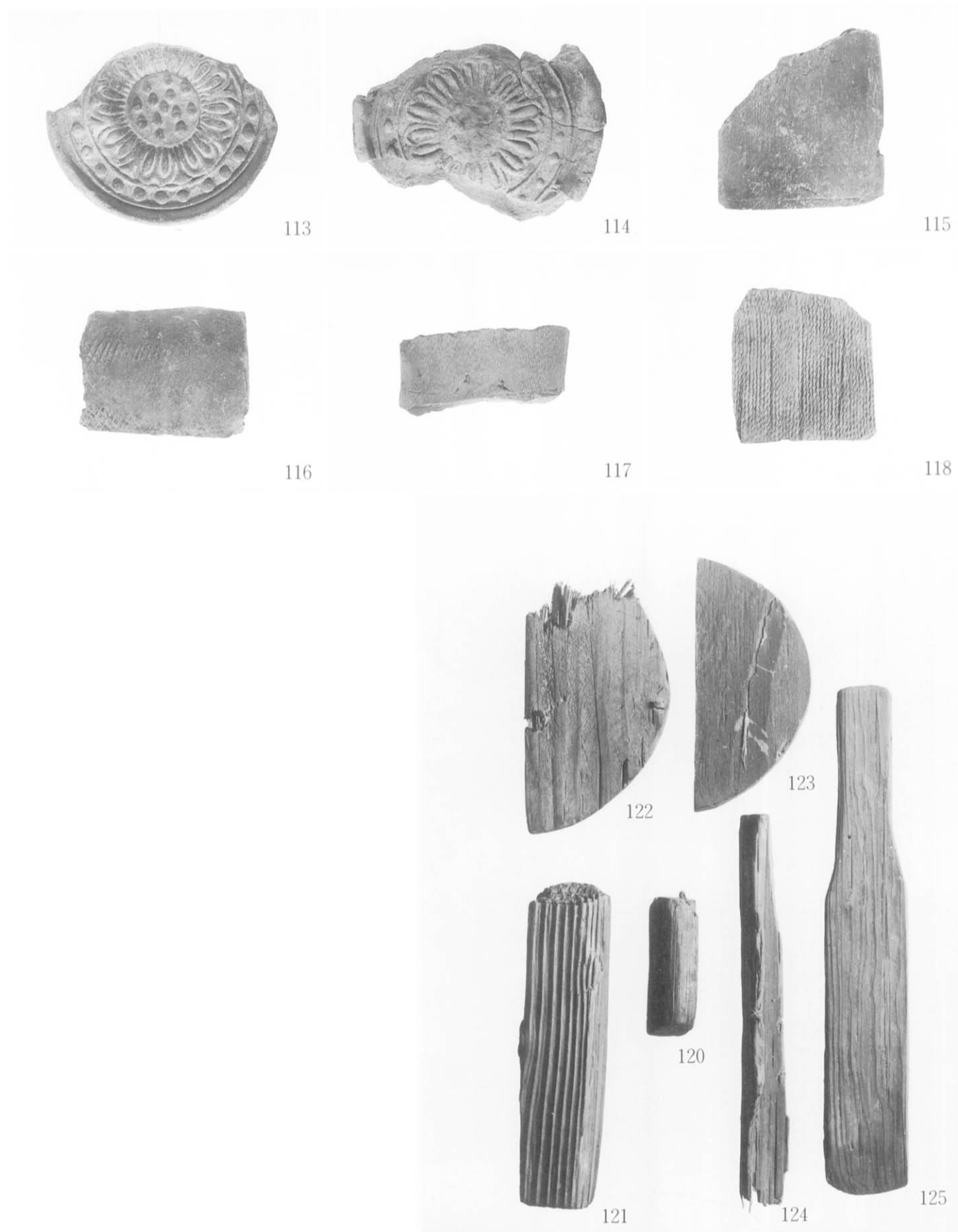


第7次調査出土遺物②

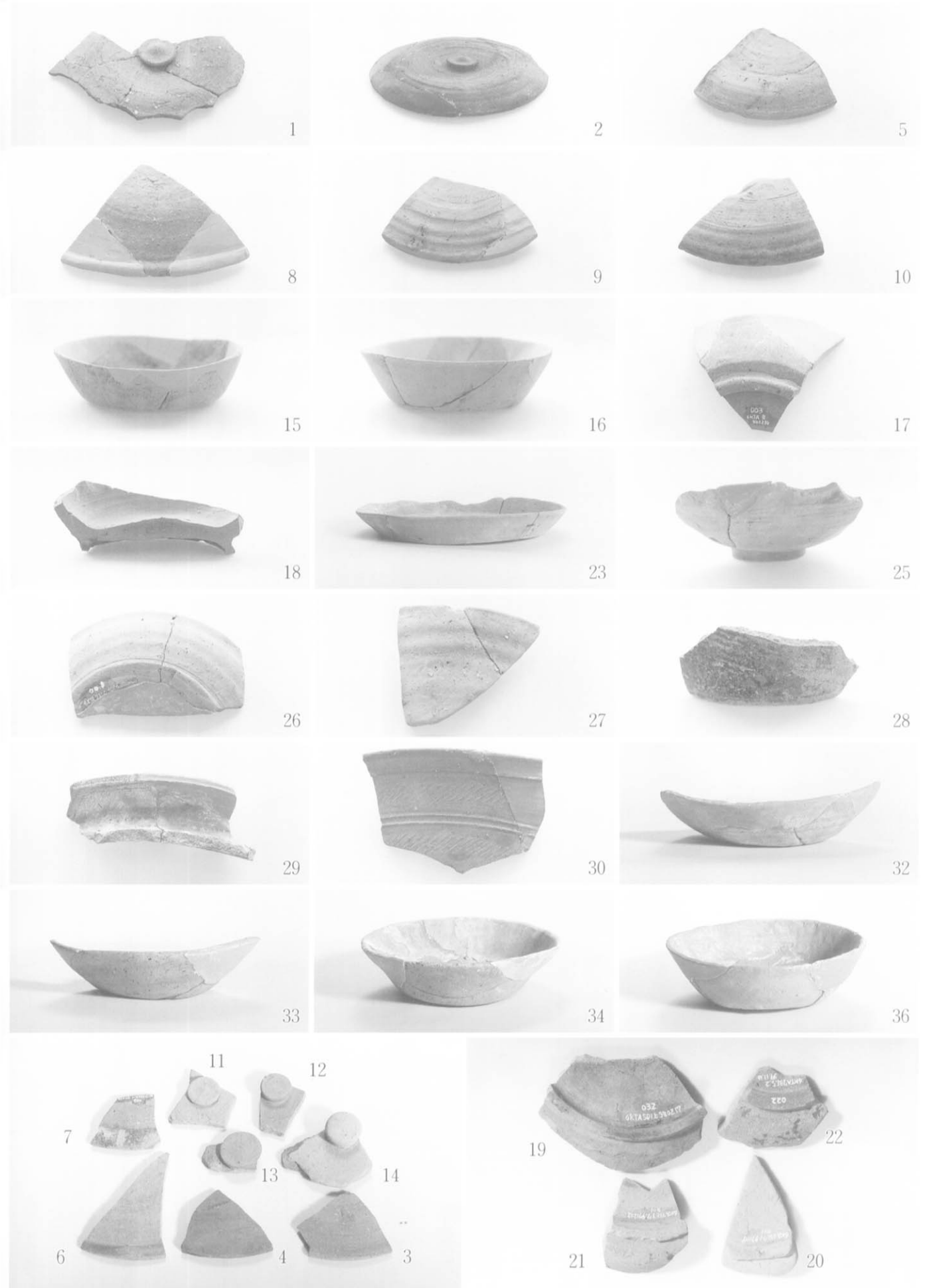




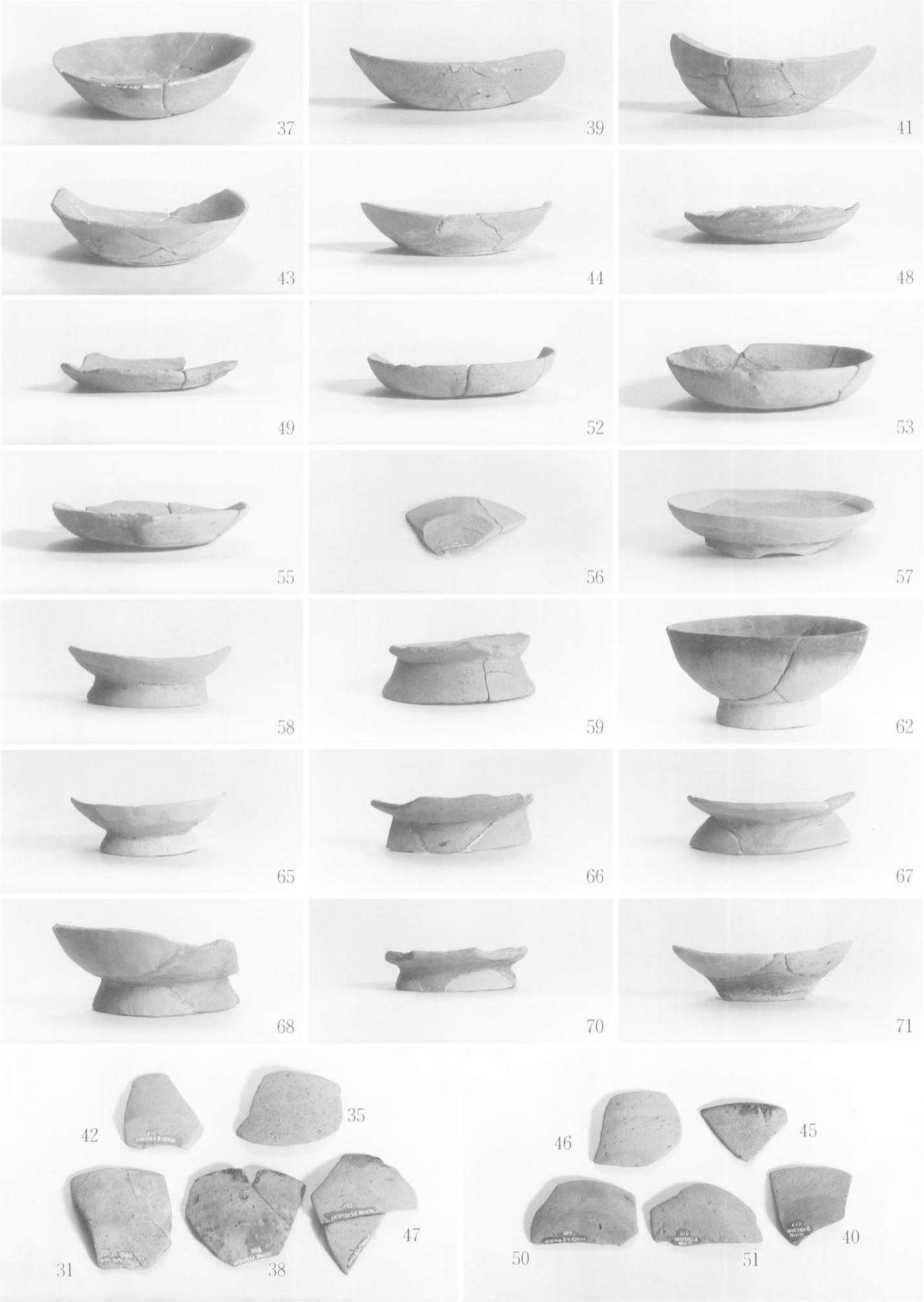
第7次調査出土遺物④

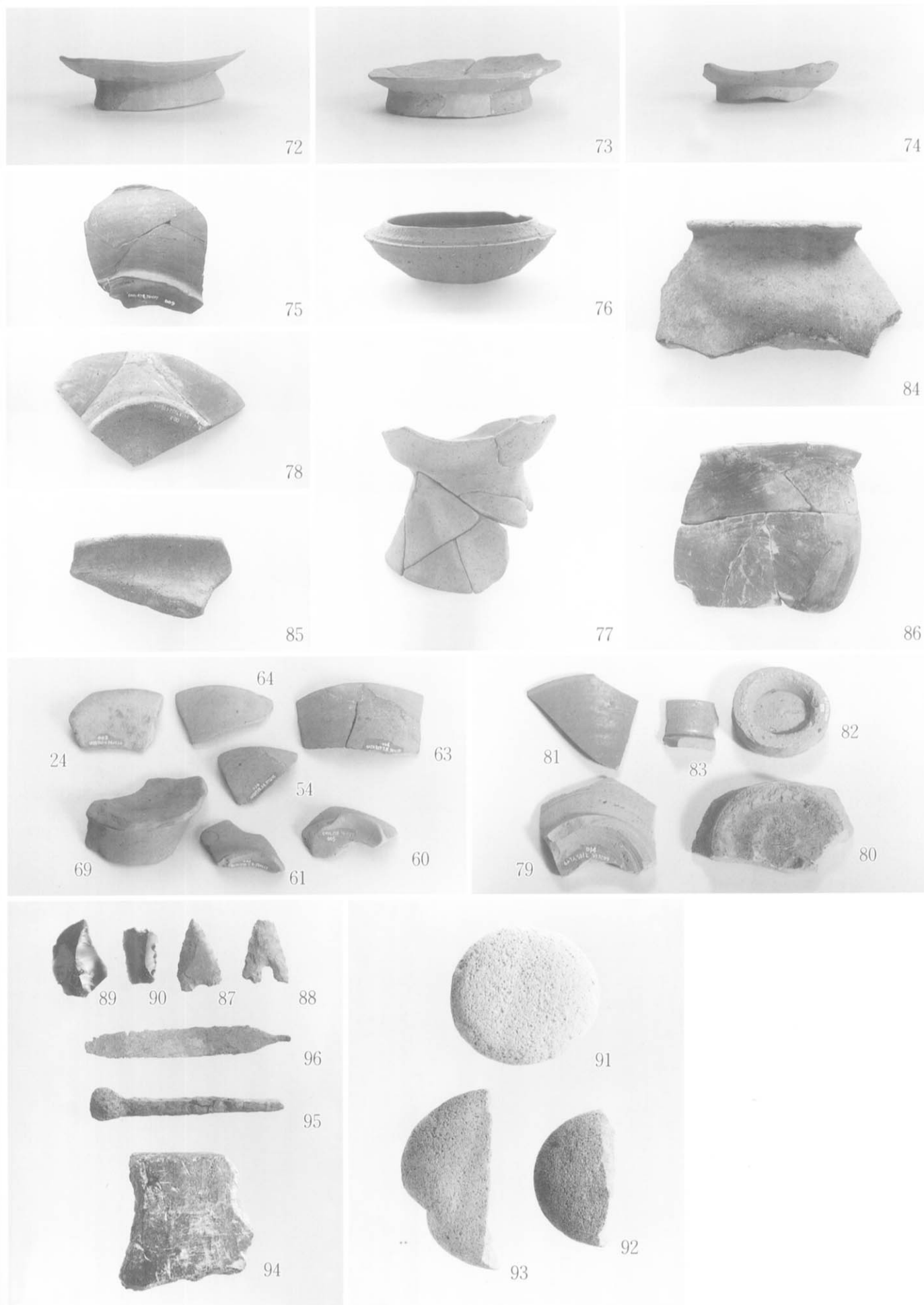


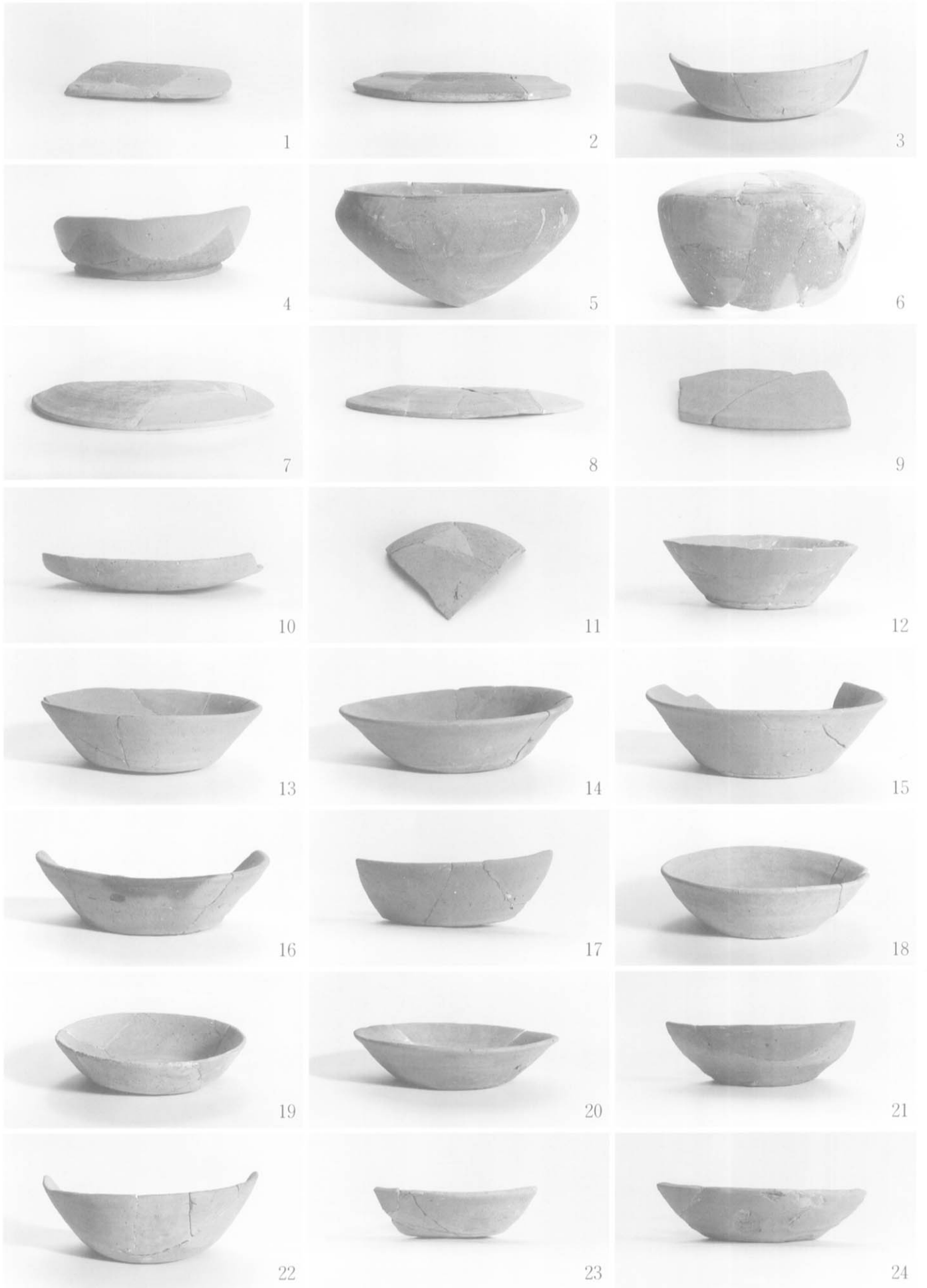
第7次調査出土遺物⑤

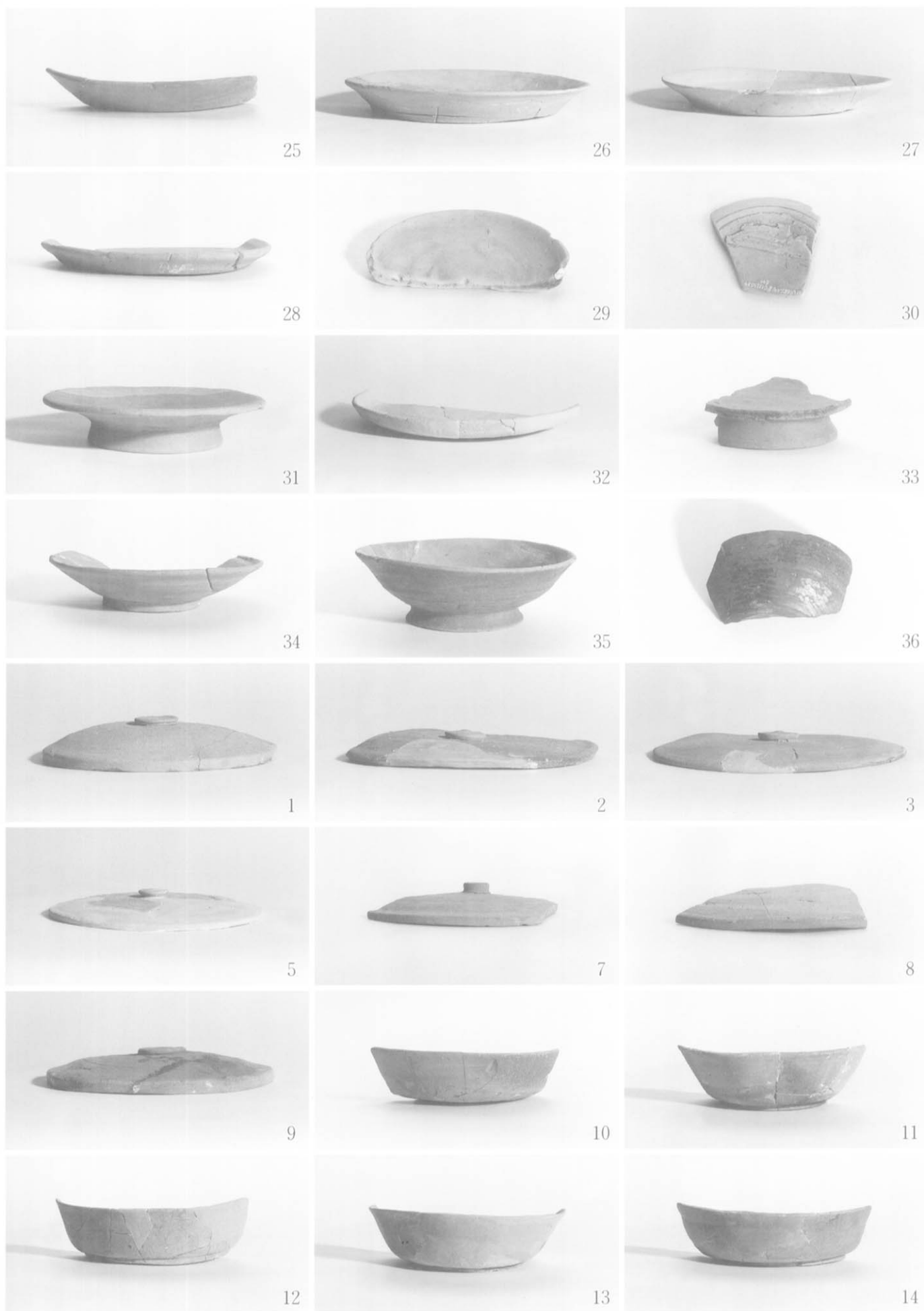


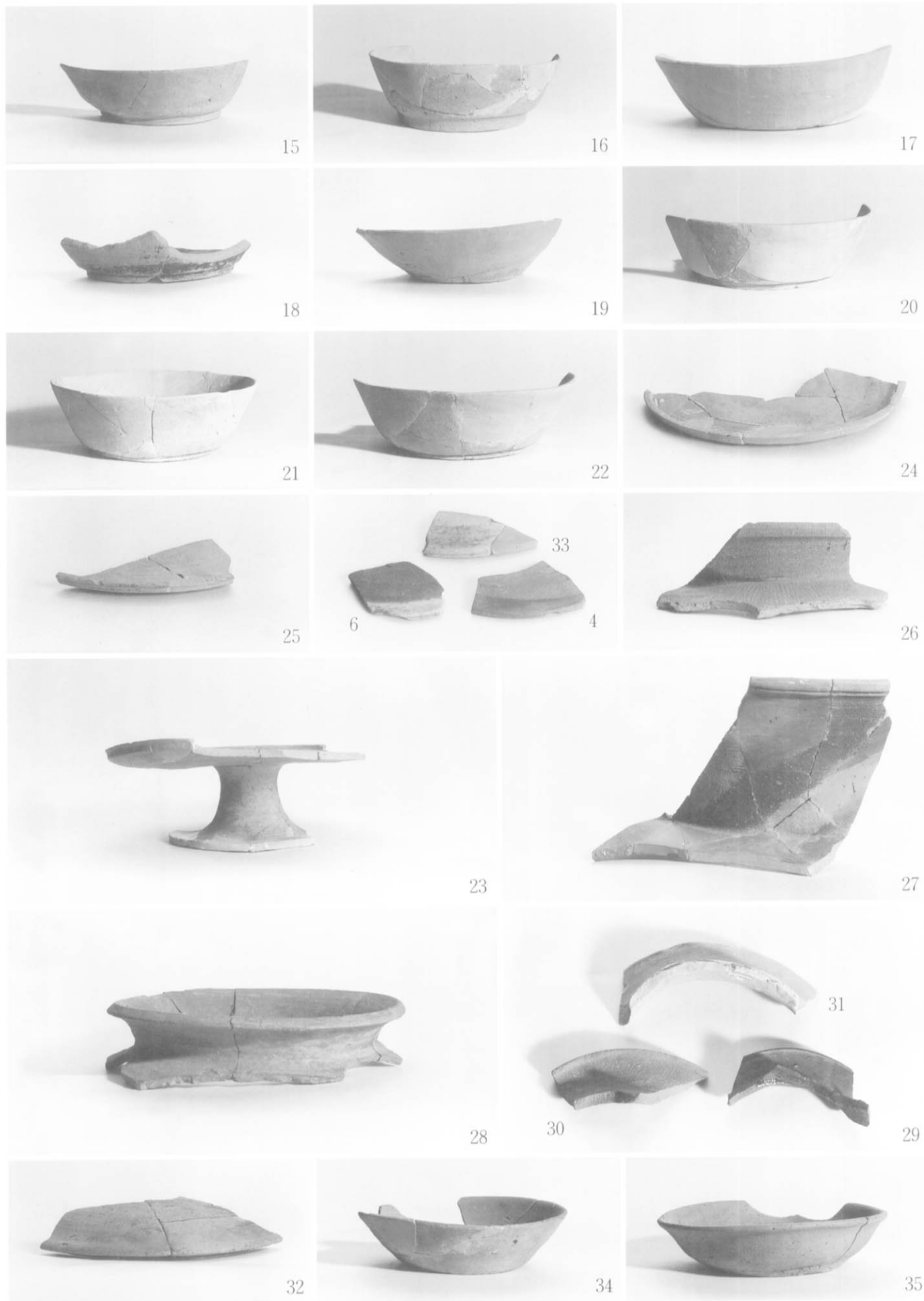
第8次調査出土遺物①

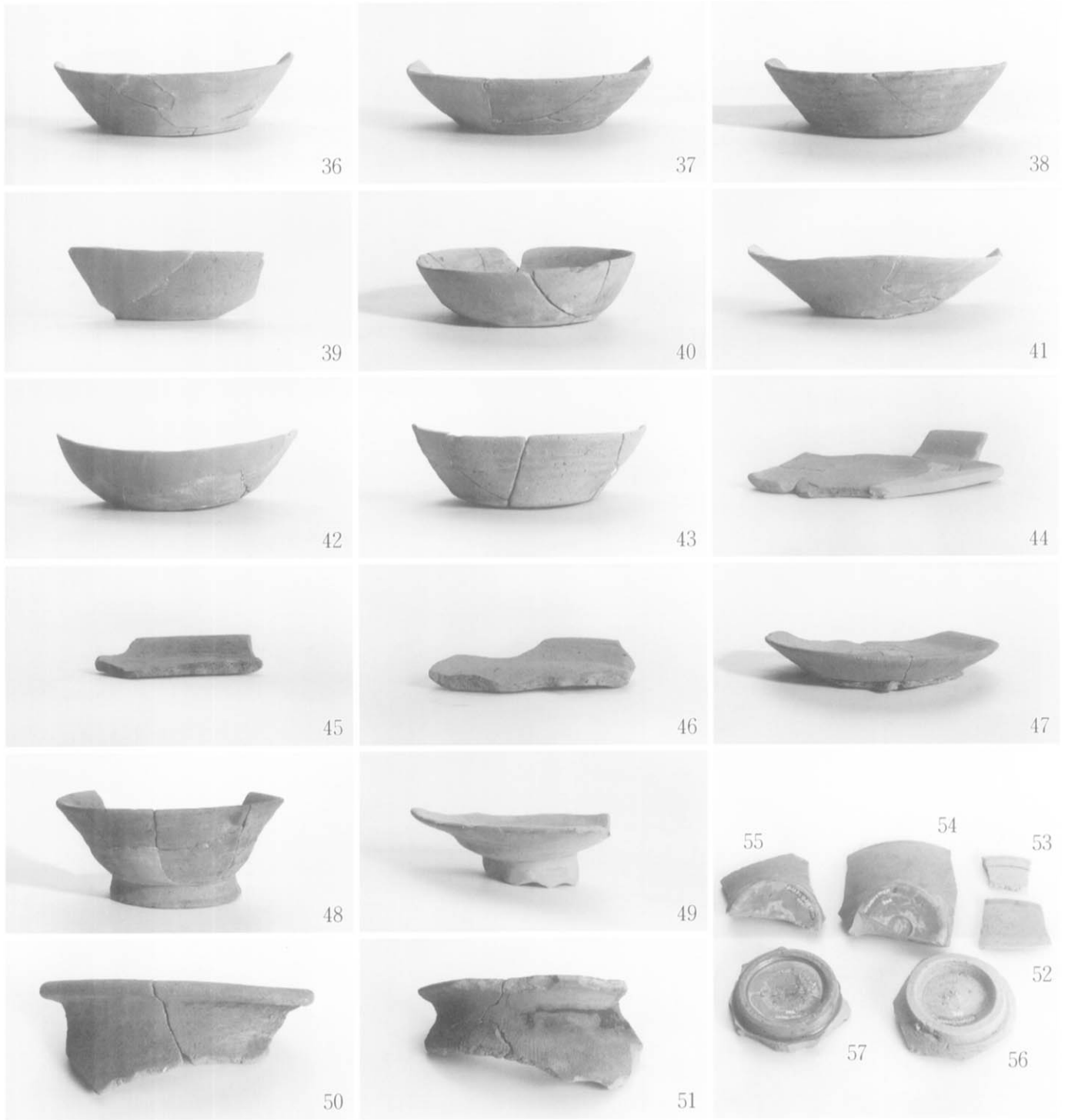




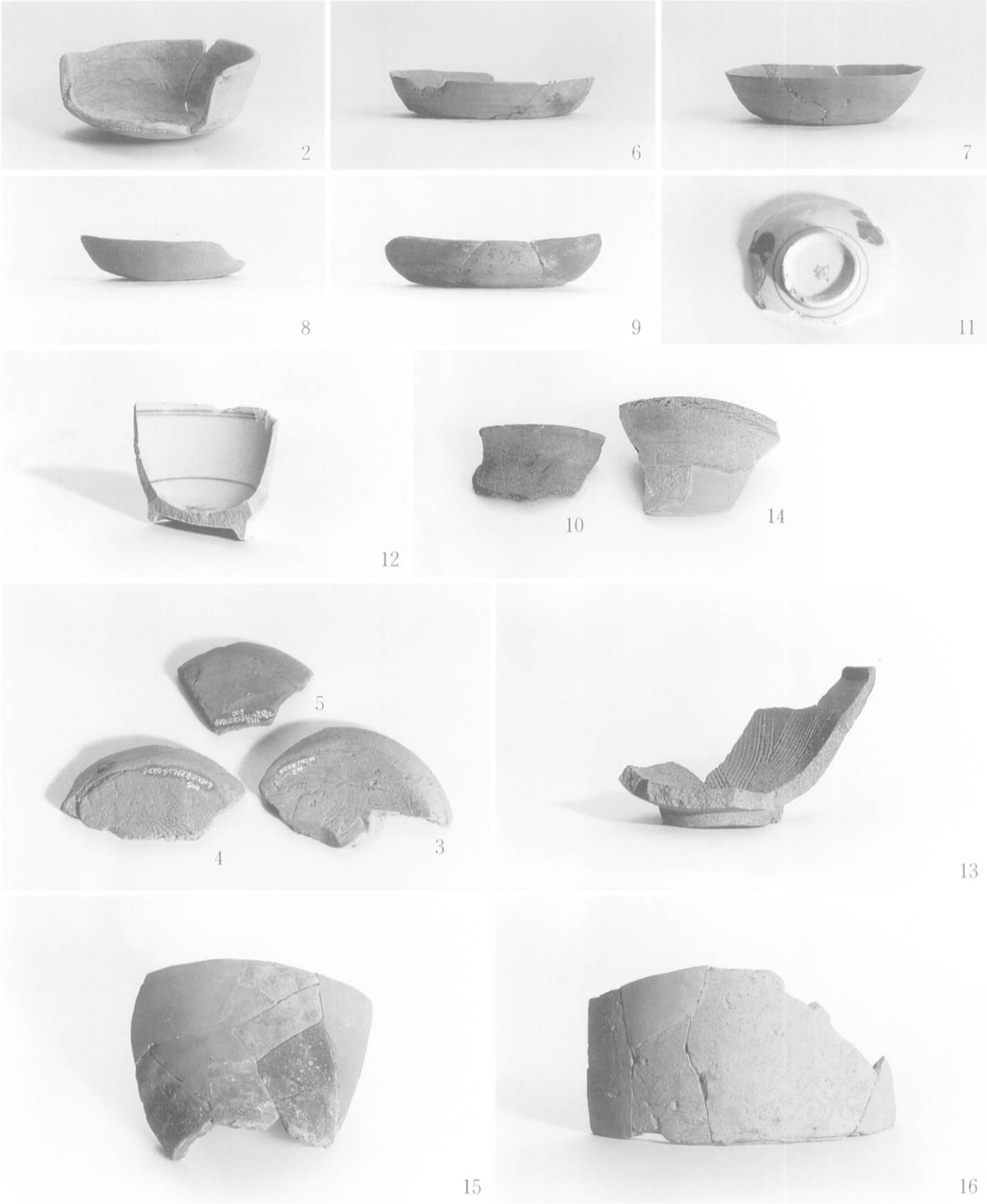




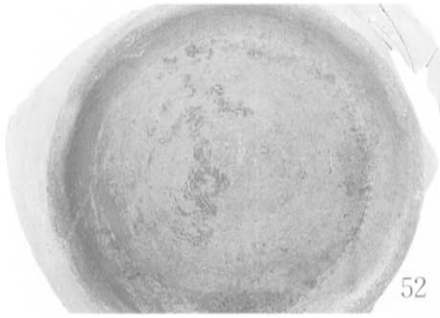




第11次調査出土遺物③



第12次調査出土遺物



52



60



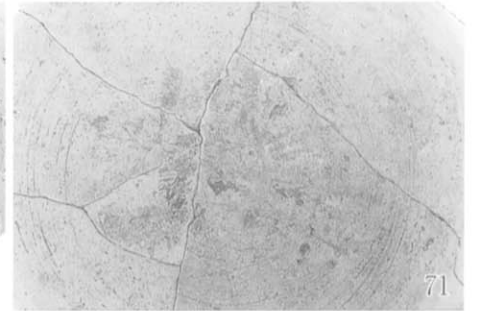
63



69



70



71



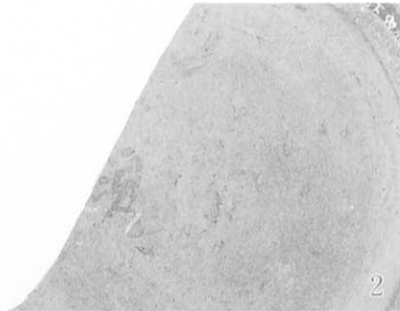
72



85



1



2



3



4



5



6



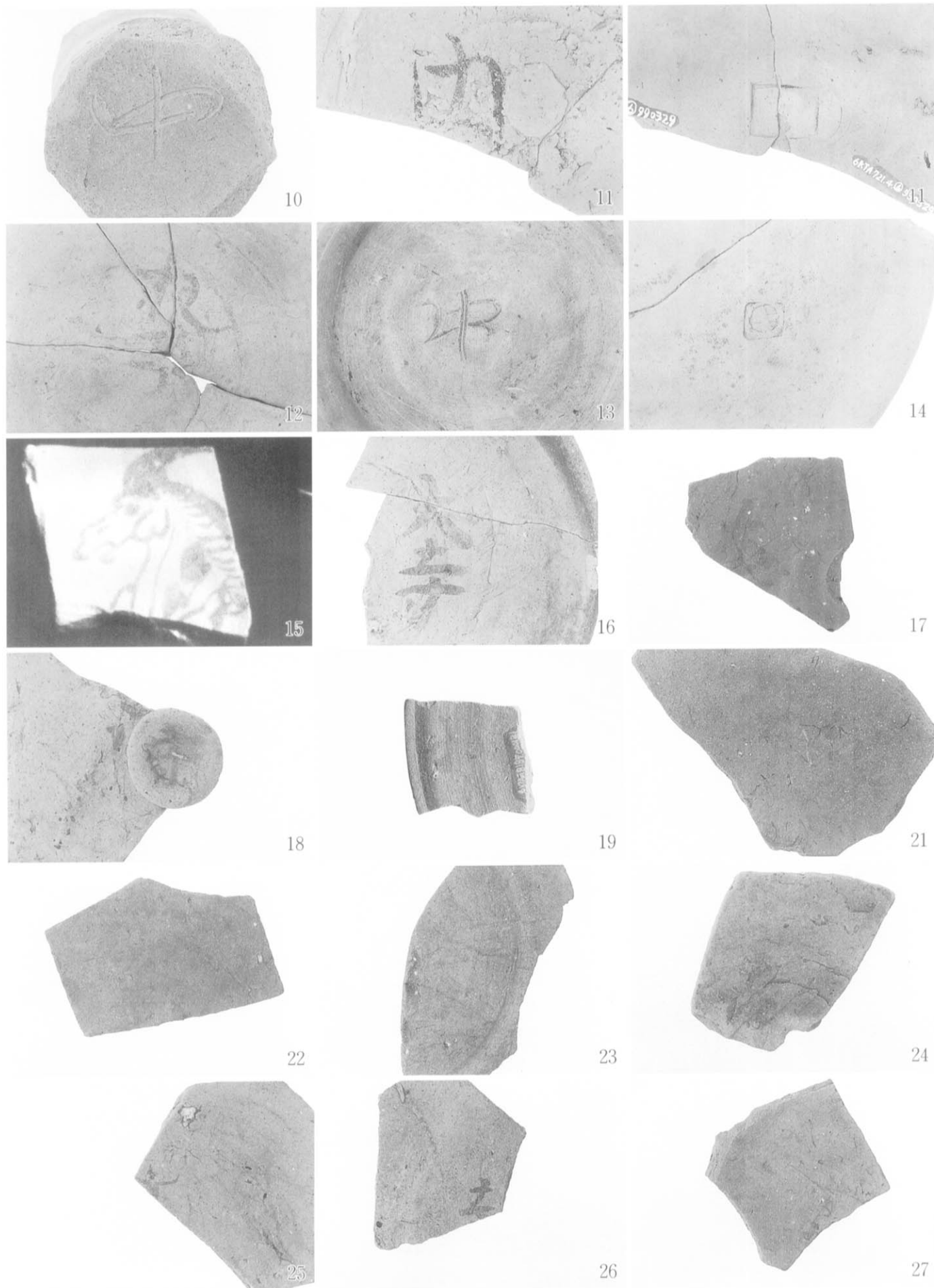
7

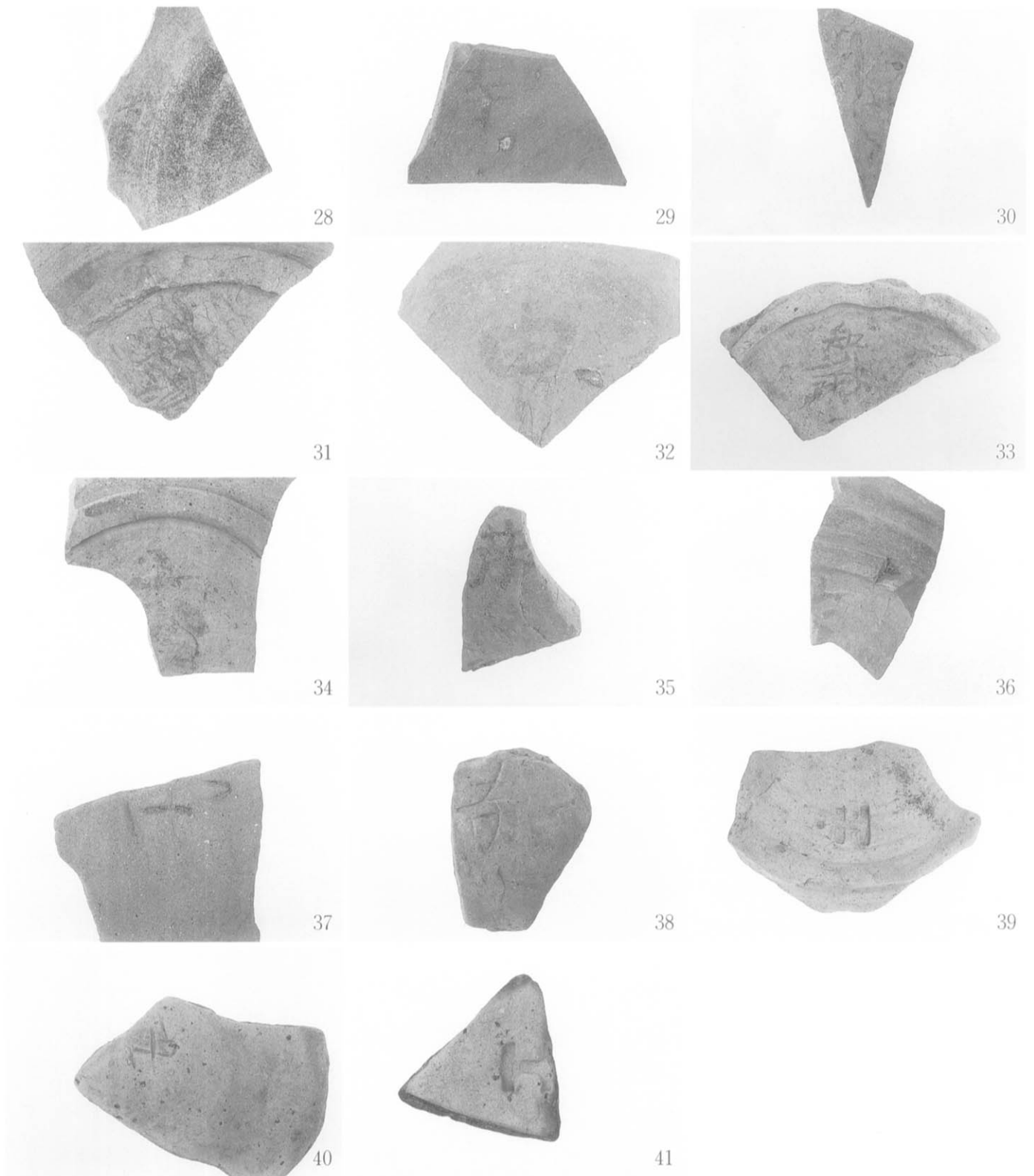


8

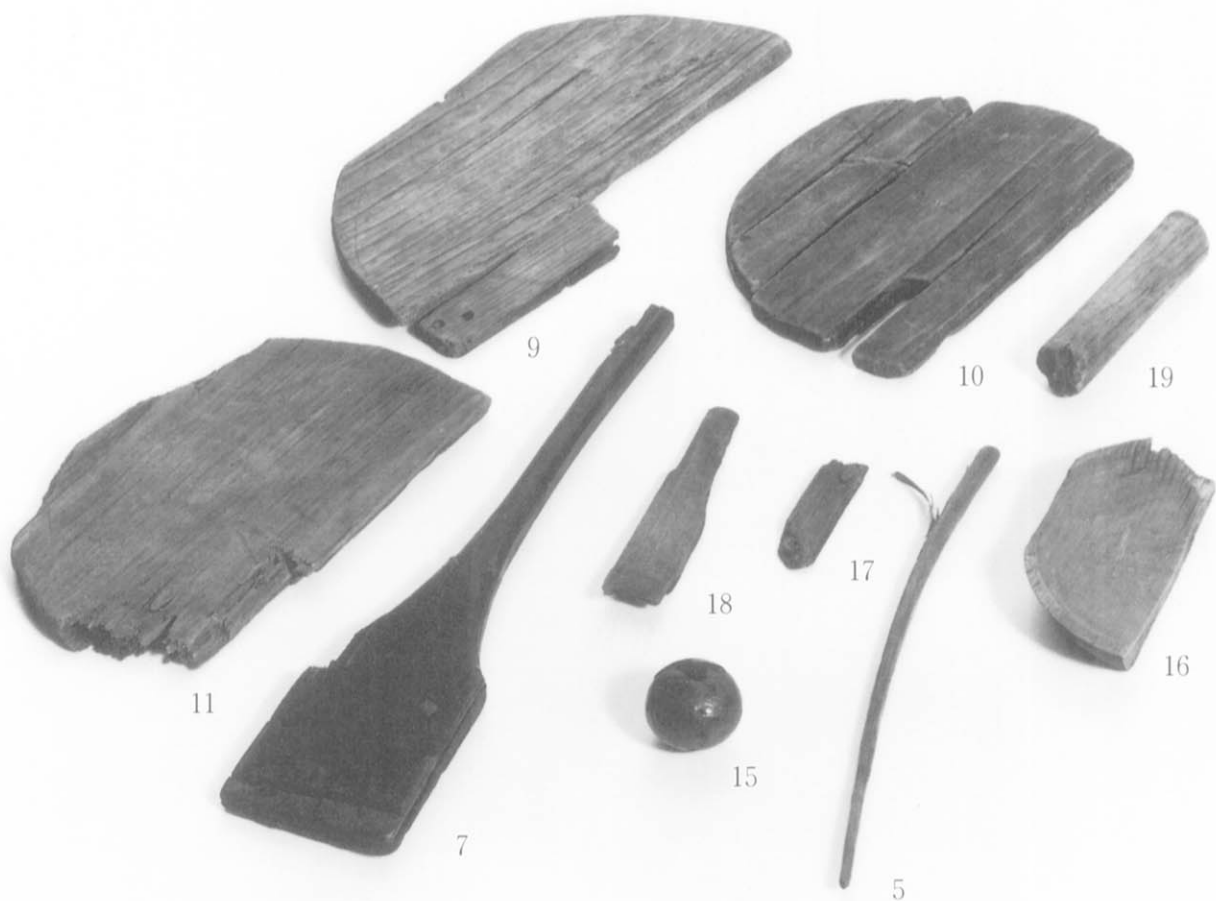
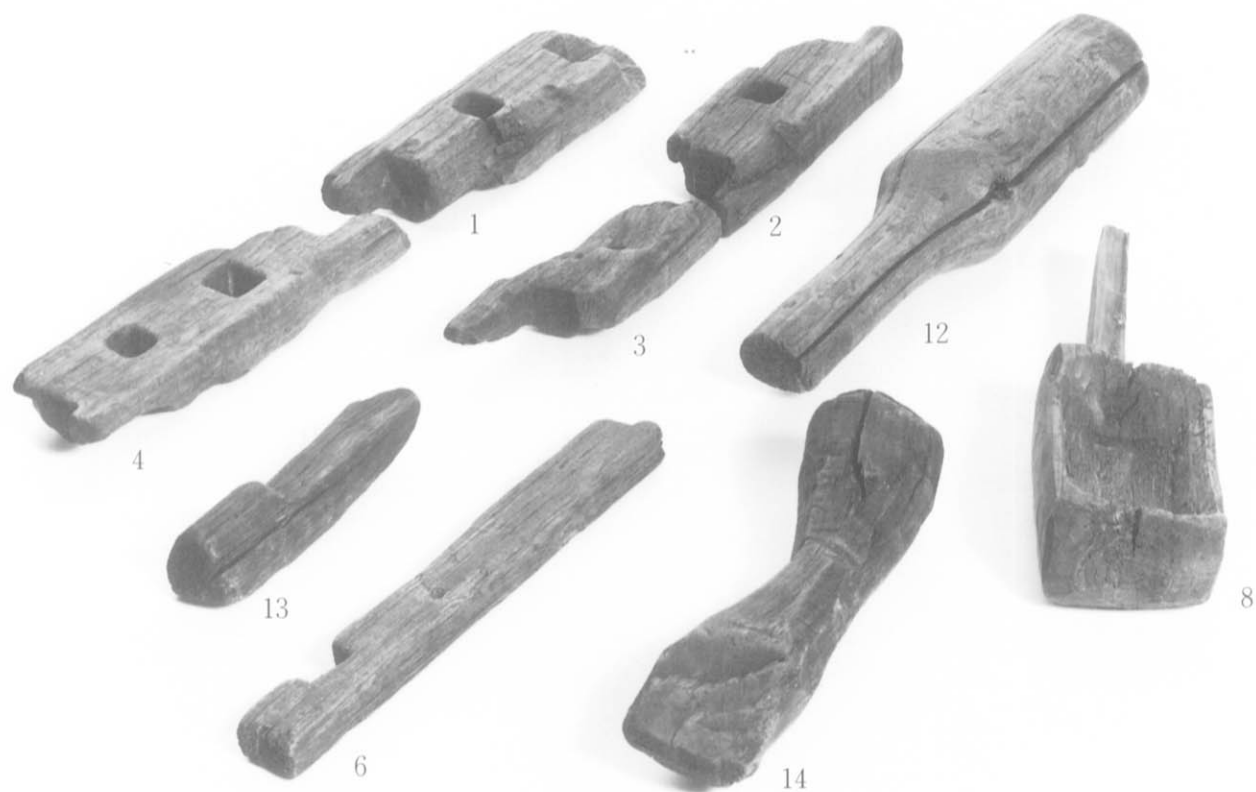


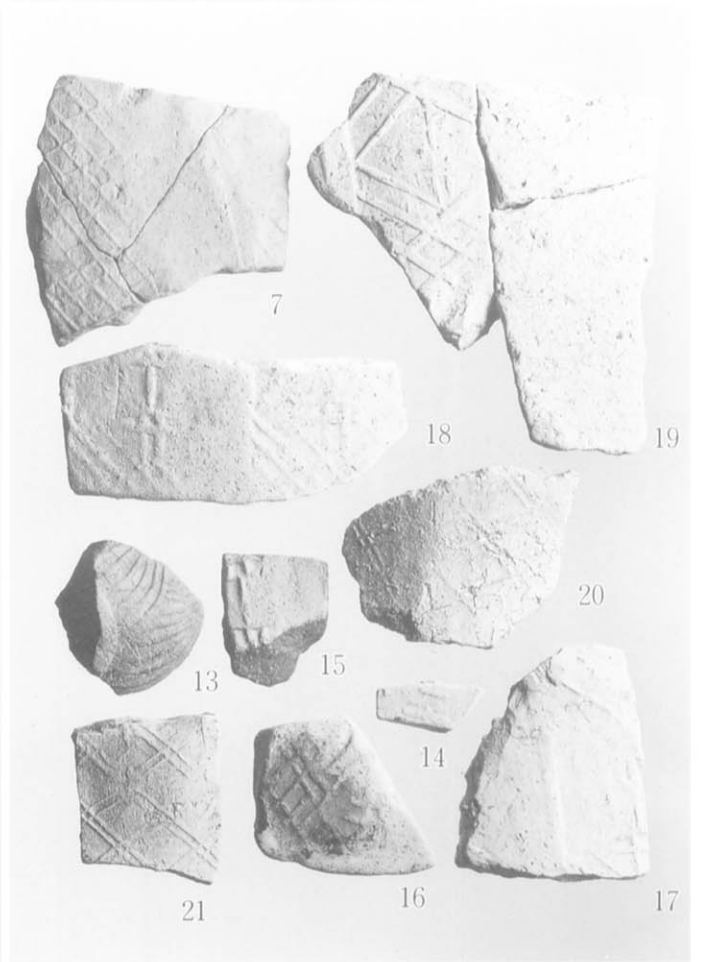
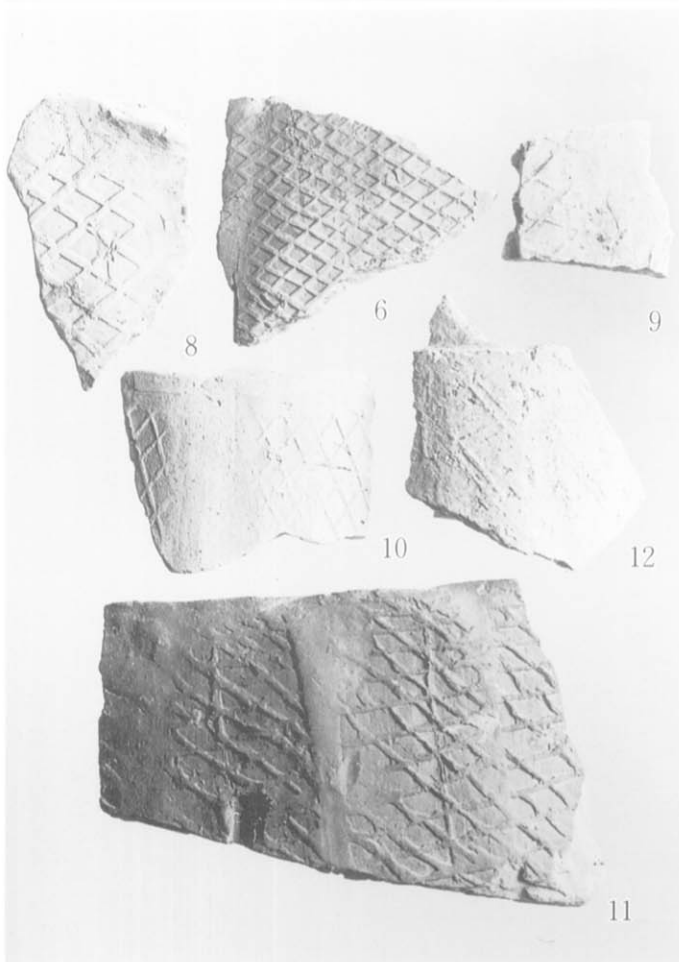
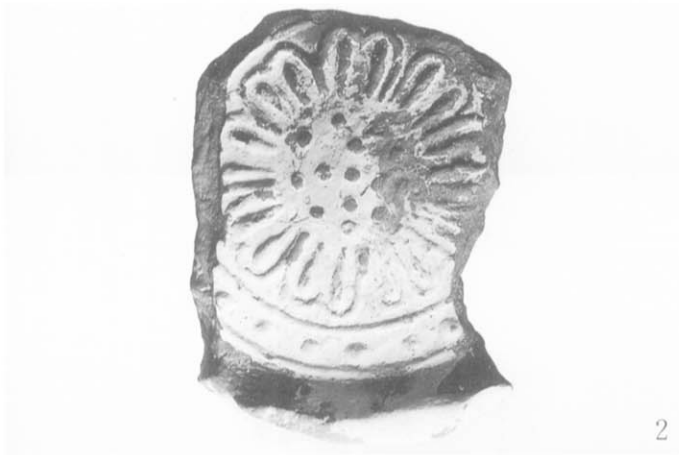
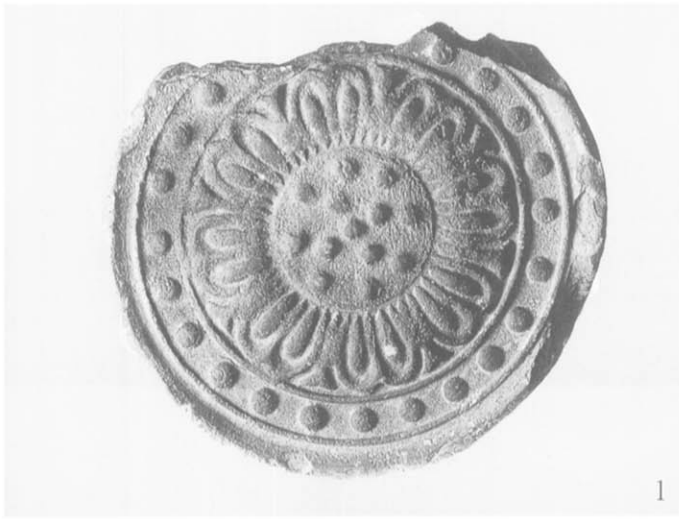
9

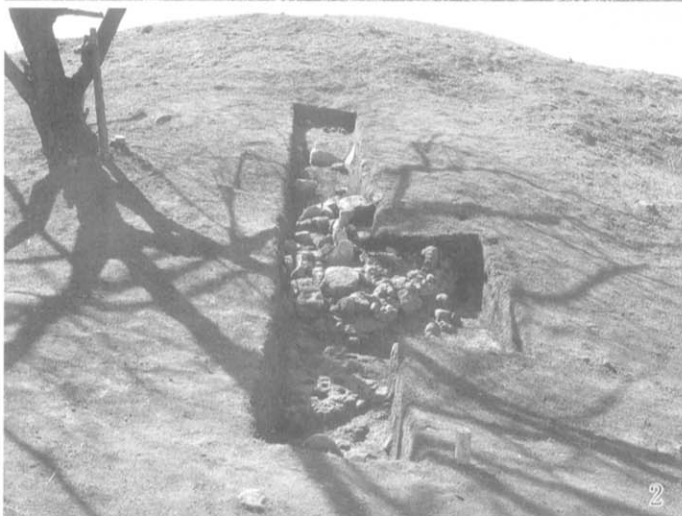




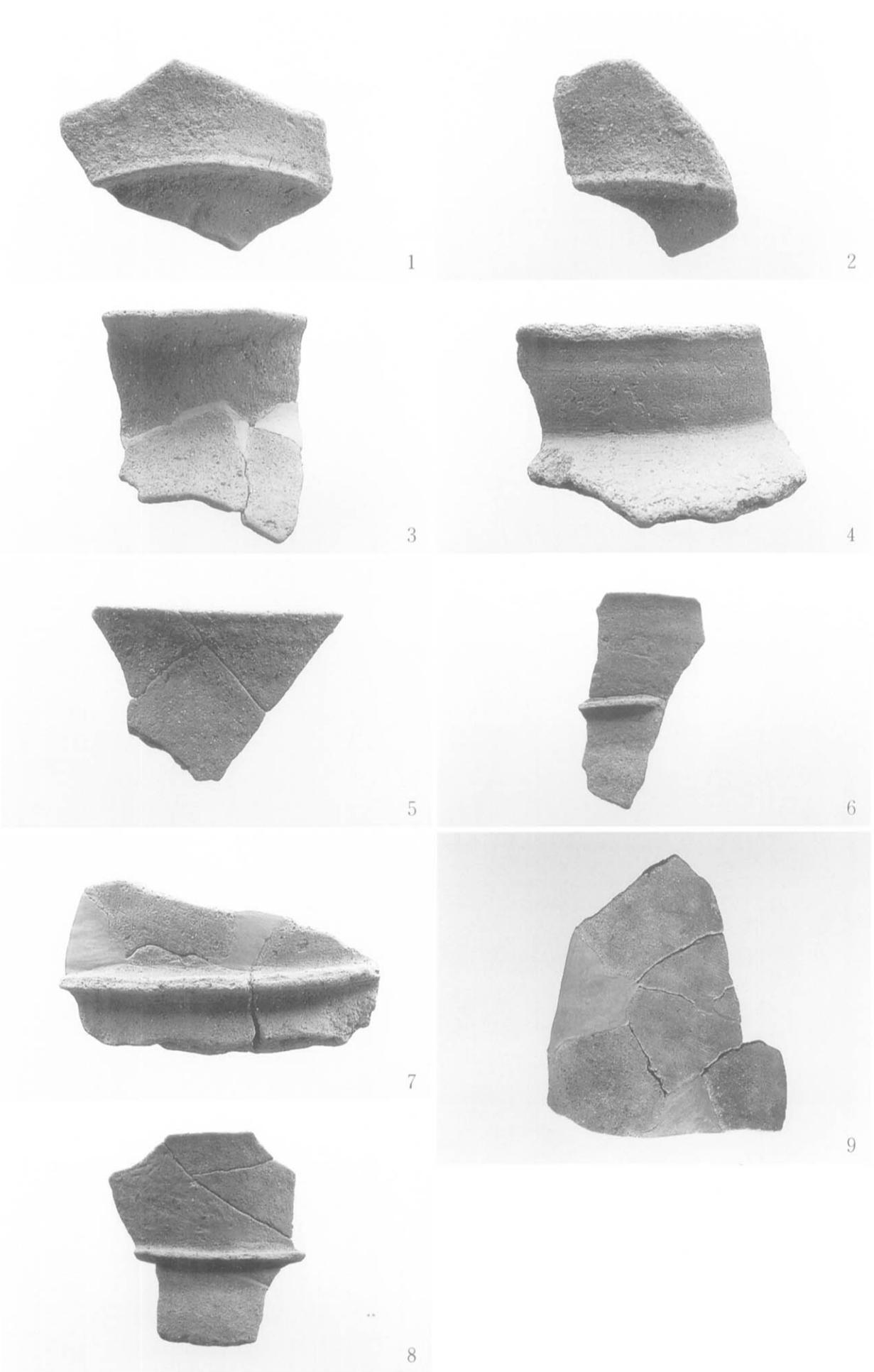
第8～11次調査出土墨書土器③







1 宮地嶽古墳全景（南から） 2 Aトレンチ 3 Bトレンチ 4 Cトレンチ 5 Dトレンチ



宮地嶽古墳出土埴輪

報告書抄録

ふりがな	ちょうあんじはいじあと・みやちだけこふんぐん						
書名	長安寺廃寺跡 宮地嶽古墳群						
副書名							
巻次							
シリーズ名	朝倉町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第10集						
編著者名	姫野健太郎 赤司善彦						
編集・発行機関	朝倉町教育委員会						
所在地	福岡県朝倉郡朝倉町大字宮野1997						
発行年月日	西暦2002年 3 月31日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 面積	調査 原因
ちょうあんじはいじあとだいななちようさ 長安寺廃寺跡第7次調査	朝倉町 大字須川	404420	570092	33° 23′ 23″	130° 45′ 31″	9㎡	範囲 内容 確認
ちょうあんじはいじあとだいちちちようさ 長安寺廃寺跡第8次調査						377㎡	
ちょうあんじはいじあとだいくじちようさ 長安寺廃寺跡第9次調査						28㎡	
ちょうあんじはいじあとだいいゅうちちようさ 長安寺廃寺跡第10次調査						85㎡	
ちょうあんじはいじあとだいいゅういちちようさ 長安寺廃寺跡第11次調査						239㎡	
ちょうあんじはいじあとだいいゅうにじちようさ 長安寺廃寺跡第12次調査						420㎡	
ちょうあんじはいじあとだいいゅうさんじちようさ 長安寺廃寺跡第13次調査						3㎡	
ちょうあんじはいじあとだいいゅうよんじちようさ 長安寺廃寺跡第14次調査						68㎡	
みやちだけこふん 宮地嶽古墳	朝倉町 大字宮野	404420	570035	33° 23′ 25″	130° 46′ 25″	25㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
長安寺廃寺跡		奈良 平安	大溝	須恵器 土師器 瓦	木簡・墨書土器		
宮地嶽古墳		古墳		埴輪			

長安寺廃寺跡 宮地嶽古墳群

朝倉町文化財調査報告書 第10集

平成14年 3 月31日

発行 朝倉町教育委員会
福岡県朝倉郡朝倉町大字宮野1997

印刷 株式会社西日本新聞印刷